
優等生は黒の魔術士

びやく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優等生は黒の魔術士

【Nコード】

N2519U

【作者名】

びゃく

【あらすじ】

【第1章】魔力属性判定試験。毎年学院の恒例行事として行われ、また一人前の魔法使いになる為の通過点でもあるこの試験で、ブリュード・エクスマギナは前代未聞の不可解な結果を残してしまう。そんな彼に学院長が下したのは、ある壮絶な内容の課外授業だった。

【第2章】“怨嗟の傀儡”バジエム。最凶の魔物出現の報を受け、シエリアはヴェリアと共に行ってしまった。残された今の自分には、一体何が出来るのか。再会を果たしたアイナと行動を共にし、遂に

ブリュードは決断を下す。

第3章からは、これまでのシリアスな内容から一変したハーレム生活
がスタートします。その日常の中で、徐々にブリュードの魔力の秘
密や、アイナが越界してしまった理由が明らかになって行きます。
今はその為の下積み & amp ; 伏線バラマキの真っ最中ですので、
是非お楽しみに。

登場人物紹介（前書き）

現在の話数までに登場した主要キャラクター達の紹介コーナーです。

本編をお読みになって頂いている内に、「あれ、コイツ誰だっけ…
…」という状態に陥った際などに、是非是非ご活用下さい。お話の
核心に関わるような重大な情報は避けておりますが、新規に本作品
に目を通して頂く方などは、ネタバレになる可能性も含んでいると
いうことをご了承下さいませ。

このコーナーは本編が進むごとに、随時更新していく予定です。

登場人物紹介

【ブリユード・エクスマギナ】

主人公。白髪が特徴の少年。年齢は18歳。両親という存在が居らず、その消息は不明。幼い頃にアミックスハート高等魔法学院に引き取られて以後、ずっとその寮で暮らしてきた。他の生徒たちを遥かに凌ぐ魔法の実力を持つ為、学院内では浮いた存在である。唯一の親友はシエルのみ。ある事件が切っ掛けとなり、課外授業を受けるとべく生まれて初めて旅に出ることになる。悪を許さない、正義感の強い性格の持ち主。

【シエル・マストリッジ】

燃えるような赤い髪が特徴の少年。ブリユードの親友。18歳。幼い頃から学院の寮に住んでいる。クラスメイトでありルームメイトでもあるブリユードとは、家族同然の関係を築いている。少し頭が悪いのがたまに傷。他の生徒がブリユードと距離を置く中、彼だけは気にせずいつも傍に居た。目標は魔法の実力でブリユードを上回ること。

【アイナ・セブンスフォース】

綺麗な黒髪が特徴の少女。年齢は16歳。身長の割りに胸の発育が凄まじい、ロリ巨乳体系の持ち主。クローデンという街に住む貴族に雇われ、メイドとして働いていた。魔法を使うことは出来ない、ただの人間である。ある事件が切っ掛けとなり、ブリユードと知り合うことに。そんな彼女に隠された、重大な秘密とは……？

【シェリア・フェアリネス】

先端がくるつとウエーブした、可愛らしい水色の髪が特徴の女性。種族はエルフ。年齢不詳（ブリユードの主観では20代前半程度）。水の属性魔法を使いこなし、国の用心棒として活動をしている。その実力はブリユードを遙かに凌駕する。とある事件が切っ掛けで、ブリユードと行動を共にすることとなった。間延びした口調とは裏腹に、敵に対しての容赦は一切無い。

【ヴェリア・フェアリネス】

肩まで伸びた美しい黄緑色の髪を持つ女性。エルフ。年齢不詳。実力のみでクロードン治安維持専門騎士団団長の地位にまで上り詰めた。他を魅了するモデル体型の持ち主で、クロードンの男達の憧れの的となっている。大の人間嫌いであるが、その理由とは一体……？

【フェミナ・アミックスハート】

ブリユードとシエルが通う、アミックスハート高等魔法学院の学院長を務める女性。陽気な性格で、一般生徒ともタメ口で会話をする。見た目は20代後半くらいの巨乳美女だが、ブリユード曰く、実年齢はかなりいつているらしい。詳細は不明。ブリユードに課外授業を言い渡した張本人である。普段は仕事をせずに遊び呆けている様に見えるが、実は影できつちり働いていたりする。

プロローグ

「次！ ブリユード・エクスマギナ！」
「はいっ！」

教官に名前を呼ばれた。遂に俺の番だ。震える両足を一歩一歩動かし、祭壇へと向かう。緊張と不安でどうにかなくなってしまいそうだ。右手と右足が同時に出ている。大丈夫だ、落ち着けよ俺……。きつと良い結果が出るはずだ。

「ブリユードオ、 気張ってけえ！ 雷になるよう俺も祈ってやるからよっ！」
「お、おう！」

後方で列を成して並んでいるクラスメイトから、声が掛かる。こういう時の声援は素直に嬉しいもんだ。俺は振り返り、引きつった笑顔でガッツポーズを取って見せた。

今日は待ちに待った魔力属性判定試験の日だ。これで自分の身体に宿る魔力が、どの属性なのか分かる。試験と言っても、ただ単に特別な魔力の込められた壺に入っている水に向けて、自分の魔力を流し込むという、至ってシンプルなものではあるが。無色透明の水の色が赤になったら炎、紫なら木、黄色なら雷、青なら水、緑なら風、茶色なら土属性ということになる。

俺はガキの頃からずっと、雷属性の魔法を操ることを夢見ていた。紫電を身に纏い、巨大な稲妻を発生させ、轟音と共に魔物共を屠るその様は、まさに圧巻の一言に尽きる。高威力広範囲高射程、どの要素をとっても雷属性は最高の属性だ。見た目もカッコいいしな。

だが……魔力属性は先天的なもので、生まれたときから既に決まっ
ってしまっている。故に雷以外の他の属性という結果になってしま
った場合、もう努力を重ねたところでどうすることも出来なくなる。

まあ……その時はその時だ。炎でも水でも風でも土でも木であつて
も。俺はただ受け入れて、魔法の道を更に精進しようと思っ
ている。確かに残念だとは思うが、こればかりは仕方ないしな。

祭壇へ続く石で出来た階段を、ゆっくりと確実に登っていく。一
段一段踏みしめて行く度に、俺の鼓動はどんどん高まっていった。

そして遂に教官と壺の待つ祭壇の場に到達する。背後からは、他の
学生達の好奇の視線が痛いほどに浴びせられていた。振り返らな
くても分かる。妙な空気が中庭全体を支配していた。

それもそうだろう。俺は学院最強の魔法使い。そう呼ばれている。
学院創立以来の全ての歴代卒業生達も含め、俺は最強なんだそうだ。
自覚はない。だが、自信はある。親のいない俺は、学院長に引き取
られてからのこの十数年間、血の滲むような努力を重ねて魔法を練
習してきた。だから他の一般生徒より強いのは当然。そう思っ
ている。

そんな俺の魔法使い運命を左右する、今日の属性判定試験。学院中が注目するのは当然だ。その気持ちは物凄く理解出来る。けどね、お前等……。俺だつて人間なんだぞ？ 緊張だつてするし、不安にもなる。だからそんなにシンと静まりかえらないでくれよ。やりにくすぎる。

呆れて小さく一度溜め息を吐くと、俺の感情を読み取ってくれたのか、祭壇で待ち構えていた教官が

「大丈夫だ、お前ならどんな属性でもやっていける。自信を持って」と励ましてくれた。

「あ、ありがとうございます……」

自信はある……はず。だった。今までの俺ならば。だが、これらの俺にも同じ様に自信を持てるかと問われれば、それは分からない。何故なら、此処から先のステージは属性魔法だから。従来まで俺が扱ってきた無属性魔法とは訳が違う高等技術が必要となる。それで自信を持って、と言われてもな……。

「準備はいいか？」

「……はい」

まあいい。此処でウダウダ考えていても仕方がないだろう。なるよ。うになるしかないのだから。だったら意を決して、さっさと終わら

せちまつた方が気が楽だ。

俺は仰々しく飾り立てられた壺の前に立つ。中を覗き込むと、綺麗な無色透明の水が入れられていた。底が透けて見えるほどだ。時折吹く風によって、水面が微かに揺れている。

「いきます」

俺は深く息を吸い込み、静かに目を閉じた。両手を前へと翳す。意識を集中して、掌から溢れ出す魔力を操り、壺の中へと一直線に注ぎ込んでいく。実にシンプルな作業だ。技術も何も一切関係ない。遂にやってしまったんだ、俺は。これを。十年以上待ち続けていた、この作業を。俺を新たな道へと導いてくれる、この儀式を。

壺の中の水が泡立つ音が聞こえる。反応が始ったのだろう。結果が出るのは一瞬。もう目を開けば、変色した水が俺の瞳に飛び込んでくることになる。

と。

「っ……っ！」

傍らでじつと成り行きを見守っていた教官が、まるで驚いたかのように突然息を呑むのが感じられた。一体なんだというんだ。普通ならば声高々に結果を叫ぶはずであるのに。俺の中に一抹の不安が浮かび上がってきた。心臓が痛いほどに暴れ狂う。

「何だ……これは……」

……。今、何と言った。教官さんよ。あんたは一体何を眼にしているんだ。俺は何か間違ったことでもしたのか？ いや、そんな訳はない。こんな単純作業でミスを犯す方が難しいだろう。

「おい、様子がおかしくないか？」

「何かあったのかな」

不審を感じ取ったのか、後方で固唾を呑んで行方を見守っていた生徒達がざわつき始める。やめてくれ。そういうの。本当に。不安になるから。俺はこんな状況に晒されても平気でいられる様な屈強な心なんて持ち合わせていないんだよ。

「……ブリュード。お前が普通でないことは、我々も重々承知していた。故に今更こんな事を言っても意味がないのかもしれないが……」

「……何ですか」

声が掠れる。あまり普通じゃない普通じゃないと連呼しないで貰いたいのが本音だ。だって俺は、普通の人間なのだから。そんな化け物みたいな物言いはしないでくれよ、教官。

「お前は一体、何者なんだ？」

.....
.....
.....

ゆっくり、少しずつ瞼を持ち上げていく俺。最初に感じたのは、眩しい陽の日差しかった。白く眩む瞳を右手で庇い、視線を落として壺の中を覗き込む。そこにあったモノを見て、俺は絶句した。何故なら

水の色が、”黒色”に変わっていたからだ……。

エーテルアリア王国。それが俺の住む国の名だ。大陸の約4割を占める広大な領土のお陰で、資源、人口、環境の全てにおいて、高い水準を維持出来ている理想的な国である……らしい。そう習った。国王の政治も非常に安定していて、世界中から見てもかなり稀な程、人々の生活は充実しているんだとか。

そんな俺の国でも……争い事のない平和な日常だけは、未だ実現されていない。

その原因は大きく別けて二つあった。

一つは、世界中に蔓延る凶悪な魔物が原因だ。俺達人間とは姿形がまるで違う奴らは、非常に好戦的で、人間を見ると誰彼構わず見境無しに襲い掛かってくる。大半が獣の姿をした異形で、力は人間よりもずっと強い。その魔物が多く生息している地域から逃れようと、エーテルアリア王国に不法入国する輩が後を絶たないのだ。この国に来たところで、魔物の生息数は他と大差ないと思うのだがな……。

二つ目は、隣国国家の侵略行為だ。エーテルアリア王国の豊かな暮らしを妬み、自国の植民地にしようとする企む愚かな為政者によって、俺達是否応なく戦乱に巻き込まれる形となってしまうている。迷惑な話だ。きつと自国民全員が犠牲になるまで、奴等は止まらないんじゃないだろうか。

そんな訳だから、俺達は最低限の戦う力を備えていなければならない。自分の身を護る為にも。それは則ち ”魔法” を使えなければならぬ、ということだ。

親という存在が居なかった俺は、物心ついたガキの頃に此処の学院の学院長に拾われて育った。幸い全寮制の魔法学院ということで、部屋に困ることはなかったんだ。とは言っても、最初の頃は本当にやる事がなくて、毎日退屈な日々を過ごしていた。一日中ベッドから起き上がることもせず、ポーっと天井を眺めてばかりいたんだ。そんな俺に見兼ねて、学院長が初歩魔法を伝授してくれてからは。俺はまるでとりつかれたかの様に、魔法の練習に打ち込むようになった。だって楽しかったから。主に魔物を殺すのが。その頃からだったかな。誰よりも強くなって、一流の魔法使いになって、将来はこの国の役に立ちたいと考え始めていたのは。

それなのに

「 ”黒” って何だあああああ！ 」

教室の一番後ろの端の席で、俺は雄叫びを上げていた。喉が張り裂けようが関係ない。これが叫ばずにいられるかよ。こんな理不尽があつてたまるか。クラスメイトの奴等が一斉に、俺に哀れみの目を向けてくる。正直うぜえ。

「ま、まあブリード落ち着けて。お前が異常なのは、今に始まったことじゃねえだろ？」

異常って言うな。俺を慰めようと必死なこいつは、親友のシエル・マストリッジ。試験時に後ろから声を掛けて来たあいつだ。

燃える様な赤髪ショートカットと端正な顔付き、そして細身の長身ということもあつて、女子からの人気は高い……らしい。実際は知らん。そういう話は俺相手にはしてくれないし。

「落ち着け？ どうやってだ！？」 “お前の魔力は六大属性に当て嵌まりません” って言われて、シエルは落ち着いていられるのか、ああ!？」

「まあまあ。物は考えようだろ？もしかしたらブリードの魔力は、新種の第七属性なのかもしれないぜ？ そしたら大発見じゃねえか！ 名前はブリード属性と命名するといい」

「どんな属性だよ……!!」

駄目だなやつぱり。シエルは常人よりも論点とか、考え方というか、その辺がずれているのがたまに傷だ。いつもアホなことばかり言ってるやがる。こつこつ時にはそれがかなりイラつく。

俺は力無くへなへなと机に突っ伏した。頭が痛い。クラスの他の奴らは、俺から少し距離をおいてひそひそと話をしていた。いつもの光景である。俺の話し相手はシエル以外には誰も居ない。理由は簡単さ。俺の魔法の実力が異常過ぎて、皆近寄りがたいんだ。実際俺だって皆が10人がかりでひいひい言いながらやつと倒せるような魔物を、一人で秒殺しちまうような奴がクラスにいたら、絶対に近寄りたくない。

「まあそうなるのも無理ねえか……。魔法つてのは、基礎を固めた上でようやく個別の属性魔法に進めるんだもんなあ。基礎魔法が常人離れしてるお前は、飛び級で属性クラスに進んでもいいくらいだったのに。ようやく合法的に先に進めると思ったら、これだもんなあ」

「俺はもう……。プロの魔法使いにはなれないのだろうか……」

「そ、そんなことねえって！ きつとまだ何か道はあるはずさ！

……多分」

「お前今多分って言ったよなあ、おい！！」

人はどうしようもない状況に立たされると、無言になるか騒ぐかのどちらかの行動を取るらしい。俺はどうやら後者だったようだ。黙って受け入れることなんて出来る訳がない。十数年も待ったんだぞ。今日という日をずっと。それなのにこの仕打ちは一体なんだ。俺とシエルが二人してぎゃーぎゃー騒いでいると、不意に廊下からこちらに向かって声が掛かった。

「ブリュード・エクスマギナはいるか？」

「ああ！？ 今っ……！！」

俺は勢いそのままに、きつ！　と声の主を睨みつけた。今忙しいんだよ！　と続けて文句を言おうとした口が、そのままの形で硬直する。

「学院長先生が今日の魔力属性判定試験について、お前に話があるそうだ。後で学院長室に行くように」

放たれた教官の言葉に、俺とシエルは顔を見合わせて目を丸くしていた。……悪い予感しかしねえ。

「あっはっはっは！　ブリュちゃんなら何かしでかすと思ってたけど……まさか”黒”なんて訳わかんない色を出すとはねえ。　ぷっ、くくくく……！」

「学院長……今すぐ選べ。そのまま笑い続けて俺に殺されるか、真剣に悩んで俺を気遣うか、どちらかをな」

俺はあの後すぐに、こうして学院長室を訪れた……まではよかったのだが。案の定、真面目な話をするどころか、開口一番に大口を開けて笑い飛ばされた。まあこうなることはある程度は予測していたけども。見ての通り、こんなふざけた女が学院長だからな。

腰の辺りまで伸びた金髪を乱暴に一つに結ってポニーテールっぽくし、いい加減なメイクの施された顔をこれでもかかとにやかせせ、両手で腹を押さえながらげらげらと笑っているこの女こそ、我らがアミックスハート高等魔法学院学院長、フェミナ・アミックスハートその人である。そんな風に見えないのは職員含め全校生徒全員が十分以上に分かっていてのことなので、言わないお約束だ。

他の魔法学校のトップって、大体は白髪と白髭を蓄えたいかにもって感じのじーさんばかりだしな。うちの学院長は見た目は20代後半くらいの巨乳美女だったりする。今もスーツの胸元から上乳がもろに露になっていたり。まあ見た目は綺麗で若いけど、それに反して実年齢はかなりいつてるらしいぜ？ 噂によると三桁を余裕で超えてるんだとか。意味わかんねえよな。これ言ったら殺されるから禁句なんだが。

「ごめんごめんっ！ ちゃんとせんせーは悩んでますよお？」

「笑い過ぎて目に涙浮かべてる状態を悩んでる、とは言わねえよ」

「あ、バレた？ てへっ」

「てへっ、じゃねえよ学院長！ 俺の魔法使い運命を左右する重大な出来事なんだぞ！？ わざわざ呼び出したんならちゃんと真面目に考えるよ！」

俺は目の前の豪華な机を思い切り両手で叩いた。全く、こいつはいつもこんな感じで、職務を全うしたためしがない。何でこんな

が学院長なんだろうかと毎回疑問に思う。

「そりゃ暇潰しに呼び出したけどお……仕方ないじゃない 私だって分からないものは分からないわ。この世に魔力は炎、水、雷、風、木、土の六大属性しか存在しないはずだもん。水見式で黒が出る魔力なんて聞いたこともないわ」

「暇潰しに人を笑い者にすんじゃねえよ……！ 大体なあ、明日からはもう属性別クラスに別れての授業が始まるんだぞ！？ 学院長として答える！ 俺はどのクラスに所属すればいいんだ、ああ！？」

額に手を当てて思案する表情を浮かべているが、絶対にこいつ何も考えてないぞ。賭けてもいい。

「分かんない」

「ぬあああああああ！」

ほらなあ！ ご丁寧に音符まで着いた満面の笑みで返してきやがった。何て奴だ。信じられない。これはもう叫びたくもなる。頭が痛い。マジで痛い。何でこんなことになっちまったんだ……。

「まあまあ。そう落ち込むでない少年よ。君はまだ18歳じゃないか。魔法使いじゃなくなったって、他にも職業は一杯あるよ。農夫なんてどう？ 国の皆の為に汗水たらして作物を育て上げて、商人にでも売ればいいじゃない。ああ、なんて悠々自適な生活なの！」

「黙れ職権乱用者め。仕事しろてめえ」

俺は金髪頭に手刀を食らわせた。カタカナで言うならチョップだ。しかし攻撃した俺の手の方が痛いのは何故だろう。頭硬すぎだろお。鉄でも仕込んであるのか？

「あつはつはつは！ まあそりやそうよねえ。両親のいないブリュちゃんは、物心着いた時からずくくと、魔法使いになるために努力し続けてきたんだもん。それを今更農夫に……って言うのは、どう考えても酷よね」

「当たり前だ！ 俺には今更魔法使い以外の人生なんて考えられない。それはお前が一番よく分かっているだろ？ 俺はこの力を使って、この国の為に働きたいんだ！ いつ襲い掛かってくるかも分からない魔物の軍勢や、隣国の侵略行為に怯えながら暮らす人々を、守ってやりたいんだよ！」

自分でもかなりクサイことを言っているのは分かっている。だがこれが事実だ。ガキの頃からずっと抱いていた俺の夢。一流の魔法使いとなり、エーテルアリアの為に戦う。その道しか俺には考えられない。俺の熱意をどう受け取ったのか、柄にも無く難しい顔をする学院長。数秒の沈黙の後、がばつと机から身を乗り出して、俺の瞳をじつと覗き込んできた。

「言ったわねえ、ブリュちゃん。にひひひひひ」

「な、何だよ」

下品な笑いを上げる学院長。まるで子供が性質の悪い悪戯を思いついたかのような表情を浮かべている。ぶつちやけキモい。俺の背筋に言い表しようのない悪寒が走った。またよからぬことを考えているに違いない。

「良いでしょう！ その熱意に応え、ブリュード・エクスマギナ！ 貴方に特別課外授業を与えることにするわ！」

「はあ！？」

また突拍子のないことを言い出しやがった。どうせ祿でもないことに違いない。

「私が50年くらい前まで教わってた師匠がねえ、物凄く魔法に詳しいの！ その知識は世界一と言っても過言じゃないわ。貴方の正体不明の魔力についても、もしかしたら何か知っているかもしれない。という訳で、行つてらっしゃい」

「なっ!?!? お、おい!」

反論など最初から聞く気がないのか、学院長は机の引き出しから一枚の紙を取り出し、さらさらと文字を書き始めた。

「大丈夫よお。目茶苦茶怖いけど、余程のことでもしない限り殺されることはないから。多分ね。それに見た目はお人形さんみたいで凄く可愛いの！ 超絶美少女って感じね。ああでも年齢は少女っていうよりはお婆ちゃんレベルだけど」

「お前の言っている言葉の半分も俺は理解できない……!」

「細かいことは気にしな〜いの！ そんなんじゃモテないわよ？ とりあえずあの人に指導して貰えば、きっと今より更に強くなれるから…… よしっ！ はいこれ、紹介状ね」

書き終えた紙をテキストに折り畳み、俺にポイツと投げつける。品も何もあつたもんじゃない。俺は中身を確認してやるうと思ひ、手紙を開こうとする。

……が、開かない。力を込めると、紙の上に小さな赤い魔法陣が浮かび上がるだけで、どうしても文字を読むまでに至らない。

「ひひー、簡単な封印魔法を唱えておいたから、私が許可した人間にしか、手紙を読むことは出来ないわよっ。残念でしたあ」

悪戯が成功したかのような憎らしい笑みを向けてくる。こいつ一度殴り飛ばした方がいいんじゃないだろうか。

「……一つ聞かせる」

「何よ」

「そいつ……人間じゃないのか？」

百歩譲って、課外授業を受け入れるとしよう。どうせそれしか道は無いみたいだし。縋れるものがあるならば、意地でも縋り付いてやる。それはいいとしても、だ。こっちはそう簡単にはいかない。こいつを育て上げた人物が、普通であるはずがないんだよ。先程の言葉の中にも、何やら不可解な単語が含まれていたし。見た目は美少女で年齢はババアって、どういうことだそりゃあ。

「察がいいわねえブリュちゃん。私の師匠は 最強種族・吸血鬼”よ」

「……は？」

「だから、吸血鬼」

「寝言は寝てから言え」

「吸血鬼」

「ふざけ」

「吸血鬼なの」

「……」

もう、どうにでもなれ……。

『つゝきのな〜い深い夜〜 吸血鬼が〜やってくる〜』
『逃〜げ〜て〜も〜もう遅い〜 お前の心臓助からぬ〜』
『だったらいつそ〜この命〜 谷から投げて〜みせようぞ〜』
『さすればみんな……苦しませぬ……』

ガキの頃によくこの歌を聴いた覚えがある。内容を要約すると、
『吸血鬼に殺されるくらいなら、谷から身を投げて自殺した方が遙かにマシだ。そうすれば、苦しまずに済むから……』と、そういう意味らしい。ガキに教えるには何とも物騒な歌だと、子供心に思っていたのをよく覚えている。吸血鬼の恐ろしさを分からせる為に、古くからずっと国民が代々歌い続けてきた民謡だそう。エーテルアリアでこれ知らない人間は、まずいない。

「本当に吸血鬼なのか？ いやいや、そんな馬鹿な……。アレは空想上の生き物であって、実在する訳が……」

俺は寮の自室で衣服やタオルを畳みながら、一人呟いていた。

「でも、あの学院長を育てたのが吸血鬼だと言われたら、妙に納得できるのも確かだ……。吸血鬼は不老不死で身体が成長しないし、何百年経っても寿命が尽きる事が無い。それならば見た目は美少女中身はババアというのも、有り得なくは無いだろっ」

布の皺を伸ばし、出来るだけ小さくまとめたら、リュックサックの底の方へと順に詰めていく。

俺は今何をしているのかと言うと。見て分かるとおり、旅の準備

を整えている。課外授業がどれくらいの間になるかは分からないが、やはりある程度の生活必需品は持っていくべきだろう。餓別だと言ってさっき学院長にそれなりの金も貰った。

「まあ、この際何でもいいか……。俺は一流の魔法使いになればそれでいい。その為だったら何でもやってやる」

もうこれしか道が無いのだから、腹を括るしかねえんだ。本当に。

そもそも属性魔法というのは、個人個人に適した練習をしていないと、その力を上手くコントロールできなくなるのだ。具体的には、数十メートル先の敵目掛けて放ったはずの魔法が目の前で暴発したり、魔法が反射して自分に襲い掛かってきたり。それ程扱いが難しい魔法なのだ。だからこそ、習得することに意味がある。一般的に、属性魔法を一通りマスターすれば、一人前の魔法使いとして認められることになっている。

我が学院でも、雷炎水木土風のそれぞれの魔法属性クラスに別れ、その属性のエキスパートの教官に教えを受け、卒業試験を突破すれば、晴れて卒業というスタンスを取っていた。そうすれば国の騎士団や地方の自治体への入団資格も同時に得られることになっている。……はずだったんだ。だから俺はあんなにも今日と言う日を待ち望んでいた。ようやく自分の魔法がどの属性なのか分かり、一歩先に進むことが出来る、と。

「前向きに考えてみよう。俺は他の誰にも扱おうことの出来ない魔力を有していたんだ。そう考えれば……。いや待て。それを使いこなせないからこうして学院で学ぼうとしていたんじゃないのか？」

ぶつぶつと文句を言いながら着々と荷物を詰め込んでいく俺。荷

物と言つても、着替えやタオルやその他諸々の小物しか入っていないんだがな。

実を言つと、慣れ親しんだ此処を出て行くのに若干の切なさがあったりする。何て言つたつて、物心着いた頃から此処にいるから…もう10年以上住んでいることになるな。7歳になってようやく授業に参加することが許可されてからは、この部屋に同い年のシエルが新たに加わつて。最初は馴れ馴れしくて正直鬱陶しく感じていたりもしたが…今となつては誰よりも大切な友となつた。家族みたいなもんだ。

「一応あいつにだけは、暫く留守にするつてちゃんと伝えないと結構な重さになつたりリュックを背負い、身支度を完了させる。窓の外を見ると、もう太陽が沈みかかっている。綺麗な夕焼けだ。これから夜になると、外は魔物が蔓延つて危険だが…まあ何とかなるだろう。行くなら行くでさっさと行くべきだ。いつまでも此処に留まつていては迷いが生じる。」

「うっし！」

大きく息を吐き、ドアノブに手を伸ばしたその時。

「ブリーユーードオオオオオオ！」

どたどたと喧しい足音を立てながら、誰かが廊下を突っ走つて来ている。声的にシエルだろう。間違いない。相変わらず騒がしい奴だ。俺は握り締めていたドアノブから手を離し、代わりに鍵を閉めて待機する。

「まだいるよなあああ！？ あぶつ！！」
やれやれ。勢い良く扉を開けて中に滑り込もうとしたのだろう。そんなことをされては大事な俺の家具やらなにやらが破壊されかねない。だから鍵を掛けたのだが……奴は見事にその罠にはまり、速度を殺すことなく扉に激突した。此処まで単純だと面白い。

「な、何で鍵が……ぐふっ」

「はっはっは！ 廊下を走ると怪我するぜ？ シエル」

俺は笑いながら扉を開け、床に突っ伏しているシエルに声を掛ける。デコの辺りが赤く腫れていた。

「ブ、ブリードてめえ……！ 学院を出るって聞いたから、素っ飛んで来てやったのによお……！」

「情報はええなおい。誰から聞いたんだ」

「学院長が皆に言い触らしてたんだよ。この学院の奴なら、もう全員知ってると思うぜ……？」

あいついつか殺す。マジで殺す。守秘義務も何もあつたもんじゃねえ。

「まあ知ってるなら話が早い。お前にだけは別れの挨拶をしようと思ってたしな」

俺は手を差し出し、倒れていたシエルを立ち上がらせる。

「なあ、本当にいつちまうのか？ お前の魔力、この学院じゃあどうすることもできないのか？」

「その話は学院長とした。魔力判定で黒が出るような魔力は、アイツも知らないらしい。多分この学院じゃなくても、何処の教育機関でだって、俺は教えを受けることはできねえだろうさ」

「そんな……！」

「だから俺は此処を出て、一縷の望みに賭けてみることにした。それが無理だったらさっぱり諦めて、農夫にでもなるさ」

シエルの目が大きく見開かれる。これは冗談じゃない。俺はもう覚悟を決めていた。人生には諦めというのも肝心なのさ。柄にも無く俺の考えを読み取ったのか、シエルはそれについて触れることは無かった。

「そうか……。寂しくなるな。いつ帰って来る予定なんだ？ 卒業試験の頃には、戻ってくるよな？」

「正直どれだけの時間が掛かるかはわからない。学院に戻ってくる保証も無い。だけどまあ……。約束はしてやる。どんな結果になろうとも、お前にだけはきちんと報告してやるからよ。だからそれまで待ってる」

いつの間にか涙目になっていたシエルの背中を、力強く叩いてやる。そんな目で見るんじゃないよ。俺の方までぐっと来ちまうだろうが。

「ブ、ブリュードお……！」

俺の言葉を受け我慢できなくなったのか、遂に泣き出してしまった。大粒の涙をポロポロこぼし、俺の肩に顔を埋めて来る。くっそ……泣かん、俺は泣かんぞ、絶対に。

「情けねえなあおい。そんな泣き虫じゃあ、いつまで経っても俺を越せないぞ？」

「つつ、うるせえなあ……！ いいじゃんか、今日くらいはあ……！」

「つーか男に抱き締められて喜ぶ性癖は、俺にはねえんだよ」

「俺にだってねえよお、馬鹿野郎……！」

「だったら離れるよ」

「お前が離れりゃいいだろうがよお!!」

「それは無理だ。今離れたら俺の涙がお前に見えちまう」

「ははっ、そりゃあいい……。ブリュードの涙なんて、一生お目に掛かれないと思ってたぜ……」

「馬鹿野郎……俺だって、普通の人間なんだよ……」

親友との別れは、涙無くして乗り越えられる程、楽なものではなかった。

「もうすっかり夜になっちまったな……」

泣き付いて離れないシエルを強引に引き剥がした後、俺は静かにアミックスハート魔法学院を出発した。普段学院の寮から殆ど出ることのなかった俺にとって、外の世界というものは新鮮そのもので、夜空に輝く星空を見上げていると、寂寥の想いも少しだけ安らぐ気がした。

俺は歩きながら、学院長に貰った地図を広げる。杜撰なアイツにしてはまともな地図を渡してくれたもので、市販されている正式な地図をベースに、吸血鬼が住む家までの道のりが事細かく記されていた。ついでに端っこの方に、『奴隷商人グループに注意っ！』という赤い文字が書いてある。何だこりゃ。とりあえず無視して大丈夫だろう。

どうやら吸血鬼の家までは、そこまで遠くないようだ。まずは学院から西に十数キロ進んだ地点にある、クローデンという街に向かうよう書かれている。そこから北西に数キロ進んだ所に、アンデロッド大樹海と呼ばれる長巨大な森があり、吸血鬼はその森の奥深くに住んでいるようだ。

森の中に住んでいるとはな……まあ大体予測はしていたが。伝説的生物である吸血鬼が、普通に街に住んでいたら逆に吃驚する。そもそも、何故吸血鬼が最強種族と言われているかという点。一言で言えば……攻撃が通じないから、だそうだ。

そりゃ、剣で斬られれば血は出るし、魔法で焼かれれば火傷だつてる。しかし吸血鬼は、再生能力が俺達人間の何百倍も優れているらしくて。攻撃を食らって傷が出来ても、すぐに元通りに完治するんだそうだ。おまけに寿命の無い不老不死とくりゃ……最強と呼ばれるのも納得できる。殺す方法ははっきり言って、ない。

「一体どんな怪物なんだか……」

きつと背中には禍々しい翼があつて、口からはぶつとい牙が生えてるんだろう。主食は人間の血肉で、毎晩誰かを襲っているんだ。そうに違いない。想像しただけで背筋が凍り付く。見た目超絶美少女だなんて有り得ない。

「本当にそんなのが、魔法を覚えてくれるんだらうか……」

今更になつて不安が増大してきた。紹介主があこの学院長つてのも懸念要素の一つである。アレを育て上げた人物が、普通の人格を持ち合わせているわけがないんだ。

「まあ……考えてても仕方ねえか。なるよつになるさ。とつと街に行こう……」

俺は大きく溜め息をつき、嫌々ながらも歩を速めることにする……。

数時間後。ちょいちょい魔物が現れたりもしたが、別に苦戦することも無く。人差し指一本で軽くあしらつたりしながら、只管歩いていると。凸凹とした足場の悪い岩場地帯が終わりを向かえ、

見晴らしの良い平原が俺の眼前に現れた。あまりの広さに思わず感動する。暗くて先の方まではよく見えないが、随分と長く続いているようだ。恐らくこの先にクロードンがあるのだろう。順調に進んでいることに喜びを覚え、ちよつと早足で歩いていると、

「……………なんだありゃ」

数十メートル先の方に、何やら人影が見えた。4、5人くらいの人数が居るように思える。それだけなら別に気になど止めないのだが……………どうやら様子がおかしい。時折聞こえてくる声から察するに、数人の男が一人の女を取り囲み、暴行を加えているようだった。

この距離と暗さだ。見間違えという可能性も否定は出来ない。だが、耳に飛び込んでくるか細い女性の悲鳴と、男性の野太い怒号を考慮すれば、やはりそういうことなのだろう。

「……………穏やかじゃねえな、おい」

彼らの傍らには、大きな馬車が待機していた。10人くらいは入れる広さだろう。荷台を引いているのはグロクリアという大型の魔物だ。4足歩行で力が強い反面、非常に大人しい性格をしている為、色々な場面で利用されることが多い。だがしかし、生息数がかなり少ない為に、レンタルするには結構な額が必要となる。普通ただの旅行で使うような魔物ではない。商業で商品を運ぶ為に使うのが主だろう。だとすると……………。

俺は学院長から貰った地図をもう一度広げる。奴隷商人グループに注意、と書かれた文字が目に入りこんで来た。これはやはり、そういうことなのか？ 前にシエルからも聞いたことがある。綺麗で若い女性を無理矢理連れ去り、クライアントに奴隷として売り捌くゴミの様な連中が居ると。主に隣国から不法侵入した輩がそういった

行いをしていられるらしい。それと同様の事件が最近、学院の近辺でも発生しているんだとか。その時は軽く流していたが……な。

俺は駆け出し、集団との距離を更に縮める。嫌な予感がした。間に合えばいいんだが。

「この女あ！ よくも他の奴隷を全員逃がしてくれやがったな！」
「テムエあいつらが一体いくらで売れるもんだと思ってたんだ、ああ！？」

「もう駄目だなこりゃ。商品にすらならねえ。腹いせにポコしてから、臓器に回すか」

「バラす前に犯そうぜっ！ こいつあ中々上玉なんだしよおー！」

腐った男共の耳障りな声が、はっきりとした言葉となって聞こえてくる。俺の予感が確信へと変わった瞬間だった。ドンピシャだぜ、学院長……。

「いや……お願い……ゆるし、てっ……！」

女性の掠れた声が微かに聞こえる。もう泣き叫ぶ力も残っていないだろう。一人の男が後ろから両腕を縛り上げ、他の3人が鈍器で間断なく暴行を加え続けている。胸を鷲掴みにされたりもしていた。俺は思わず額の血管がはち切れそうになる。

「殺して……いいよな」

俺は静かにそう呟くと、両足に魔力を集約して一気に爆発させた。風圧で体が宙を飛ぶ。俺独自に編み出したオリジナルの移動法だ。数十メートルの距離を一瞬で移動し、集団のど真ん中で着地する。

「うつ！？ な、なんだあ！」

突然凄まじい風と共に降り立った俺を、男たちが鬼の様な形相で睨みつけてきた。その手には、剣や鉄棒、メリケンなどが握られている。それに付着している赤黒い血は、恐らく女性のものだろう。

「……………おいテメエ、何のつもりぶっ！？」

女性の両腕を拘束していた男の顔面に、魔力を込めた右ストレートを食らわせる。骨を砕いた感触が伝わってきた。陥没どころじゃ済まないだろうな。

「ネ、ネロス！」

「こいつ、やりやがった！！！」

今の一撃で意識を失った、或いは死んだのか、男が勢い良く後ろへと倒れこんだ。女性もそのまきぞいになりそうだったので、俺は腕を伸ばしてすぐさま抱きとめてやる。元は純白のエプロンドレスだったであろう彼女の服は、見るも無残な程にボロボロになっていた。到る所に泥や血が付着しており、びりびりに破かれてしまっている。

「大丈夫か？」

「うぐっ、けほっ！ けほっ！」

俺の問いかけに対し女性は返事をしようとしたが、声ではなく咳しか出ないようだ。その咳と一緒に、大量の血を吐き出していた。見るからに危険な状態だ。このままでは命が危ないかもしれない。顔中に浮かび上がった青痣が何とも痛々しい。

「おいおいにーちゃん、テメエ自分が何したか分かってんのかあ？」

「俺たちや今虫の居所がわりーんだよ……………。殺されても文句言っんじゃねえぞお！ー！」

怒り狂った様子の3人の男が、俺と女性を取り囲んだ。逃げ道を塞いだつもりらしい。そのまま手にしていた鈍器を振り翳し、殴りかかってくる。だが俺は、防ぐことも避けることもしない。

「あつ、あつ………！」

俺の腕の中で、女性が必死に危険を知らせようと目で訴えてくる。だが俺は大丈夫、という意味を込めてにっこりと微笑んでやった。何もする必要はない。何故ならこいつらごときでは

「ぐつ………！ な、何だこりゃ………！？」

「バリア………？ 障壁か？ こいつ、まさか魔法使いじゃあ！？」

“俺の障壁を破ることすら、出来はしないから”。

俺の頭上でピタリと動きの止まった、剣や鉄棒。それを必死に俺へ届かせようと、力を込め続ける男達。実に滑稽な姿だ。笑いが込み上げて来る。何故そんなに弱い。力も無いくせに粹がってんじゃねえよカス共が。お前等……

「失せる………！」

無数に輝く星空の元。静まり返った平原の中央で。俺の放った魔力の奔流が、暴れ狂った。

e p . 3 黒髪の少女

黒く燻る焼け焦げた草木。空气中に漂う硝煙の臭い。抉れた地面。まるで戦争でも勃発したかのような荒れ果てた平原の中央に、俺は立っていた。

「少しやりすぎた、か……？」

俺を中心として、放射状に巨大なクレーターが幾つも出来上がっている。その内の一つ……最も焼け方が酷い大穴の底に、全身火傷を負ってピクリとも動かない奴隷商人4人の姿があった。あいつ等おした行いは、今思い出しても腹が立つ。俺は怒りに任せて骨を粉砕し、皮膚が爛れるまで痛め付けてやった。もう恐らく死んでいるだろう。人を殺したのは初めてだが……後悔や哀悼の念は微塵も湧き上がっては来ない。

「ま……多少地形が変わった程度だし、問題ないだろう」

俺は踵を返し、主を失って放置された状態の馬車へと向かった。白い幌に覆われた荷台の中に入ると、先程助けた女の子が横たわっている。あれだけ酷い暴行を受け、もう体が限界に近かったのだと思う。まるで死んだように眠りに就いていた。

「まだ目覚めない、か」

俺は応急治療程度ではあるが、基礎魔法を応用した治癒魔法を使うことが出来る。前に学院長に教わった。それを駆使して、どうに

が目立つた外傷である打撲や切り傷を綺麗に消すことは出来たんだが……やはり体に溜まっていたダメージは相当大きかったようだ。あれから2時間ほど経過したが、未だに目を覚ます気配はない。

「やれやれ……。学院を出てすぐにこれとは、先が思いやられる」
俺は傍らに胡坐をかき、深々と溜め息を着いた。夜中の内にクロードンの街に着くとは流石に思っていなかったが、せめて半分くらいの道のりまでは到達しておきたいと思っていた。だがこの様子では……とてもじゃないが、そんなのは無理だ。第一、傷ついた女性一人を置いて行く訳にはいかない。折角助けたのだから、最後まで責任は持つべきだろう。

だが……

「起きたら起きたで、どうするかがまた問題だよな」

俺は眠り続ける女性の顔をじっと見詰める。女性というよりは、少女といった年齢かもしれない。多分16か、17くらいか……案内18歳の俺と近そうだ。着用しているエプロンドレスは、俗に言うメイド服という物だろう。実物は初めて見た。誰かに仕えている下女が何かなのだろうか。

この歳でメイドをしている女の子というのは、実はあまり珍しくないらしい。やけに物知りなシエルがそう言っていた。魔法も使えず、碌な技術も持たない子供は、生きる為にやはりそういった職業に就くしかないのだとか。まあ……社会的に良識を持った人物が主人ならば、それでも問題無いのだろうが……。このご時勢だ。権力争いに利用されたり、腹いせに暴行を受けたり、淫らな行いを強いられるのが殆どらしい。悲しい現実だ。

「きつとこいつ、苦勞してんだらうな……」

俺は少女の頭をそつと撫でてやった。この辺では珍しい、綺麗な艶のある黒髪だ。腰の辺りまでまっすぐに伸びているそれは、異国的な何かを感じる。少なくとも、アミックスハートの学院生の中に、黒髪の奴なんていなかった。俺自身が対称的な白髪を有している為、物凄く違和感を感じる。

そんな一風変わった少女にちょっとした興味を抱き、更にまじまじと観察してみることにする。瞳は閉じられているので、どんな色、大きさをしているのかは分からない。だが、睫毛はかなり長い。それに加えて、小さな輪郭にぷるつとした唇。俺が思うに、中々の美少女なんじゃないだろうか。さっきは戦闘中だったし、暗かったしで、裸に顔なんて確認できなかったのが悔やまれる。

体の方に視線を移すと。すぐ目に留まったのは、豊かな胸の膨らみだ。結構な厚着にも関わらず、二つの果実は堂々と存在を主張している。かと思いきや。その下、ウエストの辺りはきゅつと引き締まっており、それが余計に胸の大きさを際立たせていた。ビリビリに破かれたスカートからは、色白の細長い脚がスラツと伸びている。思わず見惚れてしまう程の綺麗さだった。

「うっ……」

俺は知らぬ間に赤面し、よからぬことを考えてしまっていた。邪念を払い飛ばすように頭をぶんぶんと振る。そりゃ仕方ないだろう。俺だって良い年頃の健全な男子だ。これ程可愛い女の子が目の前で無防備に眠っていれば、発情したっておかしくないはず。ポロポロの服の間から、下着とかもチラチラ見えちまつてるし。

「いかん……。直視できない」

俺は堪らず少女から目を離し、荷台の入り口付近に避難した。あんなに近くに居るからいけないのだ。離れば大丈夫なはず。そうだが、意識しないようにしよう。あそこには何も無い。あるのは置物だ。シエルが俺を驚かす為に用意した置物に違いない。くそうアイツめ、帰ったらとつちめてやる。大体……

「ん、んう……」

「うおっ!？」

俺が頭の中で盛大な独り言を呟いていた時。突然少女が、小さな呻き声を上げた。予期せぬ不意打ちを受けた俺は、驚愕のあまり思わず飛び上がった。狭い馬車の中だ。当然天井はもの凄く低い訳であつて。俺はぶつけた頭の痛みに悶え苦しむ羽目になる。

「うっ……けほっけほっ!」

そんな馬鹿な俺を差し置いて、どうやら目を覚ましたらしい少女は、苦しそくに咳き込んでいた。俺は頭を押えながら慌てて立ち上がり、急いで少女の元へと駆け寄る。

「お、おい! お前大丈夫か?」

「うう……え……?」

寝惚けた様な表情で俺の顔を見、目を丸くしている。起きたばかりで、まだ意識がぼんやりしているのだろう。無理もない。俺は傍らに用意しておいた水の入ったコップを手渡してやる。

「ほら、飲めよ。喉渴いてるだろ?」

「あ……すみません……」

今にも消え入りそうな声で喋りながら、少しだけ体を起こして水を受け取ってくれた。そのまま躊躇することなく、ゆっくりと喉を鳴らして飲み下していく。警戒して飲んでくれないかも思っていたが、どうやら杞憂だったようだ。

「ぐっ、げほっ！ げほっ！」

「大丈夫か！？」

と、飲んでいる途中で水が気管に入ってしまったのか、激しく咽てしまった。コップの中に入っていた水も零れ、敷いてあった布団が濡れる。

「も、申し訳ありません……げほっ！」

「別に謝るなって……。ほら、少しは落ち着けよ。大丈夫だから」俺は出来る限り優しく、背中をさすってやった。やはりまだ完全に回復してはいないようだ。咳が出るということは、呼吸器官に何か傷を受けているのかもしれない。

「あ、ありがとうございます……。でも、私……。今はお支払いできるお金を、1ルビーも持っていないくて……。どうか、お許しを……」

何故か涙目になりながら、俺に必死にそう訴えてくる。

「金……？ そんなの要らないに決まってるだろ。大体俺がいつそんなのを要求した？」

「え……ギルドの方では、ないのですか……？ では、王国の騎士様でいらっしゃるのでしょうか……？」

ギルドって何だ。王国の騎士は分かるが……。シエルに聞いたことのない単語が出てくると、すぐにこれだ。俺はやはり、もう少し世間について勉強しておくべきだったのかもしれない。ガキの頃から学院の寮ですっと暮らしてきたから、こういうことにはまるで疎かだったりする。

「んー……。俺は学生だ。此処からすぐ近くの場所にある、アミックスハート高等魔法学院っていう所で学んでいる。今はちょっと訳ありで、課外授業を受ける為に旅をしているんだ」

嘘はついていないはず。これを旅と言うのかどうかはともかくとして。

「学生、さん……?」

俺の言葉を聴き、少女は呆気に取られていた。そんなにおかしなことを言っただろうか。嫌な汗が流れ出てきた。とにかく沈黙だけは避けたいので、会話を続けなければ。

「あ、ああ。名前はブリユード・エクスマギナ。君は?」

「ブリユード、様……。私は、アイナ・セブンスフォースと申します……」

「アイナか。なあ、教えてくれないか? 君はどうして、あんな状況に陥っていたんだ?」

「それは……」

言いにくいことなのだろうか。顔を背け、俯いてしまった。妙な空気が俺とアイナの間流れる。俺はこういう雰囲気物が物凄く苦手だ。どう対応したらいいのか分からない。普段シエル以外の人間とは殆ど会話をして来なかったのが原因だ。手持ち無沙汰で視線が宙を泳ぐ。気まずい。物凄く気まずい。

そんな俺の様子を察してくれたのか、顔を上げたアイナは、決心した様な表情を浮かべて沈黙を打ち破ってくれた。

「私……クローデンという町のとある貴族のお家で、メイドとして

雇われていたのです。昨夜、いつもの様にお夕食の支度を済ませた私が、お屋敷の外に出たら――

そこまで言った所で、不意に彼女が言葉を止めた。否、止められたのだ。口がそのままの形で硬直している。対する俺も驚愕に慄き、身動きが取れなくなった。

「なん、だ……？」

突然。馬車の中に居た俺達二人を、耳を劈くような凄まじい轟音が襲った。まるで巨大な落雷が至近距離で落ちたかのような大音響だ。音の振動で大地が揺れ動き、立っていられない程の地響きが発生する。馬車自体が左右に揺さぶられていた。

「っ……！？」

傍らのアイナが呆然とした表情で小さく叫ぶ。何が何だか訳が分からない。とりあえず周囲の物にぶつかって怪我をしないよう、彼女の身体を支えてやるのが精一杯だった。視界がぐるぐる回って全く安定しない。気分が悪くなる。吐き気を催しそうな程だ。

「くっ……！！ 攻撃でも仕掛けられてんのかっ！？」

俺は気を張り詰めて、周囲に魔力を放っている人間が居ないか探る。だが、それらしき気配は感じられない。じゃあこれは一体なんだ？ 自然現象でこんなことは起こりえない筈だ。とりあえず外に出ないと何も分からない。俺は幌に手を掛けた。その瞬間

「伏せてください、ブリュード様あー！！」

「え……っ！？」

今までで一番大きな声で、アイナが絶叫した。何事かと振り返る直前。俺は前方から、凄まじい熱を伴った空気の束が迫ってくるの

を肌で感じた。直感で判断する。これはヤバイ、と。

「ちい！！」

魔法障壁を緊急展開する。この短時間では三重が限度だろう。もつてくれるか？ いや、もたなければ困る。こんなの直撃を食らったら、間違いなく即死だ。俺は両手を翳し、全力を込める。

「おおおおおおおお！！」

直後。俺が張った魔法障壁に、膨大な熱量を放つ黒煙がぶち当たった。ちゃんと防いでいるというのに、信じられない程の熱さが襲い掛かってくる。汗が一瞬にしてどっと噴き出してきた。障壁を支える掌が焼けるように熱い。俺は必死で耐え続けた。この壁を突破されたら、俺どころかアイナにまで攻撃が及んでしまう。それだけは絶対に許してはならない。

「あ、あ……！！ 駄目……！！」

背後のアイナが涙混じりの声を上げている。事情を知っていそうな雰囲気だ。こりゃあちゃんと問い詰めないと。その為にはまず、このふざけた攻撃を消し飛ばさねえと……！！

「めんどくせえ、なあ！！」

俺は右腕の指先に人間大の魔法陣を展開した。全身の魔力を掻き集め、その中央部の一点に集約させていく。意識が散漫になった為障壁がベキベキと軋みを上げ始めた。まずい。このままでは砕け散る。隙間から炎が漏れ出していた。頼む、間に合え……！！

先走った炎で俺の腕が焼かれる。死ぬ程熱い。だが死ぬ様な怪我じゃない。このくらいなら治癒魔法でどうとでもなる。腕二本の犠牲で済むなら、安いもんだぜ。こんちくしょう。

「消、え、ろおおおおおおおおおお！！」

ようやく最大限に溜まった魔力を一気に解き放ち、分厚い魔力砲として放出する。反動で身体がぶっ飛びそうになるのを、足に力を込めて必死に耐えた。途端に障壁に掛かる重圧が軽くなる。俺の魔力砲が爆炎を打ち消しているのだ。どうにか間に合った。

「くっ、はぁ……はぁ……！」

いきなりの大仕事に疲れ果て、その場に座り込んでしまう。久しぶりにこんなことやったから、マジで疲れた。額の汗を拭いていると、とたとたとアイナが駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫ですか……！？」

心配そうな顔で俺を見詰めてくる。童顔で物凄く可愛い。って、いやいや。こんな時に何を言っているんだ俺は。差し出された腕を取り、立ち上がらせてもらった。

「な、何とか……な」

「良かったです……！ とにかく今は、一刻も早く逃げて下さい……！ この攻撃はきつと、奴隷商人たちが雇っていた用心棒によるものです。あんな人に敵う訳がない……！」

「用心棒？ そいつは一体……うおっ！？」

再び凄まじい轟音が発生し、大地が揺れた。今ならこれが、爆発によつて引き起こっているのだと分かる。常識的には考えられないが、恐らく魔法の一種だろう。ふざけた攻撃だ。信じられない。

「私のことはいいです！ ですからブリュード様だけでも……！」

アイナの焦った声音と表情を見れば分かる。今俺達を襲っている輩は、相当の熟練者なのだろう。用心棒だなんて危険な仕事で生活しているのだから、イカれてる程に強いのは当然だ。こうしている間にも、あちこちから爆音が上がり続けている。いつまでも此処に

留まっただけでは、どの道俺もアイナも焼き殺されてしまう。

「早く逃げてください、プリュード様！ 私のことはいいので……
げほっ、げほっ！」

「バカ言っな！ 怪我した女の子一人残して逃げれるかよ！ 俺が
どうにかしてやる！」

錯乱したアイナの手を強引に取り、幌に手を掛け、密閉された馬車から飛び降りようとする。とりあえず此処から脱出すれば、どうにか

「はっはあ！！ ガキが一体どうするってえ！？」
「っ！？」

目の前に“突然”現れた大柄の男。姿を見ただけでも分かる。大気が振動するほどに濃い魔力を秘めていることが。これだけの存在感を放っているというのに、俺は気付けなかった。……こんな至近距離に近付かれるまで。“一撃で殺される”、範囲に近付かれるまで。

「おい、言ってみろや坊主！！」
「くっ！？」
「ひゃあああああああ！？」

俺とアイナの眼前で、膨大な魔力の塊が一気に破裂し、何もかもを焼き尽くす超巨大爆発が巻き起こった……。

熱い。熱い熱い熱い熱い。肺が焼ける。呼吸をするだけで全身が熱くなる。本格的にマズいな、こりゃ。

何故あんな距離にまで接近されておいて、俺は気付けなかったんだ……？ 奴の気配を全く感じられなかった。いや、違うな。……感じられなかったんじゃない。奴には気配そのものが無かった。まるで自意識を持たない人形か、あるいは死人が動いてるかのようだ。生物なら誰しもが放つであろう気というものが、ない。

「ありえねえだろ……！」

本当に有り得ない。何もかもが。俺は混乱する頭を必死に整理する。一先ず奴の気配については置いておこう。考えても答えが出ない。

それよりも、だ。あんなイカれた大魔法を零距离で使えば、術者本人にも被害が及ぶはず。にも関わらず、奴は何の躊躇いも無く発動させた。しかも無詠唱で。魔法理論を完璧に無視している。常識外れもいい所だ。

「うつ……けほっ！ けほっ！」

俺はあの爆発の瞬間、即座に六重魔法障壁を展開させた。さっきの倍の厚さの壁だ。お陰でどうにか焼き殺されることはなかったが、爆発の轟音による空気の振動と、障壁の外側を覆い尽す熱風の嵐までは、完全に防ぐ事はできなかった。

傍らで蹲っているアイナは、胸を抑えて苦悶の表情を浮かべてい

る。俺が未熟な所為で更なるダメージを負わせてしまったようだ。申し訳なく思う。

「ごめんな……油断してた」

俺たちが先程まで乗っていた荷台は跡形もなく消し飛び、馬車を引いていた魔物も消し炭になっていた。一步間違えれば自分達もあなっていたであろう。背筋が凍る。

「いえ……そんな……」

顔を歪め今にも泣き出してしまいそうだが、幸いにも命に別状はないようだ。ほっと肩を撫で下ろす。とにかく今は彼女の言う通り、一刻も早く此処から逃げるべきであろう。あんなふざけた魔法を使う奴を相手にしてなんかいられない。俺一人ならまだしも、今はアイナも居る訳だし。

「立てるか？」

今度は俺が手を差し伸べてアイナを立たせようとする。だが、腰が抜けてしまったのか、いつまで経っても立ち上がれそんな気配が無い。

「す、すみませ……」

「任せる！」

俺は被せる様に言い、強引にアイナを負ぶった。こんな状況で謝罪の言葉なんていらぬ。聞いている時間もないしな。

「ひゃあ!？」

そんな可愛い悲鳴を上げないでくれ。ふくよかな胸が俺の背中にぎゅっと押し付けられる。これで意識するなという方が無理だ。いかにいかにかん。どんだけ欲求不満なんだよ俺……！ 深呼吸をして気を静める。冷静になって分かったが、アイナは想像以上に軽かった。いや、いくらなんでも軽すぎる。まるで重みを感じないのが逆に怖いくらいだ。背負っているのがまるで苦にならない。これ

ならいつまでも走り回っていられそうだ。

俺達の周囲には、爆発によって引き起こされた黒煙が濛々と立ち込めていた。殆ど全く何も見えない。常時展開している簡易障壁が無かったら、この煙を吸い込んで間違いなく死んでいただろう。全くふざけた魔法だぜ。

「うっし……しっかり捕まってるよお!!」

「え……？ は、はい……！」

俺は両足に魔力を集約させていく。もっと、もっと、もっともっともっとだ！ 一蹴りでこの場を離脱できる量が無いと意味が無い。途中で追いつかれたらそれまでだ。頼む、早く溜まってくれ……！

「おいおい、何処行く気だよ坊主」

「っ!？」

最悪だ……。さっきのアイツの声が背後から投げ掛けられた。耳に突き刺さるような低音。それだけでも背筋に悪寒が走る。同時に、猛烈な魔力が押し寄せてくるのを感じた。これはヤバイ。俺は咄嗟に脚の魔力を右向きに噴射して大きく横跳びし、一気に距離を取った。

そのまさに直後。俺たちが先程まで立っていた場所が、眩い紅い光に包まれた。かと思いきや。その光が円球状に変形していき、内部に黒煙を封じ込めていく。恐らく低範囲高密度攻撃魔法なのだろう。次の瞬間。夜空をまるで真昼の様に照らし出す紅い極光が、平原に激しく輝きを放った。

「つう!？」
「きゃあ!？」

網膜に突き刺さる光の暴力。両目を手で覆わずにはいられない。それでも尚、瞼を突き抜けて凄まじい光が目には襲い掛かってくる。何て魔法だ。脳みそがグラグラする。余波だけでもこれ程までのダメージを受けるのであれば、もしあの光の内部に居たら俺達は一体どうなってしまうていたのだろうか。想像したくもない。

さつきからアイツは一体何なんだ？俺が見た事も無いような魔法を次々と連発してくる。その全てがとんでもない程の力を有していやがって。とてもじゃないが、俺の基礎を応用した程度の魔法では、立ち向かいようがない。これが……もしかしたら……。
「属性魔法、なのか……？」

今までの学院生活の中で、直に触れる機会なんて無かった、本物の属性魔法。学院で教わったのは基礎と、それを応用したものだけだ。故に俺はそれしか使えない。教官が普段の授業で、危険な属性魔法を使う筈もなく。俺はそんなちっぽけな、狭い世界の中で生きていた。

よくよく考えてみれば、それは何も知らない赤子と何ら変わりない。井の中の蛙大海を知らず、とはよく言ったもんだな。今の俺がまさにそれだ。学院という小さな井戸の中で、俺は己の力を過信し、少なからず頭に乗っていたんだ。その自覚がなかったと言えばウソになる。俺は大抵の奴には負けない自信があった。どんな凶暴な魔物にも引けを取らない実力があると思っていた。だが

は、こういうのなんだよ。今までの世界がまるで鳥かごの中みただ。俺はようやく広い世界に羽ばたく事が出来たんだ。自由に飛び回ることが出来る。何だって出来る。これでようやく……

「手加減無しで、魔法が使えるじゃねえかあ!!」

俺の感情に同調するかのように、全身を凄まじい量の魔力が踊り狂っている。こんな爽快な気分は初めてだ。まるで俺を雁字搦めに縛っていた鎖が解けたかのように体が軽い。魔力が泉の様に留まることなく溢れ出して来る。

「ごめんなあ、アイナ。やっぱ逃げるのナシ。少しだけ待っていてくれ」

「え、あ、あの……」

俺は負ぶっていたアイナを優しく地面に降ろして座らせる。その周囲に、九重高密度魔法障壁を展開させた。奇怪な紋様が描かれた魔方陣が九つ、空中に浮かび上がりアイナを囲う。今の俺が発動させることが出来る最大の密度と量だ。これなら世に出回っている魔法の九割は完璧に防ぎ切れるだろうと、学院長に昔言われた。実際未だ罅割れ一つ入れられたことは無い。俺の自信作のオリジナル魔法だ。

「なんだ、逃げねえのか。女の前でカッコつけてえのは分かるが……死ぬぞ? 坊主」

俺はゆっくりと顔を上げ……先程の紅い光が全てを消し飛ばした場所を見詰める。黒煙の中、不自然にぽっかりと出来上がったその

空間の中に、奴は立っていた。ようやく顔と全身を目にする事が出来る。

年齢は五十〜六十くらいだろうか。顔に深く刻まれた皺からは、それまでの人生の重さがひしひしと伝わってくる。体系はというと、まさに筋肉隆々の一言に尽きた。全身の暗い赤褐色の肌は、重厚な筋肉で盛り上がっている。魔法使いというよりは、明らかに戦士の体系だ。燃え上がるような赤い髪を熱風で揺らし、鋭い眼光を一直線に俺に向けている。やはり相当の手練れであることは間違いない。ただ一つの気がかりは、それだけの威圧的な体を有しているにも関わらず、やはり気配がまるで感じられないという点だ。

「テメエこそ、油断しているとマジで死ぬぞ？　俺はジジイにも容赦はしねえんだよ」

「はっ！　言うじゃねえか坊主。その台詞、俺の息子にも言わせたいくらいだ」

「息子？　冗談だろ。死人か人形がおかしなこと言いやがる」

「はっはっは！　気配がねえことには流石に気付いてたか。だが残念だなあ。俺はそのどちらでもねえ！」

「ああそうかい！！　だったらテメエをボコしてから　じっくり正体、暴いてやんよ！！」

俺はこの時、まだ気付いてはいなかった。俺の体を覆う魔力が、目視できる程に濃い“黒色”へと変化していたことに……。

外伝 アイナ・セブンスフォース（前書き）

アイナがブリュードと出会うまでを描いたお話です。物語の構成上重要な役割を果たしています。ただ、少々惨いお話ですので、苦手な方はご注意ください。外伝の為、地の文の書き方が本編とは異なっております。

外伝 アイナ・セブンスフォース

私の名前はアイナ。アイナ・セブンスフォースと申します。変わったファミリーネームですよ。周りの人にも変だつてよく言われます。それは私自身が一番自覚していることなのに。

実は私には……家族はおろか、親戚も誰一人としていません。天涯孤独の身、という表現が正しいかも知れません。故にセブンスフォースというお名前は、クローデンの教会の神父様に頂いたものなのです。

ちよつと話が変わりますが。この世界には、魔法と呼ばれる摩訶不思議な技術が存在するんです。私も初めて見たときには吃驚しました。それはアニメや漫画の世界にしか存在しないものだからか、思っていたからです。その魔法の中には、更に大きく分けて六大属性と呼ばれる六つの属性があるそうで。それらのカテゴリに当て嵌まらない魔法も、魔力を持った人間も、理論上は実在しないようなのです。

ですが、神父様はある時おっしゃいました。発狂し、自殺未遂を犯した私に対して……。

「異世界より降り立つたお主には、我々の想像を超えた未知なる力が秘められておるかもしれぬ。これまでの魔法の全てを根本から覆す、“七番目の力”が。それが存在しないとは、誰にも断定出来はしないのだよ。その力を使えば、元の世界に戻る可能性も、あるかもしれない。諦めるのはまだ早い。何も分からぬままに命を捨てるのは、勿体無いとは思わんか？」

そう言って、泣き崩れていた私に“セブンスフォース”、“七番目の力”という名を与えてくれたのです。本当に私なんかそんな力があるだなんて、到底思えません。もうこの世界に来てから早1年。実際未だに身体に何の変化もありはしません。

でも……その日。命を諦めていた、その時。私は、魔法理論上有り得ない力を持った人物に、偶然にも巡り合ったんです。吃驚しました。本当にそんな力を持った人が居るだなんて、思ってたから。彼のその力に気付いたのは、出会ってからずっと後のことでしたけど。

彼に着いて行って、ずっと彼の傍に居たら……もしかしたら元の世界に、戻れるのかな。この世界の暮らしにも大分慣れてきたけど……やっぱり、私は帰りたいと思う。大切なお母さんとお父さんが暮らす世界に、帰りたい。また皆と一緒に楽しく高校にだって通いたい。カタカナの発音でなく、漢字の発音で“愛奈”って呼んでもらいたい。こんな些細な願いも……私には叶える権利が、無いのでしょうか。

私は、“日本”に帰りたい……。

「ん……んう……」

あの日。いつも通りにお家のベッドで眠りについた私は。目が覚めたら、全く見覚えの無い街の道端で、倒れていました。衣服は勿論、お気に入りのピンクのぱじゃまのまま。まだ夜明け前だったのか、ちよつと肌寒かったのをよく覚えています。

「あれ……此处、どこ……？」

当然私は、夢を見ているのだと思いました。妙にリアルな、それでいて記憶に強く残る、悪い夢を。裸足で歩き回った石畳の冷たい感触は、今でも忘れる筈がありません。その時ガラスで斬ってしまった切り傷が、足の裏には残っています。私は只管歩き続けました。真つ暗な街の中を。縦横無尽に。何処までも。目が真つ赤に腫れ上がるほどに涙を流しながら。

時折、狭い路地の中に入り込むと、人に出会うこともありました。茶色く汚れたボロボロの外套を被った人たちです。彼らは皆、街の端にある廃れたゴミ捨て場を、まるで飢えたカラスの様に漁っていました。虫が集っているそのゴミの中から、僅かに残った食べかすを見つけ出すと、それを取り合つて殴りあいの喧嘩を始めます。その時の私には、とてもとても理解出来ない行動でした。

見知らぬ場所、見知らぬ人々、見知らぬ世界……。遂に恐怖という感情に押し潰された私は、その場に倒れ込んでしまいました。もう歩く気力も、泣き叫ぶ力も残ってはいませんでした。何でこんな

ことになったのか、自問自答を繰り返しても答えが見付かりません。昨日まで、私は日本の東京にある普通の高校に通う、普通の女子高生だったのに、どうして……。ゆっくりと落ちていく意識に、私は身を委ねました。

次に目が覚めたとき。私は暖かいベッドの中に居ました。見上げる天井はやけに高いです。豪華な装飾の施されたシャンデリアまで見えます。まるでお城のお姫様にでもなったかの様な気分でした。あの酷い世界は夢だったんだと、そう思い込みたくなくなるほどに、幸せな空間です。

放心状態に陥り、暫くぼうっとしていた私の所へ、一人のおじ様がやって来ました。ちよつとだけ伸びたお髭が目印の、優しそうな人です。その人にはこやかな笑みを浮かべながら、私に話し掛けてくれました。ですが、何と言っているのか分かりません。英語なのか、中国語なのか、フランス語なのかすらも、分かりません。私に言葉が通じていないのが分かると、おじ様は脇に置いてあった杖を取り出し、私に向かって何やら呟きました。

「これはすまない。まさかマギクス語を喋れないとは思わなかったものでね。でもこれで、もう大丈夫」

するとどうでしょう。まるで魔法にでも掛かったように、私はおじ様のおっしゃる言葉を理解できるようになったのです。それが本当に魔法だと知ったのは、それから一カ月も経った後でした。

おじ様は、スラム通りに倒れていた私を助けて下さったのです。そして、もし仕事がないのならこの家でメイドをやると良い、とまでおっしゃって下さいました。その時の言葉を思い出すと、私は今でも涙が止まらなくなります。本当に、本当に……嬉しかったから……。

それから、もう一年の月日が流れました。何故私は突然こんな世界に迷い込んでしまったのか。その理由は未だに分かりませんが、この世界の暮らしにも大分慣れることは出来ました。今日もいつもの様にお夕食の支度を済ませ、水を汲みに家の外に出る私。ご主人様に美味しい料理を早く食べて頂きたい。その一心で、私は井戸まで駆けて行きました。その途中……

「へへへ、貴族のメイドなあ、良い獲物が居たもんだなあおい！」
「おい、さっさとしろ！ 騎士団に感付かれちまう！」
「大丈夫だってえのお。俺達には最強の用心棒がいるんだぞ？ お前一体アイツをいくらで雇ったと思ってるんだあ？」

私は、奴隷商人に捕まってしまったんです。

ご主人様にお話を伺ったことはありません。そういう酷いことをする人たちがいる、と。でも、私には関係無いと思っていました。あのお屋敷に住んでいる限り、安全だと思っていたんです。だって、

ご主人様が守って下さるから。そう思っていました。だけど……

「ア、アイナっ……！ 無粋な犯罪者共め、その手を離せえ……！
」

私の悲鳴を聞き付けたご主人様は、ご老体に鞭を打ち、必死に私を助けに来て下さいました。生憎その日、私以外のお屋敷の使用人達は、全員が慰安旅行の為に家を離れていたのです。奴隷商人たちはその隙を突いて現れたのだと思います。

顔を殴られ、腹を蹴られ、両腕を縛られ、無理矢理馬車に詰め込まれる私を、ご主人様は必死に助け出そうとして下さいました。だけど。

「おいおい爺さんよお。無理は良くないぜ？ 死にたくなかったら……引っ込んでなあ……！」

突如現れた用心棒を名乗る赤髪の男に、私のご主人様は成す術もありませんでした。街全体を揺るがす凄まじい爆発が何度も起こり、熱風が叫び続ける私の喉を焼きます。

「いや、いや、いやああああああ
」

その後、ご主人様がどうなったかは、私には分かりません。

私は馬車の中で一人泣き続けました。どうしてこんなことになってしまったのか。私を地獄から救って下さった、この世界でたった

一人の命の恩人が、何故あんな目に遭わなければならぬのか。理不尽を呪わずには居られませんでした。

馬車の中には、私の他にも沢山の女の子が縄で縛り上げられていました。皆同じように、酷い暴行を受けた跡があります。こんな事をしたあいつ等を、許すことは出来ませんでした。私はどうにかして、この子供達を逃がしてあげたいと考えました。誰かが苦しむのは、見たくないんです。

そんな私の脳裏に、数ヶ月前のご主人様のあるお言葉が過ぎりました。

「アイナ。この世界は物騒だ。君も護身用に、この果物ナイフを持ち歩くようにしなさい。こんな物でも、いざという時に役に立つかもしれないからね」

ご主人様は、私のメイド服のポケットに、小型の果物ナイフを入れておいて下さったのです。それを口で啜えて、私は女の子達の縄を一人ずつ、順番に切って行きました。

馬車から逃げる時も、一人ずつ、確実に行くようにしました。幸いにも、気配には鈍感な方々だったようで。私以外の全員が逃げ切るまで、脱走に気付くことはありませんでした。

そう。“私以外”の全員が、逃げ切るまでは……。

遂に異変に気が付いた奴隷商人達は、当然のことながら憤慨し、私をボロボロになるまで虐げました。痛かったです。とても、痛かったです。剣で斬られ、鉄棒で叩かれ、髪をちぎられ、放り投げられる。涙が止まりませんでした。こんな世界で、こんな形で、私の人生は終わってしまふの……？ 私を救って下さったご主人様に、まだ何の恩返しも出来ていないのに。大好きなお母さんとお父さんにも、せめてもう一度だけ会いたかったのに。それなのに……。

「いや……お願い……ゆるし、てっ……！」

そんな時でした。絶望に打ちひしがれ、命を諦めていた私を救って下さった ブリユード・エクスマギナ様が、現れたのは……。

e p . 5 紅と黒

「さあて、どうしたもんか……」

たった三秒間でも吸い続ければ、簡単にあの世に行けるであろう死の黒煙の中、俺は思考を巡らせる。一番の問題点はやはり、奴に気配がないことだ。この状況を利用して姿を眩まされたら、かなりマズイだろう。見失っている内に背後から零距离でまたあんな魔法を食らったりしたら、堪ったもんじゃない。だったら……

「接近戦に持ち込むのが一番だよ……なっ!」

俺は溢れ出す魔力で、全身を覆った。初歩的な肉体強化の魔法の一種だ。魔力の力を利用して己の筋力を無理矢理引き上げると言う荒業だが、非常に有用である為に学院でも早い内からこの魔法を教わる。これによって俺の身体は数段強化された……はず……。

「……は?」

何、これ。俺は一瞬自分の目を疑った。いつもならば白い蒸気のような物が身体に纏わりつくはずなのだが。今俺の全身を覆っているのは、それとはまるで違う見るからに禍々しい“黒色の魔力”だった。こんなのは見たことが無い。魔法間違えたか? 俺。

「ほう、黒色たあまた珍妙な魔力を使うなあ坊主。こりやおもしれえ。どんな攻撃をするのか……楽しみだぜっ!」

「うお!?!」

異常事態に戸惑っている暇なんて無かった。さつきまで十メートル近く離れていたおっさんが、一瞬にして俺の眼前にまで迫ってきたのである。まるで瞬間移動のようだ。つーか瞬間移動たる。絶対に瞬間移動に違いない。……マジで瞬間移動なのか？ そんな馬鹿な。

「おらっ！」

筋肉隆々のぶっとい腕を振り被り、俺に渾身の左ストレートを食らわせようとす。冗談じゃない。あんなのの直撃をモロに受けたら骨が押し折れちまう。

「ぶっ！」

俺は軽く息を吐くと同時に、屈んでそれをかわした。危ねえ、ちよつと頭掠ったぞこの野郎！ やられっ放しのまま終わる俺じゃない。腕を伸ばし切って隙だらけとなったおっさん目掛けて、お返しとばかりに両手で素早くパンチを二発ぶち込む。

「へっ！ おせえぞおっさん！ ……っ？」

ざまあみやがれ。確実にヒットした……筈だった。のに。何故か、バキバキに割れた腹筋目掛けて伸びた俺の腕は、あるうことかおっさんの体を素通りし、向こう側に貫通して行きやがった。意味が分からない。ナニコレ。

「はっはは！ 残念だったな坊主、空振りだぜっ！」

「ぐっ！？」

目の前で起きた理解不能な出来事に思わず呆気にとられていた俺。その腹に、凄まじい膝蹴りがもろに入った。展開していた魔法障壁を軽々粉碎する一撃を受け、息が詰まる。激痛だ。胃の中の物が飛び出そうになる。

（何だ、コイツ！ 実体がないのか！？ そんな馬鹿な。現にこの

衝撃は明らかに人間の体による純粹物理攻撃だ……！　じゃあ何で俺のパンチは奴を擦り抜けた！？　訳わかんねえ……！（）

俺は鈍い痛みを訴え続ける腹を押さえながら、後方に飛び退いた。一度体勢を立て直さなければならぬ。すぐさま再び魔法障壁を展開する。今度はさつきよりもさらに嚴重に。

「ほお、普通の奴なら今ので内臓破裂くらいはするもんだが……大したもんだぜ」

対するおっさんはというと、余裕の笑みを浮かべて腕を組んでいる。完全に遊んでやがるな。何なんだよこいつ、本当に。気配はない、瞬間移動はする、俺の攻撃は擦り抜ける。反則じゃねえか。これで人間だったら、俺は人という生物に対する定義を見直さなければならぬぞ。

「へっ！　生憎そんなヘナチョコパンチで破裂するような内臓は、持ち合わせてねえからな！」

勿論嘘だ。実際もし障壁を張っていなかったら、本当に内臓破裂までいってしまいそうなくらいの力を持った拳だった。だがそんな本音を敵に晒す程俺は馬鹿じゃない。

俺は右手を奴に向かって伸ばし、特大の魔法陣を形成した。その中央部に神速で魔力がドンドン収束して行き、限界を迎えた時点でそれを奴に向けて放出する。分厚い黒煙を弾き飛ばして突き進むその魔力砲は、いつも通りの白色の光線……じゃ、なかった。

「……え」

俺は自分で出した光線を見て、再び茫然自失となった。いつもは白色のはずのそれが、何故か先程と同じ様な、吸い込まれそうな程に暗い“黒色”に変化していたからだ。

「随分とおもしれえ魔力を使うよなあ、テメエはよお。俺も何十年とこの仕事を続けてきたが……こんなふざけた魔力を使う奴は、初めて見たぜ!!」

高速で迫り来る黒色の魔力砲を前にし、逃げようとも、避けようともしないおっさん。俺としては好都合だ。食らって吹っ飛びやがれ。

「はっ!」

気合一閃。おっさんはデカイ目を更に大きく見開き、両手から巨大な紅い魔力砲を放出した。真っ向から勝負するつもりみたいだ。だったら俺も黒色に戸惑っている場合じゃねえ。最大出力でおっさんにぶつかってやる。

「いつけえええええ!!」

大気を振るわず紅と黒。凄まじいエネルギーを伴った二つの魔力砲が激突する。俺の右腕に物凄い圧力が襲いかかってきた。少しでも気を抜けば押し返されてしまいそうだ。全身に力を込め、魔力を更に強めようとしたその瞬間。

黒の魔力砲が、紅の魔力砲を、まるで吸収するかのよう飲み込み始めた。

「っ!？」

「なっ…………？」

途端に俺に掛かっていた負担が一気に軽くなっていく。その信じられない光景におっさんは目を丸くしていたが、俺だって同じくらい驚いている。単純な力勝負の根競べになると思っていたのに、何だこれ……。まるでおっさんの魔法を、俺が掻き消したみたいだ。一体どうなってやがる。

「う、うおあああああああ!？」

刹那の思考も束の間。紅の魔力を飲み込んだ俺の魔力砲は、おっさんの体に凄まじい威力を伴って激突した。衝撃で暴風が吹き荒れ、大地が揺れる。濛々と立ち込めていた黒煙の殆どがそれによって吹き飛んでいった。いくら何でも俺の魔力砲にこんな威力はない。つかそもそも、何で今はおっさんに攻撃が当たったんだ……？

「考えてる場合じゃ、ねえか…………！」

今は戦闘中なんだ。余計なことに気を取られていては、千載一遇のチャンス逃しかねない。俺は軽く頭を振って、雑念を払い飛ばした。分からないことを考えても仕方がない。奴を仕留めるなら、今しかねえ…………！

俺は両足に魔力を集め、一気に爆発させた。おっさんが吹き飛んでいった方向へと、爆風に乗って移動する。

「ちい…………！クソガキが、妙な技使いやがって…………！」

その俺の目の前に、またしてもおっさんが瞬間移動して来やがった。だが、さつきとは違って明らかにダメージは入っている。自慢の肉体がボロボロに焼け焦げているのがその証拠だ。一体どんな力ラクリを使っているのかは未だ分からないが。

「デメエ何者だあ!!」

怒り狂った様子のおっさんの右手には、魔力で創り出された炎の剣が握られていた。大きさは俺の背丈程もある、巨大な両刃の剣だ。紅く光を放ち空気を焦がして燃え盛るそれを、神速で振るう。

「お前こそ何者だよ!!」

しかし、こうなることは俺も予測していた。何度も瞬間移動で不意打ちを食らう俺じゃない。瞬時に魔力を具現化させ、おっさんと同じ形状の剣を作り出す。いつも通り、白色の剣が……やっぱり出来上がらない。俺の手に握られていたのは、漆黒の長剣だった。

「ぬう!!」

「はあ!!」

だが、そんなことを気にしている場合じゃない。俺は渾身の力を込めて、剣を振るった。空を裂く鋭い音が響き渡り、二つの剣が高速でぶつかり合う。相変わらず凄い力だ。弾き飛ばされないように懸命に柄を握り締める。負けて溜まるもんか。ジリジリと火花を散らす刃を、力ずくでおっさんに届かせようとする。その瞬間。

「っ!？」

またしても、俺の黒色の魔力剣が、おっさんの紅色の魔力剣を、

跡形も無く飲み込んだ。それと同時に均衡していた力の構図が一気に崩れ去る。

「馬鹿、な……！？」

俺は動揺しない。このチャンスを逃したらきつと勝ち目は無いだろう。慣性による速度を殺すことなく、おっさんの頑丈な肉体を切り裂いた。大きく縦と横に、十文字を描くかのごとく。

「が、つはああ……！」

夥しい量の鮮血が噴出した。俺の顔面に返り血が飛び散ってくる。生暖かくて気持ちが悪い。だが、これは奴に一撃を与えた紛れもない証拠だ。一見無敵の様にも見える、アイツに。また攻撃が当たったんだ。何故かはわからない。それ以上に、人間と同じ赤い血が噴き出してきたことの方が驚きだった。

「はあ……はあ……。てめ、え……うぐっ！？　がああああ！」
「なっ！？」

ぱっくりと開いたおっさんの傷口から、何故か突然凄まじい炎が上がった。まるで燃え盛る炎の剣で切られたかのような。その炎は留まることなく、おっさんの肉体を焼いていく。全身火達磨になるまで、数秒と掛からない。

「なん……だ、てめえは……。俺の魔力をお……取り込み、やがったのか……？　ぐふっ」

周囲を不気味に煌々と照らし上げる炎の中、おっさんは尚も俺を睨み付けて来る。身が竦む様な怒気だ。身体を焼かれているという

のに、痛みを感じていないようにさえ見える。

「はあ、はあ……。さあ、どうだろうな。俺にもわかんねえよ」

俺の魔力に発火能力なんて物は付与されていない。あつたとすれば、それはおっさんの魔力の方だ。魔法理論上は絶対に有り得ない話だが、仮に本当に俺がおっさんの魔力を吸収したのだとしたらこの結果にも納得はいく。が。とにかく今は何もかもが分からない。俺は俺自身の魔力に若干の恐怖心を抱いていた。

「けっ……。ふざけたクソガキ、だぜ……。どうすんだよ、これをよお……。分離体作るのにどれだけ苦労すんのか……。わかってんのかコラ」

「分離体……？」

何故か聞き覚えのある単語だ。一体何処で聞いたものだったか。俺は思考を巡らす。ぶんりたい。ブンリタイ。人間と変わらない完全な肉体……。魔法……。分離体……。魔力……。 “完全魔法分離体”！

ようやく導き出したその魔法の名称。それは、俺が幼い頃に学院長に理屈だけを教わった超高等魔法だった。あの日の俺には全くもってチンプンカンプンで、その様子を見て大笑いしている学院長に物凄く腹が立ったのをよく覚えている。

「なるほど、そういうことか……。見た目は人間、中身は魔力。そういうことだろ？ おっさん」

俺は尋ねるといふよりは、確かめるような口調で問う。恐らく完全魔法分離体で間違いない。道理で瞬間移動したり、攻撃が貫通したりする訳だ。肉体は本体の人間と同じものだが、魂の代わりに魔力を核として動く抜け殻。移動の瞬間や攻撃を受けた瞬間に、全身を魔力へと変化させることによって、人間には出来ない自由自在の

動きも可能にする事が出来る。おまけに本体と同じ意思・思考を持つ為に、見分けが付けにくいのが特徴だ。それが、“完全魔法分離体”。

よくよく考えてみれば、俺の攻撃が奴に通用したのは、奴が攻撃のモーションを取っていた時だけだった。魔力の身体では攻撃することは出来ない。一度人間の肉体に戻してから魔力を運用しなければ、当然ながら魔法を発動させられる訳がないんだ。まったく、まんまとしてやられたぜ……。

「けっ。覚えておけ……クソガキ。次会う時は本体の力で……確実にぶっ殺してやる……」

「誰が覚えておくかよクソジジイ。とつとと失せる」

「は、っはっは……おもしれえ。これだからこの仕事は……やめらん……ねえ」

紅く激しく、風に煽られ空高く燃え上がる炎は。力無く座り込む俺の目の前で、おっさんの全身を見る見るうちに焼き尽くして行き。血も、肉も、骨も、何もかもが灰となって消えていく。もしあの炎の剣で切り裂かれていたら、こうなっていたのは間違いなく俺の方だっただろう。

本当に、ふざけた魔法だ。完全魔法分離体。本来ならば分離体の能力は本体の10分の1程度しか発揮出来ないと言われている。じやあこいつの本体は一体どれだけ強いんだって話だ。全く持って信じられない。二度と会いたくないのが本心だ。

そうだ……確か奴隷商人の用心棒……とか言ってたよな。こいつ。多分俺が殺したあいつらからの連絡が途絶えたことを不審に思っ、て、此処へやって来たんだろう。だとしたら非常にまずいな。もしかしたら、更に別の用心棒からの襲撃を受ける危険性もある。流石にこれ以上の連戦は無理だ。やはりまずは此処から逃げるのが一番の最善策

「ブリュード、様……」

「んっ。アイナ、無事だったか？」

「はい……」

気が付いたら、俺の背後にアイナが立っていた。壮絶な戦いがようやく終末を迎えたのにほっとしたのか、安堵の表情を浮かべている。俺が展開させた魔法障壁のお陰で、戦闘の衝撃にも全て無傷で済んだみたいだ。良かった良かった。

「あの……」

俺は先程までの思考を停止させる。今くらいは、勝利の余韻に浸るのも悪くはない。気持ちを切り替えてアイナの顔を見詰める。さつきは眠っていたから分からなかったが、アイナの両目は綺麗な黒色をしていた。その大きな瞳を上目に遣い、俺を見上げてくる。何故か少し潤んでいた。

「ありがとうございます……。ご主人様の仇を、取って下さって……」

こんな可愛い女の子に、こんな言葉を言わせてしまう今の時代。まさしく乱世と呼ぶに相応しいだろう。国が乱れ、人心も乱れ、皆が安息を求めて路頭に迷っている。俺一人の力で何ができるのかわからない。だが、戦う力を与えられた以上、俺はその運命を全うしようと思っている。この時代を死に物狂いで生き抜き、いつか太平の世を見える、その日まで。

巨大商業都市・クローデン。我らがエーテルアリア王国の北西部に位置するその街は、世界各国から多くの行商人が集うことで有名だ。戦う力を持たない彼らが、治安の良い街で商売をしたがるのは当然なわけで。その点、交通の便も良く、国王の政治もしつかりと行き届いているクローデンは、まさに全世界の商売人たちにとって理想の街とされている。

人が集まれば、金が集まる。金が集まれば、街が発展する。街が発展すれば、国王が目を付ける。国王が目を付ければ、そこに貴族が住み着く。故にクローデンの街には、中々の地位を持った貴族の人間も何人が住んでいるらしい。アイナが仕えていたのはその内の一人だったとか。凄い人に雇われていたもんだな。

とにかく、クローデンには治安維持騎士団も常駐しているし、ギルド（同じ志を持った者同士で結成される団体のことらしい）の作成を国に申請する事が出来る、国内唯一のギルド本部も置かれていて。人々から第二の首都と称される程に、様々な中枢機能を備えているんだそうだ。

……つて、アイナに教わった。俺が住んだ学院の近くに、そんな凄い街があったなんて知らなかったぜ。だって俺、ずっと学院の寮内だけで生活してきたからな……。こんなことを言ったらまたシエルに笑われてしまいそうだ。ちくしょう。

「とても大きくて、綺麗な街なんですよ。人も沢山いるので、慣れ

ない内は少し戸惑うかもしれません」

俺の傍らに立ち、嬉しそうにそう語るアイナ。確かにデカいっちやあデカいが……ちとデカ過ぎやしないかい？ アイナさんよお……。

俺の眼前に堂々と立ちはだかる巨大な白壁。要塞か何かと勘違いしてしまう程に分厚いそれは、円を描くようにして街全体を守っている、防護壁なんだそうだ。街の出入り口は東西南北の四箇所の中にしかなく、当然のことながらそれら全てに備え付けられている駐屯所では、武装した警備兵達が睨みを効かせていた。

「はは、こりやすげえ……」

あの赤髪のおっさんを倒した後。俺たち二人は体力の回復を待ってから、クローデンへと向かった。幸いにも、奴隷商人グループの用心棒はアイツ一人だったようで。道中また突然攻撃を受けるような事態には陥らなかつた。他の商人仲間たちが様子を見にやってくるのでは、と警戒してもいたが、それも杞憂に終わった。恐らく、おっさんが帰ってこなかつた「敵に倒されたということに感付いているのだらう。奴らにとって金は死ぬ程大事だらうが、それ以上に大事な物は命だ。その命の危険を冒してまで、仲間の身を案じ

はしないのだろう。下衆な連中だ。

その後、アイナをクローデンに送り届ける為に、一緒に行動することになった。どうせ目的地は同じな訳だしな。道中では何故奴隷商人に捕まってしまったのか、主はどう言った人物だったのかを詳しく教えて貰った。あの戦いで俺に対する警戒心が薄れたみたいで安心したぜ。

それからアイナの体調を案じながら、ゆっくりゆっくり歩みを進め。ようやくクローデンに辿り着いたのは、おっさんとの戦いから四日経った日の朝だった。

「でも、これだけ警備が嚴重だつてのに、どうして街の中でお前が攫われる様な物騒な事件が起こったんだ？」

何処からどう見ても、奴隷商人のような連中が街に入れる隙間がない。

「それは……恐らく彼らは、元々クローデンに住んでいた住民達なんだと思います」

「元々住んでた？ こんな家賃高そうな街にか？ それだけの金があるなら、別に奴隷商人なんて汚い仕事なんざする必要もないと思

うんだが」

「あ、いえ……。ごめんなさい、住んでいたっていうのは語弊がありましたね。この街には、スラム通りと呼ばれる、家を持たない人々が住み着く薄暗い路地があるんです。主には、商売に失敗して無一文になった行商人や、犯罪を犯して職を失った罪人達がそこにいますね。私も一度しか通ったことがないので、あまり詳しくは知りませんが……。やっぱり、良からぬことを企む悪い人たちの溜まり場と化しているみたいですよ。あの奴隷商人たちも、恐らくその住人だったんだと……」

なるほど、な。街の中に元々居たんじゃ、追い出してもしない限りあの事件を未然に防ぐのは不可能だ。多分奴らは、高値で売れそうな女の子達の目星を予めつけておいて、計画していた日に同時に誘拐を実行したんだろう。警備の連中は赤髪のおっさんに片付けさせて、闇夜に紛れて逃亡。その後には街の外、何処か別の場所に隠れていた本隊。恐らくは隣国の奴隷商人グループだろう。に合流し、彼女たちを売り捌いて一儲けしようとも企んでいたんだろうな。

「……完全に治安が良くて安全だ、とは言い切れないんだな。この街も」

「はい……」

このご時勢だ。それは当然なことだろう。弱い者が強い者に虐げられ、略奪され、涙を流す時代だ。か弱い民衆を守ろうと、国王も必死に騎士団を編成してはいるんだろうが……これが現状だ。悪党の数は一向に減らない。

俺はそんな腐った連中をぶちのめす為に、強くなりたい。もっともつと強くなつて、この時代を終わらせたい。その力を得る為の通過

点として……この街にやって来たんだ。

「行こうぜ、アイナ。此処まで一緒に来たんだし、お前の家までは送り届けてやるよ」

「あ……はい……」

一瞬、寂しそうな顔をしたのは何故だろうか。少し不思議に思いつつも、俺は門に向かって歩を進める。アイナも二、三步遅れて俺に着いてきた。

明らかに門番は俺たち二人を不審に思っているようだった。まだ数十メートルも離れているにも関わらず、じつとこちらを凝視して来ている。まあ、こんなボロボロの服装で歩いてれば、当然か。

「待たれい！ 此処は商業都市・クローデンである！ 中に入りたくば、身分を証明出来るものを提示せよ！」
細長い槍を携えた門番が二人、俺たちの前に立ち塞がった。上から下まで、舐めるように俺たちを観察している。傍らのアイナはビクツとして、俺の後ろに隠れてしまった。あんな酷い目にあつたんだ。男が怖くて当然だろう。

「俺の名前はブリユード・エクスマギナ！ アミックスハート高等魔法学院の学生だ。今は課外授業を言い渡されて、その目的地に向かう為に旅をしている。道中の疲れを癒す為、この街に立ち寄りた
い」

「ふむ……。フェミナ・アミックスハートより、学生が一人この街を訪れるとは聞いている。貴様がその学生だと、証明できる物はあるか？」

「少し待ってくれ」

俺は背負っていたリュックサックを地面に降ろし、中を漁った。確かこの辺に突っ込んだと思ったんだが……。あつたつた。

「これでいいか？」

俺は学院の学生証を取り出して見せた。そこには、俺の名前が写真付きでしっかりと印刷されている。門番はそれをじっくりと見詰めること数秒。納得したかのように大きく頷いた。

「ふむ……。良かろう！ 通行を許可する！」

ほつと肩を撫で下ろす。これで駄目だと言われたら、他に打つ手はなかっただけに一安心だ。まあ、それよりも……。あの杜撰な学院長が先に連絡しておいてくれた事に驚きだぜ。ああ見えて実はしっかり者だったりするのかねえ。

「その後ろに隠れている女！ 名を名乗れ！」

「ひっ！」

などと考えていると。門番が後ろで縮こまっていたアイナに声を掛けた。警備の為に必要なことなんだとは思うが、もう少し優しく出来ないもんなのかね。こいつ。

「わ、私は……。えっと……」

案の定、アイナは顔を真っ赤にさせて口をばくばくさせている。極

度の緊張で舌が回らないみたいだ。無理もない。仕方なく俺が代弁する。

「彼女はアイナ・セブンスフォース。この街に住んでいる貴族に、メイドとして雇われて」

「……！」

何だ……？ アイナの名前を名乗った途端、門番の表情が一変した。まるで探していた張本人を見付けたかのような、驚愕の表情だ。それは回りに居た他の奴も同じで。一斉に耳打ちをしたり、武器を構えたりしだした。穏やかじゃねえな、おい……。いきなり門の中へと大急ぎで走り去って行く奴も居た。何なんだ、一体。

「アイナ・セブンスフォースといったな」

俺と話していた門番が一步、前に詰め寄る。俺は反射的に身を乗り出して、アイナを庇った。

「は、はい……」

当の本人はというと、まるで思い当たる節がないようで。大きな瞳をしきりに瞬かせて、状況を把握しようとしていた。

と、その時。いつの間にか俺たちの背後にまで回り込んでいた数人の衛兵が、突然アイナに向かって武器を突きつけた。鋭い刃が喉元を掠め、身動き一つ取れなくなる。

「え、え……？」

「おい、何の真似だ！」

俺は分厚い鎧に身を包んだそいつらを睨む。フルフェイスの兜を装

備している所為で、どんな表情をしているのかは分からない。だが、アイナに対して何らかの敵意を持っているのは間違いなかった。

「動くな!!」

アイナと衛兵との間に割って入ろうとした俺にも、武器が突きつけられる。一体何だっただ。こんなか弱い女の子相手に物騒なもん使いやがって。やるか？ ああ？

俺は全身に魔力を漂わせ始める。そっちがその気ならやってやるぜ。どんな理由があるのかはしらねえが、アイナがこんな目に遭う理由なんてあるはずが

「アイナ・セブンスフォース！ 貴様を、“クルトゲイス伯爵殺害”に關与した疑い”で、逮捕する!!」

なん……だと……？

「くそっ……！ なあにが他のメイドや執事、護衛兵が全員休暇を取っている間に、アイナが強盗グループと共犯して主人を殺害した、だよ！ 証拠も祿に探してねえくせに、勝手に決め付けやがって！ 出身が不明っただけで罪人にされんのかよ、この街は！」

俺は手にしていたジョッキを傾け、ビールを一気飲みにする。酒でも呑まなきゃやってられねえ。国の騎士団があんな杜撰な仕事をする奴らだなんて思わなかった。とりあえず犯人を捕まえておけば、市民が安心するとも思っただけやがるんだろう。下衆が。

「親父い、ビールもっど持っ来て来〜〜い！」

アイナが無実の罪で武装兵に連行されてしまっただけから、もう半日以上が経過している。俺も一緒に拘置所へと連れて行かれ色々事情聴取をされたが、すぐに釈放された。こんなにもあっさり済んだのは、アミックスハートの学生という身分のお陰だと思う。何だかんだであの学院は、国の中でもかなり有名な学院らしくて。その学生が貴族殺害に関与しているはずがないという、またも何の根拠もない理由で、俺は無関係無罪放免御用は済んだ帰り給えという流れになった。

だが、アイナはそうは行かなかった。何でも彼女は、いくら調べても詳細な出生が分からないどころか、そもそも国籍自体が存在しないらしい。故に他国からの不法入国者であるという見解がなされ、

隣国の犯罪グループと繋がっているのではないかと推測されたのだ。

そんな時に起きた、あの奴隷商人による誘拐事件。アイナは被害者だというにも関わらず、主のクルトゲイス伯爵殺害に一役買ったと見なされ、共犯者として身柄を拘束されてしまったのだ。

あの日何があったのか、旅の間に聞いていた俺は、それが当然事実無根であることを知っている。そもそも、アイナはそんなことをする子じゃない。自分をメイドとして雇って仕事をくれた主に、感謝していたくらいだ。

「兄ちゃん、もうやめときなつて。若い内から大量の酒を呑むのは、体に良くない」

「大丈夫だってええのお！俺は酒には滅法つえーからなあ！」

拘置所を追い出された俺はというと。騎士団の対応に怒りを露にさせながら街を歩いている途中、丁度良いところに質素な酒場を発見して。先程の鬱憤を晴らすべく、こうして昼間から酒に溺れていた。

「何か、悪いことでもあったのかい」

店主のスキンヘッドの親父は、中々の聞き手上手だ。こういふ客には慣れっこなんだろう。洗い立てのジヨッキを布巾で磨きながら、カウンターに突っ伏している俺に声を掛けてくる。

「あつたなんてもんじゃねえよお！ 一体この街の騎士団はどうな
つてやがんだあ！ 無実の女の子に罪を擦り付けやがってえ……！」
俺もやはり、少なからず酔っているみたいだ。
口調がいつもより荒いのが自覚出来ている。

「ああ……騎士団絡みかい。それは不運だったなあ……」

「どづいうことだ？」

俺はガバツと顔を上げて、身を乗り出した。

「クローデン治安維持専門騎士団団長・ヴェリアといえば、この街
じゃ超有名人なんだが……兄ちゃん知ってるかい」

「……知らん」

「ははは、だと思ったよ。兄ちゃんお上りさんみたいだしな」

「余計なお世話だつ！」

俺はぷいっとそっぽを向く。それを見た親父は悪かった、と笑いながら新しいビールの入ったジョッキを差し出してくれた。俺はそれを機嫌悪そうに一気飲みする。

「ヴェリアっつーのは、エルフ族のそれはそれは美人の女でなあ。
ボンキュボンな上にツラも最上級ってんで、クローデンの男達の憧
れの的なんだよ」

「んくっんくっ……ぷはーっ！ ……それが、何だよ」

それを言うなら、アイナだってかなりハイレベルの女の子だぞ。背は低いが、逆にその方がいいという輩も多いはず。

「そのヴェリアがこれ以上になく厄介でな。可愛いだけなら良かったんだが……それに加えて、大の人間嫌いときたもんだ。何か事件が起きたら、全て人間の仕業だと言い張る奴でよ。それで冤罪をくらった俺の知り合いが何人もいる。どうにかならねえもんかねえ……」

らしくなく下を向き、溜息をつく親父。余程そいつに苦労しているのだろうか。

「……そんな自分勝手な女が、何で騎士団長なんかやってんだよ。普通に考えて人選ミスとしか思えねえ」

「騎士団つーのは、完全実力主義団体だからなあ。一番強い奴がトップの地位に立つのさ。俺は実際に見たことはないが……奴の戦闘力は異常らしい」

「……異常？」

「ああ……。何でも、三万の軍勢を相手にたった一人で立ち向かい、無傷で帰還したつつう逸話があるそつだ。俺にはとても信じられないがな」

「は？」

三万相手に無傷？　ありえねえ。どんな反則やらかしたんだよそりやあ……。

俺はきつと口を開けてあんぐりとしていたんだろう。そこに親父がつまみのピーナッツを放り込んできた。

「そうなるよな、普通。こんな根も葉もない話。だが奴が騎士団長であることは事実だ。悪いことは言わねえ。あいつに関わるのはやめておけ」

ピーナッツをポリポリとかみ砕きながら、一呼吸置く俺。我が儘騎士団長には関わるな、だと……？　んなもん答えは決まってる。

「……へっ！　俺がそいつをぶちのめせば良い話じゃねえか。ついでに伯爵殺害の真犯人達も一緒に差し出して、アイナの冤罪を証明してやる。至極簡単な話だぜ」

「おいおい兄ちゃん、冗談でもそれは」

「冗談じゃねえ！　俺の大事な連れが罪人扱いされて、黙ってられる訳がねーんだよ！」

俺は握りしめた拳で、カウンターを思い切りぶっ叩いた。食器やグラスがぶつかり合って金属音を上げ、いくつかのジョッキが床へと落下して見事に砕けちった。

その破片を踏み潰しながら、俺は席を立つ。

「……邪魔したな。おかけで気持ちに整理が着いた」

財布を取り出し、代金をつまみ出して置いていく。割っちゃまった分、少し余分に払うべきだろう。

それ相応の金をカウンターに置き、背を向けて歩きだす俺。

「……………待ちなあ兄ちゃん」

諦めたような声音で、親父が呼び掛けてくる。俺は振り返らず、ただ立ち止まった。

「正当な理由と証拠を示さない限り、いきなりヴェリアに喧嘩を挑んだりしたら、それこそ捕まっちゃうぜ……………。まずはその真犯人とやらを奴らに突き出すべきだ。まあそれが出来れば苦労はしねえんだろうが……………。何かあてはあるのかい」

「ないっ!」

「くっ……………はっはっはっ!」

力強い俺の即答に、親父は大口を開けて笑った。そう返すであろうことは予測していたんだろう、きっと。

「だと思っただぜ。なら良い事を教えてやる。よく聞け。そういう奴らの手掛かりを掴むには、打ってつけの場所があるんだ……………」

俺が店を出た時。真上にあつたはずの太陽は、もうすっかり沈んでいた……。

「……此処が噂のスラム通り、か。なるほど。アイナと親父が言つてた通りだぜ……」

俺は眼前に広がる異様な光景に、思わず苦笑いを浮かべる。酒場を出て以降、煌々と光る街灯に照らし出された、美しい町並みに目を奪われていた自分がまるで嘘みたいだ。

「本当にクローデンだよなおい……」

そう思いたくなるほど、他の場所と比べて文字通り此処は異質な場所だった。

一面に広がるゴミと泥。それらに群がるカラスやゴキブリ。地面を這って進む気持ち悪い爬虫類は数知れず。それらを助長する猛烈なまでのカビの臭い。

そして - - 暗がりですべてに蠢く、ボロ布を纏った人間。

これ以上はない嫌悪感に苛まれながらも、俺は足を踏み出す。

「確かに此処なら……悪人の情報なんて腐る程集められるだろうな」

一斉に群がって来た鼠を蹴散らしながら進み、地べたに座り込んで生ゴミを漁っていた男に声を掛ける。

「なあ、ちよつといいか」

「……」

無言のまま振り返ったそいつの顔には、まるで生気がなかった。頬は痩せこけ、目の下には真っ黒な隈があり、髪はボロボロで、口の間から見える歯は、殆どが折れたり欠けたりしている。

「っ……っ！」

初めて見たスラム通りの人間の異様さに、思わず息を呑む。まるで死人のような、俺を見上げる目に恐怖を覚え、直視することが出来

俺は突然叫び声を上げた男に右足を掴まれ、盛大に転ばされてしまった。受け身もろくに取れず、顎が地面に激突する。そこには、雨水や酒やガソリンや液体調味料などが混ざり合っただけであらう、黒々とした水溜まりがあった。一息吸い込むだけでも、猛烈な臭気が俺に襲い掛かって来る。

「くっ……！ 何しやがるテメエ！！」

転んだ俺に馬乗りになって、男はリュックサクヤポケットの中に手をつ込んで来る。どうやら金めの物を探しているみたいだ。

「離れ、ろ！！」

俺は咄嗟に、魔力を込めた左手で男の脇腹を殴り飛ばした。殆ど骨と皮だけの身体は想像以上に脆く、この一撃だけでも肋骨が何本か折れたのが感触で分かった。

「ぎゃあああああ！！」

まるで獣のような叫び声を上げて吹き飛ぶ男。顔面からもろにヒビだらけの壁へと激突していた。そのまま力無く崩れ落ち、ピクリとも動かなくなる。

「くそっ、何だってん……だ……だ……」

身体中に付着した泥や埃を払いながら立ち上がる俺。その眼前には、同じようなボロ布を纏った男達が、何処からともなく集まりだしていた。数はまさに、無数。数え切れない。狭いスラム通りを覆い尽くす程の量だ。

「金……よこせえ……!!」

「獲物! 獲物だあ!!」

「逃がさねえ!! 絶対にい!!」

後ろを振り返っても、やはり退路は断たれていた。全員が血に飢えたハイエナのように俺に襲い掛かろうと身構えている。

「やべえかな……こりゃあ」

俺は拳を握り締め、全身に魔力を纏わり付かせた――。

冷たい。冷たくて、重い。初めて嵌められた手錠は、私から希望を奪うには充分すぎる代物でした。

閉ざされた空間。お日様の日差しは一切届きません。

ごつごつした石の床に、私はじつと横たえています。此処から抜け出したい。けれど、頑丈な鉄の檻がそれを拒みます。アニメや漫画の世界で、こういうのは何度か見た事があります。だけど、実際に体験している今、それは想像以上に辛いもので。涙を流しても、誰も助けてなんてくれません。この地獄が早く終わって欲しいと、そう願いながら、じつと待つことしかできないんです。

半ば放心状態になったままぼうつとしています。奥の方から、看守室の扉が開く音が聞こえて来ました。複数の足音が、ゆっくりと近付いてきます。私は恐怖で震え上がりました。また、あの人が。

「いい加減に白状する気になったかしら？ アイナ・セブンスフォース」

クローデン治安維持専門騎士団団長ヴェリアさん。鉄の檻を開いて中に入り、私をじつと見下ろしています。彼女の名前だけなら、私でも知っていました。すらっとした、まるでモデルさんの様な体系の女の人です。綺麗な黄緑色の髪が肩の辺りまで伸び、先の方がくるくるっとウェーブしています。

彼女は人間ではありません。エルフという種族の方です。その証拠に、人間でいう耳にあたる物が、鋭く尖っています。逆に言うと、それ以外に見た目で人間との違いはありません。

その整った顔つきは、まさに美人というに相応しいです。でも……

「私、何も……やってない……です」

「嘘をつくくなっ……！」

「ううっ……！」

この人は、とても怖いんです。無抵抗の私のお顔を、容赦なく殴ります。ご主人様殺害に関する情報を言えと言われて、何も言わない私に対し、苛立っているのだと思います。

あれから。何度も何度も、こうして暴力を振るわれました。折角ブリュード様に綺麗に治して頂いたお顔も、またポロポロになってしまいました……。

「うっ……うっ……」

自然と涙が零れ落ちます。ポロポロと流れ出るとは、頬を伝って地面を濡らしていきます。いつの間にか、小さな水溜りが出来ていました。そこに映し出された私の顔には、大きな紫色の痣が出来ていきます。

「くすくす……そうやってずっと泣いていればいいわ。私はそれでも一向に構わないわよ？ 汚らわしい人間を……こうしていたぶれるもの……！」

「うっ……！ くっ、あああ……！」

また、来た……。突然私の回りにあつたはずの空気が、急激に薄れていく……。息が、苦しい。まるで水中に落とされたみたいに、呼吸が全くできません。

「アッハハハ！ ！ 苦しい？ 苦しいわよねえ？ 何とか言ってみなさいよお……！」

「くううううう……！ うっ……！ うっ……！」

必死に酸素を求めてもがく私を、風の刃が切り裂きます。空気中に真空状態の場所が出来たせいで、鎌鼬が発生しているんです。

まるで鋭利な刃物で切り裂かれたかのように、私の皮膚がズタズタになっていきます。痛い。痛い痛い痛い。苦しい苦しい。苦しいよお……。

「アハ！ アハハハ！ アハハハハハ……！」

再び薄れて行く意識の中。私の耳には、いつまでもヴェリアさんの

笑い声が響いていました……。

「チツ……キリがねえ……！」

次から次へと襲い掛かってくるスラム通りの住民達を、必死に跳ね飛ばし続ける俺。一人一人は戦闘のせの字も知らないような雑魚ばかりだが、此処まで束になると流石に厄介だ。

度重なる波状攻撃を受け、俺の体を守る魔法障壁も既に碎け散ってしまっていた。再び張るにしても、そんな暇はない。少しでも気を抜けば奴らに鬺り殺されてしまうだろう。

「ひやははははは！ かかれかかれえ！！」

「久々の獲物だあ！！ 手柄は山分けだかな！？ 抜け駆けすんじゃないぞ！！」

汚らしい笑い声を上げ、正面から俺に飛び掛ってくる二人を右腕一本で殴り飛ばす。その隙に後ろから俺にしがみ付いて自由を奪おうとしてきた男を、魔力砲で吹き飛ばした。この程度ならば例え死角であろうと、正確に魔力砲を撃つことくらい造作もない。だがしかし……

「これならどうだあ！！」

「ちっ！」

一番厄介なのは、こいつらの中に魔法使いが混じっている点だ。握り拳程の大きさの火の球が数十、俺に向かって一斉に飛来してきた。その内の幾つかが、群がっていた他の住民に衝突し爆発する。

「うわああっちい！！」

「てんめえ何しやがる下手くそが！！」

味方に当たろうが当たるまいがどうでもいいようだ。というより、熟練した魔法使いならば狙った敵のみを攻撃することも容易いはず。やはり素人だな。

「鬱陶しいんだよ！！」

俺はそれら全ての火球を飲み込むほどに巨大な魔力砲を形成し、瞬時に放つ。黒色の魔方陣の中央から、凄まじい威力を伴った黒いビームが飛び出て、住民共を焼き殺した。

やはり、今回も白色ではなく黒色の魔法が発動してしまうようだが……少しは慣れてきた。何故だか分からないが、以前よりも威力が増しているようにも感じる。黒色の色も、完全魔法同位体のおっさんと戦った時より、更に濃い漆黒へと変化していた。

「鬱陶しいのはテメエだあ！！ 大人しく狩られやがれ！！」

俺の攻撃を寸前で避けた男が、魔法を発動させる。翳した両手に緑色の小型魔方陣が二つ浮かび上がったかと思つた瞬間、

「しまつ……！？」

突如、何も無かつた筈の空間から頑丈な鎖の束が無数に伸びてきた。それらは瞬く間に俺に絡み付き、手足の行動の自由を奪つていく。いくら引き千切ろうと力を込めても、ビクともしない。中々の魔法じゃねえか……！

「よくやつたあああー！！」

「こんな便利なものあるなら最初からやれよ！！」

「うるせーな！ 至近距離じゃねえと上手く発動しねーんだよ！！」

先程まで縦横無尽に暴れまくっていた獲物が遂に動きを封じられ、満面の笑みを浮かべる住民達。唇を舌で湿らせ、まるで豪華なご馳走でも食すかのような勢いで俺に殴りかかってくる。

「てめえさつきはよくもやつてくれたよなあー！！」

「ガキがいい気になんじゃねえぞコラー！！」

そこら辺から？ぎ取って来たかのような、不恰好な鉄の棒を振り回

し、俺の顔面を何度も殴打する。

「ぐっ……！ がはっ……！」

口の中が切れた。鉄の味がじんわりと広がっていく。それらは口中に留まらず、ぼたぼたと地面に吐き出されていった。

「ひやははははは！ いい気味だぜおい……！」

「雑魚が……！ 所詮一匹じゃ何もできねえんだよ teme はよお……！」

そんな俺の姿を見て、更に攻勢を強める住民共。我先にと群がって来ては、俺に暴力の嵐を食らわせていく。腹を殴られて息が詰まったところに、再び顔面に鉄棒の殴打が入った。魔法を発動させようにも、こんな状況では集中する事が出来ない。

（ガチでやべえな……。此处まで多いと……！）

もはや血を吐く暇すらない。脳みそが揺れている。視界が安定しない。頭部から流れ落ちた血が右目を塞いだ。

（こんな、雑魚共に……！）

一瞬の間。それさえあれば、全身から魔力砲を放出してこいつらを吹き飛ばすことも可能だろう。だがしかし、勢いづいたこいつらにそんなものはない。俺が死ぬまで攻撃を続け、死んだ後は金品を根こそぎ奪った拳句、腐らない内に臓器を売り捌きに行くに違いない。

やばい。本気で、やばい。なめていた。スラム通りを。俺は心の何処かで、自分は強いから大丈夫だと過信していたんだ。学院の奴ら

「これで終わりだ!! ひゃっはあああああ!!」

俺の命の、終わりを。

躊躇いなど一切無さそうだった。俺みたいな子供だろうと、女だろうと、老人だろうと、こいつらは迷いなんてしないだろう。ただ獲物から金を奪い取り、自分の生きる糧とする。弱肉強食の自然界と同じだ。俺はその生存競争に負けたんだ。言い訳なんてしない。これは俺自身が導いた結果。

(ごめんなあ、アイナ……)

心の中で最後に、アイナの顔を思い描く。心残りがあるとすれば、それはアイナを助けられなかったことだ。冷たい牢獄に押し込まれて、きつと酷い仕打ちを受けているに違いない。人間嫌いの騎士团长ヴェリアの所為で。あいつがアイナを罪人扱いした所為で、こんなことになったんだ。

顔も見た事もないそいつに、激しい憎悪の感情が込み上がる。あいつさえいなければ、きつと俺達は今頃、町で宿でも取って、二人で食事でも楽しんでいたに違いない。それなのに

鋭い刃物が空を切り裂く音が聞こえる。俺の首を狙っているんだろ
う。無理だ。もう力が入らない。俺は此処で死ぬ。

「我に仇なす者を流し尽くせ」

“タイダルウェイヴ”！！」

その時だった。突如として、スラム通り全体を飲み込むほどに巨大な、“津波”が発生したのは……

「何だ……コレ……」

視界一面に広がる水、水、水。それらは、何故か俺の居る場所だけを避けて暴れ狂っていた。

先程まで俺を殺そうと躍起になっていた連中全員が、透き通った透明な水に飲み込まれている。酸素を求めて必死に水面から顔を出そうともがくが、激しい水流がそれを許さない。

俺は視界360度に広がるその光景に、ただただ呆気に取られていた。まるで水族館の水槽の中に放り込まれたみたいだ。ただし、水の中で舞っているのは、海洋動物でなく人間。全員が全員、苦悶の表情を浮かべながら、上下左右に動き回っている。

「魔法……なのか……？」

仮にこれが誰かの発動させた魔法のだとしたら、その主は相当な実力を持っているのだろう。一端の学生である俺なんか比べ物にもならない。俺が出来るのはせいぜい、魔法による肉体強化と、魔法障壁展開、魔力砲、そして完全魔法同位体の時に使った魔法剣の創造くらいだ。

こんな何百人もの敵を一撃で仕留められる魔法。そんなのがあるとしたら、それは……

「ふいー。危機一髪でしたねえ。少年さん大丈夫ですかー？」

そんな俺の思考を妨げる声が、頭上から掛かった。若い女性の様な声だ。驚き上を見上げると、五階建てくらいの高層ビルの屋上の際に座り、こちらを見下ろしている人物が居た。月明かりに照らされているが、どんな容姿をしているのかまでは流石に見えない。

俺は率直な疑問を投げ掛ける。

「な、なあ！ この魔法、アンタが発動させたのか？」

「むむー。質問しているのは私ですよ。先に貴方が答えて下さい

」

やけに間延びした返事をされた。どうも調子が狂うな。周囲は猛烈な勢いで水が踊り狂っているというのに、彼女のまったりとした声の所為で、緊張感が欠けてしまいそうになる。

とはいいつつ。確かに質問に質問で返すのは失礼だな。俺は自分の体を確認してから、言う。

「大丈夫……ではねえかな。左腕が折れてる。あとは打撲が数箇所と……もしかしたら肋骨も何本かイッてるかもしれないねえ」

「なんとっ！？ それはそれは痛い痛いですねえ。ちょっとこの私に見せて下さい。……とおっっっ！」

わざとらしく体を仰け反らせて驚く彼女。かと思いきやいきなり立ち上がると、変な掛け声と共に躊躇無くビルの屋上から飛び降りやがった。そのまま俺に向かって猛スピードで落下してくる。風でスカートが捲かれて水色のパンツが丸見えなのは気にしないのだろうか。

「おおおおおおお！？」

俺はまたしても呆気に取られていた。何やってるんだこの子。つか、この高さから落ちたら死ぬよな絶対。受け止めてやるべきなのか？ でも左腕折れてるし。無理無理。

などと考えていると。

「うううう着地いいいい！！」

まるで幼稚園児が遊んでいるかのような台詞を吐きながら、彼女は俺の目の前に難なく着地した。見ると、両足の下から水色の魔方陣が出現していて、その中央部分から下方向に向けて水が勢い良く噴射されている。これで落下速度を相殺したのだろう。中々熟練した技術がないと出来ない芸当だ。

「ふむふむどれどれえ」

藍色の大きな目を上下左右に動かして、俺の体をじつと観察してくる。ちよつと恥ずかしいんだけど。

此処まで接近されれば、先程はよく見えなかった顔や体つきが分かるというものだ。

すらつとした体格で、身長は女性にしては結構高い。165センチくらいはあるんじゃないだろうか。水色の艶のある髪が肩の辺りまで伸び、先の方がくるくるとウェーブしている。余談かもしれないが、胸も結構デカイ。アイナ程ではないけれど。年齢は……20前半くらいかな。顔は綺麗に整っていて美しいけど、若干の幼さが垣間見て取れる。

そして……何だこれ。人間でいう耳に当たる物が、物凄く尖っている。病気か何かでこうなっているのか？ わからねえ……。

「ほーほー。確かに左腕さんが折れてますねえ。あらあら肋骨さん

もイツちゃってますよお。左が3本、右が2本ですねえ。あとはあととは……打撲さんがいっぱいですね。なるほどなるほど」

……なに、この子。電波なの？ 腕を組んで何やらぶつぶつ言っている。内容はどうやら俺の傷の具合についてのようだ。見ただけでどうなってんのか分かるのかよ。もしそうなら神のレベルだぜおい。

「わっかりましたよお〜！ この私にお任せあれ〜」

自信満々にそう言い放つと、瞳を閉じて静かに魔法を唱え始める。

「癒しの水よ。彼の者に清らかなる安らぎを与え給え” “ウ

オーターヒール”！」

「うお!？」

突如として、俺を包み込むかのように四つの魔方陣が出現した。大きさは人間大で、色は水色。それらが光り輝いたかと思った瞬間、俺の体を苦しめていた激痛の波が、嘘の様に引いていった。見ると、逆方向に曲がっていた左腕が綺麗に元に戻り、到る所に点在していた打撲の傷も消えていく。凄い。凄すぎる。こんな治癒魔法は今まで見たことがない。俺が使っていたのなんてまるで比べ物にならないほどのレベルだ。

驚愕に思わず目を見張っていた俺を見て嬉しくなったのか、彼女は髪の毛を揺らして悪戯っぽく笑う。

「にひひ〜。痛い痛い飛んでいきましたねえ。何処か他に治して欲しい場所がありますかな？」

「いや……大丈夫だ」

自分でも信じられないくらい、俺の体は見事に完治していた。あれ程の瀕死の重傷を負わされていたというのに。一体どうなっているんだか、訳が分からない。

「それはそれは良かったですねえ。　ああそうだそうだ。質問の答えがまだでしたね。この“タイダルウェイブ”を発動させたのは勿論私ですよ」

頭上にクエスチョンマークを幾つも浮かべている俺を差し置いて、彼女は思い出したかのように後ろを指差して言う。未だに水の流れは少しも衰えてはいない。さっきまで苦しみもがいていた住民達は、もう既に動かない死体と化していた。数百という数の死体が、俺の周りを舞っている。あまり良い光景ではない。

こんな恐ろしい魔法を、平然と発動させることが出来る彼女は、一体何者なのだろうか。

「それにしても、このスラム通りに一人でやって来るなんて、貴方度胸ありますねえ。ただのお馬鹿さんなのかな？　それとも何か目的でもあったのかな？」

俺を見上げながら問いかけてくる彼女の表情は、無邪気そのものだった。人を殺して平然として居られる様な冷徹さは微塵も感じられない。俺はかなりの違和感を抱きながらも、口には出さないのでおく。

「まあ、ちょっと……な」

「ほーほー。ちょっと、とは？」

どうしたもんか。正直に言うべきなのだろうか。下手に嘘をついて怪しまれるのも嫌だしな……。だが、こいつが騎士団の関係者だったらどうする。その場合が一番まずい。アイナを釈放する為に動い

ていることがバレたら、今度こそ俺まで捕まってしまうかもしれない。

だが……こいつに命を救ってもらったのもまた、事実。その恩人に対してあまり嘘は言いたくない。だったら……話の核心だけを隠せばいいよな。

「最近、この辺りで隣国の奴隷グループが色々と悪さをしてるって聞いてな。どうにも許しがたいから、そいつらのアジトを突き止めて一網打尽にしてやりたいと考えていたんだが……全く尻尾を掴むことが出来なくて。それで仕方なく、そういう奴らについて詳しいであろうスラム通りの住民を問い質すべく、此处へやって来たんだ。結果はあのザマだったけどな」

嘘は言っていない。クルトゲイス伯爵殺害の件や、アイナについては伏せておいたが……問題ないだろう。筋は通っているはず。

俺の話をじつと聞いてた彼女は、何故か俯いて肩を震わせている。……何かマズいこと言ったのか、俺。途端に不安になる。自分の発した言葉をもう一度なぞってみるが、別におかしなことは言っていない……はず。何か言ってくれよ、頼むから。

「……しい」

「え？」

微かに搾り出された声は、よく聞き取ることが出来なかった。もう一度言ってもらおうと口元に耳を近づけた途端、

「す〜くばらしい!! 貴方の様な一般人さんが、治安維持の為に行動しているだなんてえ!! 私感動しちゃいましたあ!!」

いきなりガバツと顔を上げて、俺の両手をぎゅっと握り締めてきた。目をキラキラと輝かせて、俺の瞳をじっと見詰めてくる。何だ何だ何なんだ。本当にこの子訳が分からん。

「お、おう」

「職権乱用して人間さんを虐めてばかりいるお姉様にも見習っていただきたいですね〜！ ああの！ 此処でお会いしたのも何かの縁！ 私にも是非是非その正義の役目、お手伝いさせてくださいー！！」

「え、あ……。手伝ってくれるのか？」

「はい〜っ！！ 奴隷商人さん達にはいい加減私もいららっとなっていたので、ちょうど良いですっ！！」

これは思わぬ収穫だな。正直手詰まりに思っていた真犯人探しに、少しの希望が見えた。此処で情報を得られなかったらどうしようもなかっただけに、これは大きい。よく分からないが、彼女ならどうにかしてくれそうな、そんな気がした。

「えっとじゃあ……。とりあえずアンタ、名前は？」

「はっ！ 申し遅れましたあ！ 私、クローデン治安維持専門騎士団の団長さんである、ヴェリア姉様の双子の妹で、シェリアって言いますう！ どうぞよろしくよろしくです〜！！」

……は？ 俺の脳内の思考が、完全に停止した瞬間だった。

シエリア。シエリア・フェアリネス。それが彼女の名前だそうだ。この巨大商業都市・クローデンを統括する治安維持専門騎士団団長である、ヴェリア・フェアリネスの双子の妹。

彼女達は人間ではない。森を好み、自然と共存しながら生きている、エルフという種族の女性だそうだ。

その証拠が、あの尖った耳。俺が不思議に思ったアレは、人間とエルフを見分ける為の一つの手段であるらしい。

「んぐつんぐつ……はむっ！ あむあむ……。なるほどお。ブリュードさんは元々、授業の一貫としてアンデロッド大樹海に行く予定だったのですかあ」

「んつ……ごくん。ああ。その森の何処かに、俺に魔法を教えてください……善の人が、いるんだ」

- - あれから。

俺達二人は、何処か落ち着いた場所で話しをしたいということで見が一致し。クローデンの大量にあるホテルの内の一つに、部屋を借りた。結構豪華な所で、値段が張るんじゃないか？ とシエリアに聞いてみた所。

「むむむ。大丈夫ですよ〜。私、お金持ちさんなので！」

と、胸を張って言われた。本当に大丈夫なのか、かなり不安ではあったが……。どうしても此処が良いそうなので、覚悟を決めることにした。

部屋に入ると、眩しい程に豪華な設備が俺達を出迎えてくれた。綺麗な黒で艶のあるソファを始め、床には高級な魔物の毛皮が、天井には様々な色の宝石で彩られたシャンデリアがあつて。清潔感溢れるトイレ、バスルームも完備されている。文句の付けようがない最高級の部屋……。だと思つたんだが。

「え……?」

何故か、ベッドが一つしかない。此処は二人部屋の筈なのに。普通より大き目のベッドに、枕が二つ置いてある。これは、つまり……。

「ブリュードさあ〜ん? お食事が届きましたよ〜。一緒に食べましょう!」

いやいやいや。そんな馬鹿な。ダブルベッドである筈がないだろう。俺は頭をぶんぶんと振って、これは見なかったことにすることにした。

とりあえずシエリアの声に呼ばれてリビングに向かうと。これまた素晴らしい料理の数々が、大理石で出来たテーブルの上に並んでい

た。

ちょうど腹も空いていたので、俺達は二人してがつつくことに。

・・・そうして今に至る。

「その途中で悪い奴隷商人さんを退治しようだなんて、ブリュードさんはやっぱり素晴らしいですねえ〜！ 良い子良い子です！」

左手でフォークを持ち、サラダをむしゃむしゃと食べながら、右手で俺の頭を撫でてくる。行儀が悪いと思うんですけど。

「でもでも、アンデロッド大樹海に一人で入るのは……ちょっと無謀だと思いますよあ？」

「何でだ？」

俺はステーキを切る腕を止め、シエリアを見詰めた。

「あそこは別名、”怨嗟の森”とも呼ばれていますねえ〜。狂暴な魔物さんがいっぱい居るのですよ。その上、巨大な木々が陽光を遮っているせいで、昼夜を問わず中は常に真っ暗闇なのです。その暗闇が多いということは……どういふ事が分かりますかあ？」

「……いや」

何となくは分かる気がするが、あえてシェリア自身の口から言ってもらいたい。

俺が首を振ったのを見ると、彼女は得意げに胸を張った。癖みたいだな、その仕草。

「ふふ〜ん。それはつまり、悪い人達が隠れるには絶好の場所だという事ですよ〜」。特に森の入り口付近ならあまり魔物さんも出ませんしねえ」

やっぱりそうか。そこなら騎士団も居ないしな。多少腕に覚えがある奴ならば、クローデンのスラム通りに住むよりも、そっちに隠れた方が安全なのかもしれない。現に……あっちの住民はついさつき、目の前の女の子に全員溺死させられた訳だし。恐ろしいぜ、本当に。

「ってことは、つまり……。生半可な力じゃ、生き残れないってことなんだな。襲い掛かってくる魔物も、人間も、わんさかいると」

「はいはい〜！ 正解ですよお。流石ですねえブリユードさん。そんな訳ですから、アンデロッド大樹海に住んでいるというそのお方は、きつと最強クラスと言える程にお強いと思いますよ〜」

まあ実際最強種族の吸血鬼なんだそうだけどな。そこは伏せておく。絶対に。

「うん……。確かに、スラム通り程度で殺され掛けた俺が、一人でそこに向かうのは無謀かもなあ……………」

つい数時間前の光景が脳裏にフラッシュバックする。あれは本当に酷い戦いだっただ。いくら油断していたとはいえ、雑魚の寄せ集めでしかない連中に、俺は殺されかけたのだ。実力不足だと言われて当然だろう。

「そんなお困りの所に参上するのがあゝゝ！！ このこの私ですよあゝゝ！！」

いきなり立ち上がってこちらに身を乗り出して来るシェリア。頼むからそんなに近寄らないでもらいたい。口の中で咀嚼されていた野菜がこつちに飛んでくる。フーか今気付いたんだが、さつきからこいつ野菜しか食ってねえ。ベジタリアンなのか？

「どういうことだよ？」

顔に引っ付いたキャベツを引っぺがしながら聞く。

「簡単な取引ですよお。私の奴隷商人退治に付き合っ頂くお礼に私がブリュードさんの人探しを手伝ってあげるのですうゝ！ これのでこれで、対等だと思いませんか？」

「いやいや。元々“俺の”奴隷商人退治を、お前が手伝ってくれるっていう話だったじゃねえか」

「むむむ。そうでしたかあ？」

「そうでしたよお」

皮肉を込めて同じ口調で返してやる。ついさっきの会話の内容も祿に覚えていないのか、こいつは。

「あゝゝ！ 真似しましたねえゝゝ！！」

「だからどうした」

「似てません」

「……うるせえ」

似てりや真似してもいいのかよ。本当に何考えてるんだかわからねえ。

「そもそも！　そもそもですよー！！　一般市民の、しかも学生さんである貴方が、奴隷商人を退治しようとしていること事態がおかしいのです！」

「別に良いだろ？　悪いことしてる訳じゃねえんだから。つーか、そういうお前は一体どういう立場の人間なんだよ。姉貴と同じ治安維持専門騎士団員なのか？」

そういえば、忘れかけていたがこれ一番重要な話だよな。もしシエリアも騎士団関係の奴なら、俺はすぐさまホテルを飛び出さねばならなくなる。ヴェリアに情報が流れる危険性もある訳だし。

「いえいえ……。私の役職は騎士団員さんとはちよ……と違いますねえ。やってることは殆ど同じなんですけどお。ん……、私はこのエーテルアリア王国の国王様に雇われている、言わば治安維持の為の用心棒さんみたいな者なんです」

「用心棒？　ずず……んつく。騎士団と、どう違うんだよ」

肉を食い終えた俺は、ティーカップに入った紅茶を啜りながら尋ねる。めっちゃめっちゃ美味いなこれ。もう一杯貰おう。

「ん……と。騎士団さんは命じられた場所に常駐して治安維持に努めるのが殆どですけどお、私にはそういう制約の類が全くないのです。自由気ままに街を放浪してえ、何か問題があれば力づくで解決する。そしてそれを国王様に報告して、報酬を頂くというお仕事なのです」

なるほどな。大体把握できた。要するに、騎士団を動かしてまで解決するようなものじゃない案件を担当するって訳だ。もしくは、事態を大きくしたくない時の為の駒、とも言えるか。騎士団のやることとしての、その一つ一つが民衆の賛同を受けたり、逆に批判を受けたりする非常に面倒なものだ。

だが、組織に属していないただの用心棒がやったことならば、民意にそれほど大きい影響を与えたりしない。故に少し汚い仕事でも任せることができる、と。よく考えてるな国王も。

「じゃあ、アレか。もしかして、スラム通りの住民の殲滅も、国王の依頼でやったのか」

「依頼ではありませんねえ。私は一々そんなものは受けませんよお。私が自分の目で判断して、自分の手で行動を起こした結果がアレです。一人の学生さんを寄ってたかって虐めて、最後には殺そうとするような人たちに、もはや情状酌量の余地はないと考えました。あ、私にも紅茶ください〜」

大皿に乗せてあった大量のサラダを全部一人で食い尽くし、ようやく満足したのか、シエリアもフォークを置いて紅茶を啜り出した。マジでそれ以外は食わないんだな。

「なるほどなあ……。じゃあ聞くが、お前は姉のヴェリアとは今、一体どういう関係にあるんだ？」

「むむむ。家庭の事情に首さんをつつ込むのは感心しませんねえ。また斬られそうになっても知りませんよお〜？」

右手で手刀を作り、首を斬るジェスチャーをしてきやがった。シャシにならねえからやめてくれ。

「まあ……言いたくねえなら別にいいけどよ」

「強いて言うならばあ、敵対関係さんですねえ〜」
「……………」

何なんだこいつ本当に。俺は思わず頭を抱えて頂垂れた。ついさっき家庭の事情に首を突っ込むなど言ったのは、何処のどいつだと思っ
つてやがるんだ……………！

「あれえ〜、どうかしましたかあ？ 頭でも痛いんですかあ〜？」
「いや……………何でもない」

もう気にしないことにした。こういう人間もいるんだな。シエル……………世界はやっぱり物凄く広いぜ。あ、人間じゃなくてエルフだったか。

「とりあえず……………敵対してるってのは、どついうことだ」

「ブリュードさん」

「何だ」

「質問されてばかりで飽きました」

「……………そうか」

俺は何も言わん。言わないし、突っ込まないぞあ。そう心に決めたんだ。代わりに、カップの紅茶を一気に飲み干す。これくらいはし
たって許されるはずだ。

「今度は私のお話さんを聞いてください〜」

敵対関係つてのがどういふことなのか……………ちよつと、いや大分気にな
りはするが……………。これ以上追求して変に思われてもマズいしな。
とりあえずそれが知れただけでも十分な収穫だろう。こいつがヴェ
リアに俺の情報を流すことは……………無いと思っつて大丈夫なはず。

「何だ、何か言いたいこともあるのか」

俺は一呼吸置いて、シエリアに話をするよう促す。

「えつとですねぇ」。私達は今、敵さんに包囲されちゃってます。部屋の外の廊下に6人、ホテル1階の入り口に4人、その反対側の裏口に3人います。多分スラム通り関係の方達ですね」

「……は？」

唐突過ぎて頭が回らない。包囲されている、だと？ そんなバカな。敵の気配なんてまるで感じないぞ。

「ブリユードさんは、魔力の気配を察知することしか出来ないんですねぇ」。それじゃあ駄目ですよ。生命の放つ気そのものを感じ取れるようにならなくては。本当の気配察知とは言えません」

「……お前には、それが出来るのか」

「出来ますよ」。だからスラム通りが危険だということも分かったんですから。それが分からない内は、まだまだ実力不足ですねえ。これからの授業でしっかりお勉強してください」

正直に言う。知らなかった。魔力以外にも、気配を感じ取ることが出来る物が存在したなんて。確かに俺は今まで、魔力を操る魔物や魔法使いの気配しか、感じる事が出来なかった。というより、魔法を仕えない人間の気配なんて、感じる必要もないと思っていたんだ。結果それが仇となって、スラム通りでの大敗を招いてしまった。最初からあれだけ多くの人間が潜んでいると分かっていたら、対処も容易だったはず。

改めて思うぜ。シエリア……やはり只者じゃねえ。今の俺なんかよりも、ずっとずっと、強い。

「丁度良い機会なので、彼らに奴隷商人さんについて尋ねてみることにしましょう。準備は宜しいですか？」

シエリアは立ち上がり、全身に魔力を漂わせていた。俺も負けちゃいけない。黒い魔力で己の肉体を強化させる。いつまでもただの人間に、やられっぱなしじゃあ悔しいからな。

「ああ！！！」

俺が力強く返事をしたのと、部屋の扉が蹴破られたのは、ほぼ同時だった。

蹴破られた木製の扉には、中央部にくつきりと人の足型の窪みが出来上がっていた。それが俺とシエリアの足元付近まで吹っ飛び、静止する。だが俺はそちらには視線を向けず、部屋の外に佇む男達をじっと凝視していた。

見える範囲でも1、2、3……4人の屈強な大柄の男が、そこに居た。シエリアが言っていた事が正しければ、見えないだけでまだあと2人いるはず。スラム通り関連の輩だろうとも聞いていた俺は、一瞬度肝を抜かれる。てっきり、あいつらと同じように痩せ細った体付きの奴らが乗り込んで来たのだと思っていたからだ。

だがしかし、こいつらはまるで正反対の頑健な体躯を有していた。鍛え抜かれた重厚な筋肉に加え、大振りの剣や斧などの武器を携えている。一目見ただけで、戦慣れしているであろうことが推測できた。油断は出来ない。

「むむむ。ホテルさんの設備を破壊するのは感心しませんねえ。ちゃんと弁償しないと駄目ですよぉ〜?」

こんな状況でもシエリアの軽い口調は変わらない。それが挑発ではなく本心から出る言葉なので、性質が悪い。

「かかれえ!!」

案の定、シエリアの言葉は先頭に立っていた男の一声によって簡単に揉み消された。それに触発されてか、後方に居た奴らも凄まじい

雄たけびを上げて室内へと侵入してくる。

「おおおおおおおおお！！！」

簡潔に言ってしまったえば、喧しいの一言に尽きる。今の時刻は深夜。こんな時間にむさ苦しい男数人で一齐に大声を上げられては、堪ったもんじゃない。そう感じていたのはシエリアも同じだったらしく、

「やれやれえ。安眠妨害はいけませんよお〜〜？」

不機嫌そうな表情を隠すことなく浮かべていた。

「おらああああ！！！」

そうこうしている内にも、巨大な斧を持った男がシエリアに襲い掛かっていった。俺の身長程もあるそれを、軽々と振り回している。凄まじい怪力の持ち主のようだった。

一撃でも当たれば簡単に肉が吹き飛ぶであろうその斬撃を、シエリアは難なく屈んでかわす。水色の綺麗な髪が優雅に宙を舞ったかと思った直後、

「え〜〜〜いつ」

声だけ聞けば、ふざけているのかとも思える程に幼稚な声を上げるシエリア。だが、本人にとっては恐らく本気なのだろう。その証拠に、男の腹部に鬩された右手の先に、青い魔方陣が出現する。それが光り輝いたかと思った瞬間、

「うぐつ！？　　があああああ！！！」

中央部から、大量の水が怒涛の勢いで噴射された。自身より一回りも二周りも大きな巨躯を有した男を、軽々と吹き飛ばしている。

「お、おわあああ！？」

「く、くるなああああ！！！」

勇んで突撃を行ったはずの男が、凄まじいスピードで押し戻されてくる様を目の当たりにし、目を白黒させている他の仲間たち。突然の出来事に意識が追いついて行けないのか、眼前に迫り来る巨体に押し潰されるようにして、一気に3人の男が廊下の壁へと叩き付けられた。

「おお〜。これは僥倖ですねえ。無駄な魔力の消耗をせずに済みましたあ」

嬉しそうにガッツポーズをするシェリア。そのまま笑顔で俺の方を向く。

「ブリュードさんブリュードさあん！ 私の魔法、見てましたかあ！？」

まるで子供が親に自分の成果を褒め称える様せがんでるかのようだ。「あ、ああ。凄かったな」

俺は苦笑を浮かべながらそう答える。確かに凄いとは思う。だが、今この状況でそれを尋ねてくるのはどうなのだろうか。

「えへへへえ。頭撫でて下さい」

「何でだよっ！！！」

徐に俺の方に頭を向けてくる。俺はほとんど条件反射と言って良い速度で突っ込みを入れていた。いきなり何を言い出すんだろう。緊張の欠片なんてあったもんじゃない。

「だってさつき私い、ブリュードさんの頭撫で撫でてあげたじゃないですかあ〜。これでお相子です！」

「いや俺頼んでないし！ つーかあれお前が勝手にやってきたんだろ？」

本当にこの人は何を考えているんだか訳が分からない。一緒に居るだけで疲れてしまいそうだ。

「むむむ。ブリュードさん」

今度は少し目を細めて俺を呼びかける。しかしその視線は、俺ではなく後方の窓付近を見ているように感じた。

「何だよ」

「屈んで下さい」

「は？」

突然の申し出に、思わず素っ頓狂な声を上げてしまふ。屈めつて、なぜ……？ 理由は全く分からない。だが、シェリアの目は本気だった。俺は素直に従うことにする。

と。次の瞬間。

「っ！？」

俺の背後の壁が、真つ二つに斬れた。頑丈なコンクリートが一直線に裂け、外の景色が垣間見えている。有り得ない。いきなり何なんだ、これ。

「危なかったですねえ。首ちょんぱ寸前でしたよお　とおくく！」

そんな異常な事態が起きても、シェリアは足を止めることはない。両足に力を込め、前方へと一気に跳躍する。斬れた壁の間を突きぬけ、外へと飛び出した。……此処、5階だよな？

「やっつ！！」

振り返った俺の目には、空中に浮いた状態で魔方陣を展開している

シエリアと、重力に引つ張られながら落下していく男の姿が映った。飛べるのかよ、アイツ……。飛べるといふより、浮かべる、と言った方が正しいかもしれない。

瞬時にシエリアの両腕から、2柱の水が男に向けて高速で噴射される。見た目だけでも、先程より遙かに威力が高いのが分かる。生身の人間がこれを受ければ、まず助からないだろう。だが

眼前に迫り来る死の水泡を、男は避けようとも、防ごうともしなかった。己が体を水が貫く間際、

「ふっ」

微かに息を吐き、腰に携えてあつた細い刀を振るつた。様に見えるた。あまりの剣筋の速さに、俺の目が追いつけない。瞬きをした次の瞬間、シエリアの水柱は、真ん中から真つ二つに斬れた状態で、凍り付いていた。

「なっ!？」

何が起こつたのか、俺には全く分からない。水が斬れたのは分かるが、その後何故凍り付いたのだろうか。新手の魔法？ いや、六大属性に氷なんて存在しない。じゃあ一体なんだ。

ただの氷塊となつてしまったシエリアの魔法は、ゆつくりと地面に落ちて行く。乾いた歩道に衝突する瞬間、それを下敷きにして、刀を振るつた男は無事に着地に成功していた。

「おお〜」。 “エビル・アーツ 魔魂の武器” ですかあ。これはこれは凄い物を使つ

てますねえ。私もちよつとだけ本気を出さないとマズいかなあ〜」
一方のシエリアは、未だに空中に浮いていた。普段はあまり見せないような思慮深い表情で、顎に手を当てている。 “エビル・アーツ 魔魂の武器” と

というのが何なのかは分からないが、奴が強敵なのは間違いなさそうだった。

「あ、ブリユードさあ〜ん」

と、不意に俺の方を向き、声を掛けてくる。

「斬れた壁にそれ以上近寄らないで下さいね。凍りますから」

「え？」

俺は綺麗に切断されている目の前のコンクリートに目を向ける。すると、いつの間にか断面が白く凍りついていた。そこから徐々に霜が下へ下へと侵攻しており、床にまで到達している。俺の足元の周辺が、今まさに凍り付こうとしていた。

「マジかよ……」

俺は驚愕に慄いていた。一体どんな技を使えばこんなことができるのか、検討も付かない。魔法じゃ、ないのか……？

「私は入り口を固めている連中を相手しますねえ〜。そちらはブリユードさんにお任せします。あと、今すぐ私から見て左に3メートル程飛んでください。胴体さんが真つ二つになっちゃいます。ではではあ〜〜！！」

「え、ちょ、おい！！」

「うおお！？」

俺の返事を聞く間もなく、シエリアの姿は下方へと消えていった。それを目で追うのも束の間、俺の頭上で刃物が空を裂く鋭い音が響く。俺はすぐさま言われた通りに横飛びした。

「余所見してんじゃねえぞガキ！！」

見ると、2メートル以上はあるであろう巨剣が、深々と床に突き刺さっていた。確かにあの直撃を受けていたら、障壁は勿論砕け、俺の体も真つ二つに切り裂かれていたであろう。背筋がゾツとする。

俺は縛れる足を酷使して何とか体勢を整える。廊下から、先程シエリアに吹き飛ばされた連中が起き上がってくるのが見えた。人数的には、6対1。この狭い部屋の中では、圧倒的に不利な状況だ。しかも、後ろに下がれば己が身が凍りついてしまう危険性がある。背水の陣ならぬ、背氷の陣とはこのことだ。俺は覚悟を決める。

「はあああああ　！」

自身の中に渦巻く魔力をコントロールし、武器として具現化させる。俺の得意な魔法剣の創造だ。黒い靄が螺旋状に俺の手に纏わり付き、当然の様に漆黒の剣が出来上がる。いい加減もう気にすることは無い。

俺はその切っ先を男達に突き付け、言う。

「お前ら、一体何者だ。何故こんなことをする？」

こんな状況でも、俺は冷静さを失うことはない。こいつらが奴隷商人に関与しているならば、何としても情報を引き出して見せる。

「へっ。それ聞いてどうすんだよガキ」

先程巨剣を振るった男が答える。凶悪な目付きを惜しみなく俺へと向け、敵意を剥き出しにしていた。

「さあな。お前ら次第だ雑魚共」

「……あ？」

明らかに空気が変わった。俺の挑発を受け、額の血管が浮かび上がっている。俺は不覚にもたじろいでしまった。たった一言で此処まで変わるとは。周りの連中も、憤怒の表情を俺に向けてくる。中々の威圧感だ。

だが、そうやって判断力を鈍らせることができれば、まさに俺の狙い通りである。こういつ時の人間は、必ず何かボ口を出すはず。

「聞き捨てならねえな……。俺達“闇ギルド”、“ビルフォン”を雑魚呼ばわりたあ……」

よく響く低音を発しながら、じりじりと俺に迫ってくる。その獲物を見据える目は、真つ赤に血走っていた。闇ギルド？ ビルフォン？ 何のことだか分からない。ギルドはともかく、後者の方は固有名詞か何かだろうか。とりあえず、こいつらが何かの団体に属しているのは確かだろう。

「テメエのそのおかしな黒い魔力を見てピンと来たぜ。ウチの下っ端共を、高値で雇った爆弾野郎共々ぶつ殺してくれたそうじゃねえか」

高値で雇った爆弾野郎……？ もしかして、あの完全魔法同位体のおっさんのことか？ 奴は用心棒と自称していたし、雇ったというのなら辻褄は合う。それに爆弾野郎などと呼称される程に、爆発をバンバン発動出来る輩なんて、アイツ以外にはいないだろうと思う。

「やはりブラックリストに載ってた黒い魔力のガキと、スラム殺しの女は、テメエら二人で間違いなさそうだなあ！！」

叫びながら、巨大な剣を容赦なく振るう。これだけの得物だということに、凄まじい速度だ。掠っただけでも簡単に肉が吹き飛ぶであろうそれを、俺は魔力剣で受け止める。

「ぐっ！！」

衝撃で電撃が走ったかのように腕が痺れる。俺は手から剣が零れ落ちそうになるのを必死で堪えた。押し切られたら、確実に死ぬ。

「テメエら、全員でかかれえ！！ ガキだと思って油断すんじゃないえ！！」

男の呼びかけに応じ、背後に待機していた男共も一斉に武器を振りかざして突進してくる。まずい。このままでは鬺り殺しにされる。俺は重心を軽く後ろに移した後、罅迫り合いを外して前へと転がった。

「ぬお！？」

男の股の間を転がり抜ける。これだけの巨体ならば、隙も大きい。突然支えを失った巨剣の男は、無様にも前につんのめる。ざまあみやがれ。俺は躊躇うことなく、魔力剣を振るって背中を縦に切り裂いた。

「ぐつ！ ああああああ！！」

重厚な肉にあっさり突き刺さり、極太の骨を容易く断ち切る感触が、俺の手に伝わってくる。人を斬った感触だ。魔物共とは、また違う。真紅の鮮血が噴出し、俺の顔を汚した。鉄の臭いと味が広がる。

「オルバス！！」

斧を構えていた男が、青ざめた表情で叫ぶ。オルバスという名前なのか、こいつ。そんなことを考えられるくらい、俺の頭は冷静そのものだった。俺は生物を殺すとき、興奮なんてしない。寧ろ逆に頭が冷えるくらいだ。幼少期からずっと続けてきたその行為を、今日も今日とて続けるのみ。

躊躇いも情けもない。そんなものは、必要ない。

俺は黒く輝く魔力剣を振るい、こびりついていた血を飛ばす。腰を屈め、低い姿勢のまま走り出す。これが、巨体を持った相手に一番有効な戦い方だ。誰に教わった訳でもなく、俺が見出した戦闘法。

「くっ！ こいつっ！！」

先程とは打って変わって、恐怖に慄いている男たち。顔を見なくても雰囲気で分かる。そんな状態で振るわれた武器が、俺に届くはずも無く。

「うわあああああつっ！」

不恰な鉄棒を無闇に振るっていた男を、正面から切り裂く。その斬撃は頸動脈にまで到達し、部屋中を真っ赤に染め上げた。噴水のように血を飛ばしながら、無様に倒れる男。これだ。これなんだよ。久しく忘れていたかのような快感が、俺の全身を突き抜ける。人を殺した、感触。自身に降りかかる血の温度。それら全てが俺を高ぶらせる。頭は冷静なんだ。だが体が勝手に動く。俺の意思に反するかのように。もっともつとつと、殺しを求めて狂乱する。

「こ、こいつやべえ！！」

「逃げろおおおおお！！」

魔法を使つて殺したときは訳が違うんだ。この手で握り締めた武器で殺してこそ、価値がある。俺が殺したと自覚できる。こんな感覚は久しぶりだ。いつ振りだろうか。まずい、まずいまずいまずい。このままじゃ、俺。

いつの間にか、泉の様に湧き出していた黒い魔力。それが俺の視覚、嗅覚、触覚、味覚、聴覚を覆い尽す。何も、感じる事が出来なくなる。だが、妙に心地良い。まるで何かが、優しく俺を包み込んでい

るかのような。温かく、安心できる。俺はまどろみに落ちるかのよう
うに、ゆったりと、意識を失った……。

『 教官!! ブリユードを止めてくれええ!! また魔物の群
れに突っ込んで、我を忘れてやがる!! 』
『 何!? くそっ、私とした事が……! 下がっていなさい、
シエル!! 殺されるぞ!! 』

遠い昔の、遠い声が、俺の脳裏に微かに浮かんだ気がした。

気が付いた時。俺とシエリアが食事をしていた部屋は。

ズタズタに切り裂かれた肉と、骨と、血で、埋まっていた。
。

見渡す限りの血、血、血。俺は一瞬、我が目を疑った。何故こんなことになってているのか、自分ではあまり覚えていない。確かに男たちと殺り合った記憶はある。漆黒の魔法剣を振るい、肉を切り裂いたあの感触。忘れる訳が無い。

だが、二人目を屠った辺りから、記憶に靄が掛かったかのように思いつくことが出来なくなる。

「また、これか……」

こういうことは、今までも何度かあった。戦いの最中、突然意識が途切れる現象。その後目覚めた時は、俺の周囲は必ず骸で埋め尽くされていた。あまり気分は良くない。

だが、今はそうも言っていられなかった。俺は気だるさを押し殺し、ゆっくりと立ち上がる。着ていた服に目を向けると、真紅の血がべったりと塗られていた。もう着る事は出来ないだろう。新しいのを購入しなくてはならない。

それはともかくとして。今すぐしなければならぬこと。それはシエリアの援護に向かうことだろう。あの妙な刀を使う男とやり合っているのだとしたら、尚更。こうしている間にも、下方からは魔法と刃が交錯する激しい戦闘音が、俺の耳に響いていた。

あれからどれくらいの間が経ったのかは分からない。だが、俺の元にシエリアが戻って来てはいない。その事実だけで充分だった。

俺は若干の焦りを押さえ込み、駆け足で血塗れの部屋を飛び出す。

廊下に出て右に曲がると、すぐに階段があった。人の気配はない。妙な静けさだ。3段飛ばしで一気に駆け下り、1階のロビーへと到着する。受付にも誰もいなかった。もしかしたら、既に避難をした後なのかもしれない。

俺は足を止めることなく、開け放たれた入り口から外へと飛び出した。

まず最初に目に映ったのは、ずぶ濡れた状態で横たわっている3人の男の姿。恐らくシエリアの魔法を受けたのだろうと考えられる。生死まではわからないが、少なくとも意識は無さそうだった。そいつらの体を飛び越えようとした、その時

「うあうう!!」

何処からとも無く、シエリアの声が聞こえてくる。上の方からだろうか。そう思い、上空を見上げようとした瞬間。

「うお!?!」

俺の目の前に、シエリアが高速で落下してきた。凄まじい衝撃で、地面に巨大な穴が穿たれる。普通の人間だったら明らかに即死するレベルだ。巻き上がる粉塵を払いのけ、俺は彼女に駆け寄っていく。

「お、おい! 大丈夫か!?!」

「あうう……ブリードさん、無事でしたかあ。いやあ困った困ったです。彼の氷に対して私の水では、相性最悪でどうにもなりません……」

言いながら、服にこびり付いた砂埃を払いつつ立ち上がる。一見したところ、致命傷になる様な酷い傷は負わされていないようだ。だが、全身の所々に刃物で斬られたような傷が凍り付いている箇所が

ある。あの男の妙な刀の仕業だろうと、すぐに理解する。俺はよるけるシエリアに肩を貸してやった。

「お前でも勝てないくらいに強いのか、アイツ」

「いえ、と首を横に振られた。違うのだろうか。」

「あの方が強いのではないですう。あの“エビル・アーツ魔魂の武器”が強いのですよ〜」

「さっきも言ってたが、そのエビルなんちゃらってのは一体……うお!?!」

聞きなれない単語を問い質そうとした瞬間。上方から白い斬撃がまるで矢の様に降り注いできた。一つ一つが強力な破壊力を持ち、次々と地面を抉っていく。

「むむ。お話している暇はありませんねえ」

シエリアは言いながら頭上に魔法障壁を発生させる。俺もそれに習って、障壁を5重に展開した。黒色の魔方陣が5つ浮かび上がり、雨の様に降り注ぐ攻撃を弾き飛ばしていく。砕かれることは無さそうだが、気を抜くことは一切出来ない。

そんな俺達の様子を見ながら、刀を持った男は空中から地面へと着地していた。どんな容姿をしているのかは、真っ暗闇でよく見えな。だが、服装は軽鎧を全身に纏っているようだった。

そいつが刀を構えて、こちらに突っ込んでくる。斬撃の雨はまだ降り注いでいるため、障壁を外すことは出来ない。このままでは生身で横撃を受けてしまう。

「ブリユードさん」

シエリアが苦痛に顔を歪めながら、俺に声を掛けてくる。体を侵食しつつある霜で、徐々に体力が奪われているようであった。戦闘をこれ以上長引かせるのは危険だろう。

「なんだ」

「貴方の使える魔法さんの中に、炎を発生させられるものはありませんかあ〜〜？」

「炎？」

こんな時にいきなり何だというんだ。俺は思わず聞き返してしまう。

「はい〜」。彼の持つ刀に宿っているのは、氷の精霊の魔力そのものです。それに対抗出来る唯一の弱点は、炎しかありません。ですが私の属性は水なので、炎なんてとてもとても出せないのですよ〜」

言いながら、走ってくる男に向けて左手を翳すシエリア。その指先から複数の水色の魔方陣が浮かび上がった。それらが光り輝いた直後、中央部から必殺の水柱が次々と噴射されて行く。当然のごとく切り裂かれ、ただの氷塊と化していくだろうが、少しの時間は稼げるはずだ。

「炎、か……俺は無属性の魔法しか使えないからな……」

言いながら、思索する。未だに俺の属性が何に属する物なのか、よく分からない。吸い込まれるような黒色の魔力。未知なる第7の属性の可能性も捨てきれない、俺の魔力。そもそも、それについての教えを請う為に、俺はこの旅に出たんだ。道中でこんな厄介ごとに絡まれるだなんて、思いもしなかったが。

考えれば、あの平原でアイナに出会ったのが、全ての始まりだった。

そこで俺は、はっとする。あの完全魔法同位体のおっさんと戦った時。反則的なまでの速度で、奴は爆発を連発してきた。それらを全力の魔法障壁で防ぎきり、最後は互いの魔法剣による一騎打ちとなった。あの時俺の魔力は、確かに奴の炎の魔力を、“吸収していた

”。

確証はない。今此処で試して、成功する保障もない。だが、打開策があるとするならば、もはやこれに賭ける以外にないだろう。傍らのシエリアを見る。今も必死に魔法を発動させて奴の足止めを徹していた。傷口から広まった霜は、既に体の半分以上を侵食し尽している。一刻の猶予もない。シエリアを助けられるのは俺しか居ない。

出会ってからまだ数時間しか経っていないにも関わらず、俺はこの子に何度も命を救われた。いい加減に恩返しをしなければ、男の恥というものである。俺は意を決して、拳を強く握り締めた。そして

「一か八か、やるしかねえか……！」

頭上の障壁は維持したまま、俺は魔力を練り上げる。急激な消費によつて肉体が悲鳴を上げるが、今はそんなことを気にして入られない。どうせ休めばすぐに治る。出し惜しみなんてしない。

俺の右手に黒い靄が螺旋状に絡み付き、やがて漆黒の剣となって具現化する。魔法剣の創造だ。

「ブリユードさん……？ なにを」

シエリアが珍しく不安げな表情で俺を見詰めてくる。確かに事情を知らない彼女にとつて、この行為は意味不明なものである。実際、俺自身にとつても大博打なのだから。

「まあ、ちよつとな……。出来るかどうかかわかねえけど……。いつてくらあ……！」

叫びながら、俺は全力を尽くすために魔法障壁を消滅させた。途端に俺の体目掛けて氷の刃が降り注ぐ。俺は両足に魔力を集約させて、一気に爆発させた。前方への推進力を得て、水柱を斬り続ける男の元へと瞬時に跳ぶ。

「ブリユードさぁん!？」

後方から驚いたようなシェリアの声が届く。魔法が俺に当たらないように、攻撃を中断させてくれた。これで味方に殺される心配は無くなったが、その分奴の体も自由になる。男は俺の存在を視界に捉えると、刀を軽く振るった。

「ちい！」

空気中の水分が凍り付き、高速で俺目掛けて飛翔してくる。奴の反応速度は異常だ。足元で爆発を引き起こしてから、まだ2秒も経過してはいないだろうに。速攻を仕掛けて一気に屠ろうと考えていた俺の策は、瞬く間に打ち砕かれてしまう。だが、この程度では諦めない。

「おおおおおおお!!！」

俺は剣を体の前で高速回転させる。指が吊りそうだ。此処まで酷使したことは無い。甲高い金属音を上げ、氷の粒を弾き飛ばしていく。少しでも気を抜けば、俺の体は蜂の巣になるに違いない。

その様子を認めた男は、更に次の攻撃のモーションへと移行していた。刀を高速で十字に振るうと、空中に巨大な十字架の斬撃が出来る。近付いただけでも身が凍ってしまいそうな程の冷気を発するそれは、直撃を食らったら即死するレベルだろう。

「やべえな……」

俺の心臓の鼓動が急激に高鳴る。体が反射的にヤバイと感じているみたいだ。今から障壁を張る余裕は無い。避けようとするならば、襲い掛かる氷の粒が体中に突き刺さる。八方塞とはこのことだ。魔法剣一本じゃどうにもならない。俺の考える奥の手は、奴の体に届かなければ意味が無い。

「くっ……！」

容赦なく、十字の斬撃が高速で突き進んでくる。万事休すか……

「ブリュードさぁん！ 私を信じて思い切りジャンプして下さい！」

その時。後方のシエリアから声が掛かった。思い切りジャンプしろ、だと……？ それで一体どうなるというんだ。それだけではあの巨大な斬撃を避けることはできないはず。だが、考えている時間は俺には残されていない。今まで彼女に従って間違ったことは一度も無いんだ。だったら、言うとおりに彼女を信じて……

「ああ、分かった！！」

跳ぶしかない！ 俺は再び足元に魔力を集め、思い切りジャンプする。あまりにも不恰好だ。空中では何も出来ない。俺を狙っていた氷の粒どもは、一瞬目的物を失って動きを鈍らせるが、すぐさま俺を追って進路を上方へと移す。前方からは変わらぬ速度で迫り来る十字の刃。そこへ

「無限に広がる水の流れよ 此処に集いてみなを守り給え
ウォーター・ウォール”！！”

シエリアの魔法が発動する。俺の四方を囲うように、巨大な水の壁が出来上がった。魔方陣とは違い、物質的にも分厚い壁となって俺

を守護してくれている。だが、所詮水は水ではないのだろうか。迫り来る炎を防ぐには最適の魔法だろう。だが、今此処で使って何の意味が……。

その答えは、すぐさま出た。氷の粒と十字の刃が、同時にウォータ・ウォールへと直撃した瞬間。

「っ!？」

四方の壁が、一瞬にして凍り付いた。奴の刀の冷気があまりにも強くて、水を貫く前に凍りつかせてしまったのだ。一変して非常に強固となったウォータ・ウォールは、降り注ぐ攻撃を完全に防ぎ切っている。地面を抉る程の威力を持った刃も、十字の斬撃も、自身を作り出した超低温の防護壁を前に全く歯が立たない。これなら、行ける……!

「おらああああ!!」

俺は剣を壁へと突き刺した。当然突き抜けはしないが、少しだけでも刺されば充分だ。それを支えにして、再び足元の魔力を爆発させる。上方への推進力を得た体は、氷の壁をギリギリの高さで突破した。俺はその縁に脚を掛け、奴の元へ向かって一気に飛び降りる。

「食らいやがれえええええ!!」

自身の連続攻撃を悉く防御され、奴は目を白黒させていた。だが、上方から飛び掛ってくる俺に鋭い眼光を向けると、刀を前身に構えなおす。迎え撃つ気らしい。よく見ると、奴の体は青みがかつた白い魔法障壁によって守られていた。例の氷の精霊とやらの魔力だろう。あれを貫かない限り、奴の体に俺の刃は届かない。

「くっ……!!」

静寂に包まれた、夜のクローデン。その街の一角に、俺はゆっくりと着地した。暗闇の中、ただ俺の耳に聞こえて来る音は。

“魔法障壁が砕け散った音”と、“肉体を燃やし尽くす、業火の音”だった……。

燃えていた。あの日の夜と、同じように。

「ア、アアアアア！」

切り裂いたモノ全てを凍らせる刀を持った男。名前も知らないそいつは、俺とシエリアの目の前で、全身が焼け焦がれて行く苦痛にもがき苦しんでいた。既に喉も焼け落ち、言葉にならない叫びしか上げられないようだった。

同情なんてしない。一步間違えば、こうなっていたのは俺だったのかも知れないのだから。命を懸けた戦闘において、どちらが生き残るかなんて本当に紙一重の差でしかない。実力、運、地形、状況、仲間、相性 全ての要素が複雑に絡み合う中、それでも己が力を最後まで発揮し続けた者が、勝者と成り得る。

俺は無言のまま、自分の右手を見詰めた。漆黒の魔法剣を握り締めていた、右手。襲い掛かってきた刺客共を屠った、右手。正体不明の刀を使う男を業火で包み込んだ、右手。俺はこの右手で、数え切れない程に多くの命を、奪い去ってきた。今更一人の命がどうなるうと、もはや何も感じない。

「ブリュードさん……」

自らの魔法で治療を終えたシエリアが、俺の傍らに寄り添ってきた。先程まで彼女の体を蝕んでいた霜は、今となっては跡形もなく消えている。無数の切り傷と共に。いつ見ても、彼女の魔法は凄い。あれ程の重傷を完璧に治癒してしまうのだから。だが、体は健康体に

戻ったはずなのだが、どこかシエリアは疲れたような表情をしていた。

「えへへ……魔力使いすぎちゃいました。もう空っぽ空っぽですう……」

いつものおどけた口調にも、まるで生気が感じられない。魔力が空になってしまったというのは、本当みたいだ。それはそうだろう。あれだけの戦闘を繰り返したのだから、当然だ。俺はぐったりとしているシエリアを、抱きかかえる様にして支えてやる。女の子特有の良い香りが鼻腔をくすぐったのは内緒だ。

「無理するな。敵が来たら俺が対応する。ゆっくり休め」

俺の方と言うと。シエリアには及ばないが、それでもやはりかなりの量の魔力を戦いで消費した筈。にも関わらず、体内の渦巻く魔力が減った気がまるでしない。自分でも不思議なくらいだった。

「あはは……ありがとうございます。それにしても、ビックリしましたよお。最後のアレ……一体どうやったんですかあ？」

アレというのは、恐らく炎の剣のことだろう。奴の氷の障壁を粉碎し、肉体を炎上させた、あの攻撃。どうやったのかと問われても、俺にもよく分からないのが現状である。ただ俺は必死に　あの時の戦いの感覚を、呼び覚ましていただけだ。

「えーっと……」

上手く言葉に出来ず、口籠ってしまふ。そんな俺の様子を見たシエリアは、怪訝な表情をすることもなく、ただ微笑みを向けてくれた。「えへへえ……無粋な質問でしたねえ。ブリードさんにも秘密にしておきたい奥の手くらいあつて当然ですう。ちよつとした好奇心でお聞きただけなので、気にしないでください」

「あ、ああ。悪いな……」

少しだけ心が痛んだ。別にシエリアを信用していないから話したく

ない、という訳では決してないんだ。そこだけは勘違いしないで欲しいと思う。恥ずかしいから言葉に出すことは出来ないが。

「あ……………」

…………と。シエリアは、何かを見つけたかのような声を出し、とことこと走って行った。そこで地面に落ちていたある物を拾い上げる。その感触を確かめるように一振りした後、また俺の元へと戻ってきた。

「はい、どうぞ。彼を倒したのはブリユードさんですから、この刀はブリユードさんが所持しておくべきだと思います……………」
そう言って、俺にあの男が使っていた刀を差し出してくる。青と白を基調とした、粉雪の様な模様が描かれている鞘に納まっている。滑らかな曲線が実に美しい。大きさは1.5メートルくらいはあるだろうか。女の子が扱うには難しそうな一品だ。

俺は刀を間近で見せられ、一瞬戸惑ってしまった。何故なら、

「これ…………普通じゃないんだろ？俺なんかが持っても、大丈夫なのか？」

文字通り、これが得体の知れない物だからだ。使った瞬間体に乗っ取られたりしないのか、心配で仕方ない。

「そんなに怖がらなくても大丈夫ですよ。これは“エビル・アーツ魔魂の武器”

と言っても、氷の精霊の魔力が込められている物ですから。闇の精霊や、まして凶悪な魔物の魔力でもない限り、使用者に危険は及ばないはずですよ……………」

「さつきから聞きたかったんだが、そもそもお前の言う“エビル・アーツ魔魂の武器”って一体何なんだよ」

少し不機嫌そうに問う俺に、シエリアはちよろつと舌を出して愛想笑した。

「えへへえ〜……すみません、そちらの説明が先でしたね。“エ魔^{ビル・アーツ}の武具”というのはその名の通り、特殊な魔力が込められた、特殊な武具のことを言うのです。通常の武具よりも遥かに高い性能を持ち、様々な能力が付加されている物が殆どです。この刀の場合は、斬った相手を凍り付かせるという能力に加えて、装備者の身体能力を飛躍的に上昇させる効果もあるみたいですねえ〜。彼と戦っていて、そう感じることはありませんでしたか？」

「あつた。滅茶苦茶あつた」

剣筋が速過ぎて目で追えなかつたり、俺の高速移動にも余裕で対処してきたり。てつきり奴そのものの動体視力が半端ないだけかと思っていたが、刀のお陰だったのか。妙に納得してしまう。

「おお〜、流石はブリュードさんです。この様に、“エ魔^{ビル・アーツ}の武具”は何の力も持たない一般人が装備したとしても、絶大な力を与えてしまうのが怖いところです。使い方を一歩間違えれば、大惨事になることだって充分考えられます。どうしてこんな武具があるのか、世界に一体どれくらいの数が存在するのか、誰が創ったのか、どうやって創ったのか、全てが謎に包まれているのが現状ですね〜。ただ、ある研究施設の出した結論で、多くても二桁に届くか届かないか程度の数しかないだろう、というのが一般的な定説なそうです。ちなみに私が見たのはこれで二つ目ですね」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。今頭の中を整理する」

一度に色々なことを言われたせいで、少し頭がこんがらがってしまった。要するに、変な魔力が込められた変な武具が、世界中に散ら

ばってるってことでいいんだよな。多分。何でそんな危ないもんが存在しているのかはわかっていない、と。ふむふむ……世界つてのは本当に広いんだなあ。帰ったらシエルに教えてやるう。

そこまで来て。ふとした疑問が浮かび上がる。

「何でそんな珍しい物を、こいつが持っていたんだ？」

俺は燃え盛る炎に身を包まれている男に目を向ける。既に意識を失ったか、あるいは死んだのか、ぴくりとも動かない肉塊となって倒れていた。

「一番の問題は、そこなのです」。私が見たところ、襲い掛かってきた彼らは皆体の何処かに、同じマークの刺青を入れていました。恐らくギルドのものだと考えて間違いないでしょう。それはつまり、“^{エセル・アーツ}魔魂の武器”を所有できる程の実力を持ったギルドである、ということですよ。偶然手に入れられたのか、あるいは他者から強奪したのかは定かではありません。ですが、それを装備していたのはマスターでも何でもなかったあのメンバー。そこから導き出される結論は、一つ」

シエリアは大きく息を吸い込み、俺の瞳をじっと見詰めた。

「今回の奴隷商人グループは、“想像以上に厄介な存在だ”、という事です」

まるで俺に言い聞かせるように、ゆっくりと、そう言い放った。薄々感づいてはいた。もしかしたら、俺はとんでもない事件に首を突っ込んでいるのではないかと、と。あの平原でおっさんとやりあった時から、そうではないかと考えていたんだ。恐らくスラム通りの連中も、さっきの連中も、全員が裏で暗躍するギルドとやらの存在に一枚噛んでいたのだらうと思う。だとしたら、強大な組織と見て間

違いはない。だが

「上等じゃねえか、そりゃ。俺がまとめて相手してやらあ」

俺はこんな所で立ち止まっては行られない。無実の罪に問われたアイナを救い出す為にも。アイナに無実の罪を被せた、そいつらをぶつ殺す為にも。規模が大きいなら、それを潰せば悪党共を一網打尽にできるということだ。この世の悪に理不尽を感じていた俺にとって、それはまさに絶好の機会。臆する必要などない。堂々と立ち向かい、完膚なきまでに叩きのめしてやる。そうしてアイナを取り戻せば、何もかも万事解決だ。

俺の言葉を聞いたシエリアは、一瞬目を丸くした。まるで想像していなかった返答が来たことに、驚きを隠せない様子だ。だが、すぐさま表情を緩めて、また微笑を向けてくれる。

「流石はプリユードさんですねえ〜。まさかそう言うとは思っていませんでした。ちよっと格好良いつて思っちゃったのは内緒です
う〜〜」

心なしか頬が赤く染まっているように見えるのは気のせいだろうか。恥ずかしそうにちよっと視線を逸らし、目が泳いでるのが可愛い。胸に手を当て大きく深呼吸をし、再び俺の目を見詰める。

「プリユードさん！ 私と一緒にこの事件、解決しましょうー！！」

返事は言うまでもない。俺は改めて差し出された“エビル・アーツ魔魂の武器”を、

右手でしっかりと握り締めるのだった。

朦朧とした意識の中、再び目を覚ます。途端に全身が裂けるかのような激痛が、脳を支配した。苦痛に顔を歪め、目覚めてしまったことを後悔する。あれからどれ程の時間が経ったのかも分からない。それでも私は、じつとこの地獄に耐え続けている。いつか終わると信じて。

鎖で繋がれた両足を動かさず、寝返りを打とうとすると。金属が地面を這う、不快な音が響き渡った。これを聞く度に、自分は拘束されているのだと思い知らされる。

痛い。冷たい。寒い。苦しい。寂しい。この感情の羅列の中に、

最後の言葉 “死にたい” が加わる前に。私の精神が、崩壊する前に。せめて、クルトゲイス様のお墓参りだけはしたかった。この訳の分からない世界に突然迷い込んだ私を救ってくれた、優しいご主人様。あの方が居てくれたから、私は今日まで生きてこれた。ずっとずっと、一生を掛けてでも恩返しをしたいと考えていた。それなのに。

自然と瞳が潤んでくる。もう数えるのがバカらしくなるほどに涙を流したというのに、止まる気配がない。また空しく頬を伝って、冷たい石畳へと落ちて行く。その行方を眺めることしか、今の私にはできなかつた。

と。看守室の方から、何やら声が聞こえてくる。誰かが会話をしているようだ。静寂に包まれた牢獄に、その声はやたら大きく響き渡っていた。

「目撃者の情報によると、中心街2丁目のグラクニスホテルにおいて、乱闘騒ぎがあったとか。複数の武器を持った男がホテル内外を取り囲み、その内の数人が白髪の少年と水色の髪の女性が宿泊していた部屋に入っていたそうです。被害状況は不明。他の宿泊者や従業員は、速やかに避難をして無事。ですが、襲われた2名の安否は分かっていません。彼らに関してですが、その……」

そこで何やら言いにくそうに口ごもってしまった男性。一体どうしたのだろうか。

「何よ。早く言いなさい」

話を黙って聞いていたもう一人が、不機嫌そうに続きを促す。その凜とした声は、間違いなくヴェリアさんの声だった。何やら事件があつて、その報告を受けているのだと推測する。

「はっ！ 襲われた2名の内、少年の方は、アイナ・セブンスフォースと行動を共にしていた、ブリュード・エクスマギナで間違いないのことです。そして女性の方の容姿が、その…… “ヴェリア騎士団長と瓜二つだった”、という妙な情報が何件も届いています……。一体どういふことなのでしょう……？」

その瞬間、私の心臓が飛び跳ねるかのような衝撃を受けた。ブリュード様が、襲われた……？ あの人は今確かにそう言った。私の脳裏に、嫌でも悪い予感が浮かび上がってくる。もしご主人様と同じように、ブリュード様まで殺されてしまったとしたら。私はもう、何に縋って生きていけばいいのか分からなくなってしまう。口と喉がカラカラに渴く。心臓がうるさいくらいに鳴り響く。どうして、そんな。

「へえ……そう。ふふふ。そうなんだあ〜。あのガキとシェリアがねえ……。面白くなってきたじゃない」

「あの、騎士団長……？」

報告を聞いたヴェリアさんは、何やら不敵に笑っていた。あの人はいつもそうだ。何を考えているのか分からない。ただ一つ言えるとしたら、人間を傷つけることに生きがいを感じている人格破綻者。それだけ。その彼女が、私にとって最悪の言葉を発する。

「いいわ。今回は“私が”直々に出てあげる。関係者を絶対に一人も逃がさないよう、現場を包囲しておきなさい」

私は、目の前が真っ白になった。

「これからどうするんだよ。裏口を固めてた連中は、既に逃げま
つてたし……。奴らの手掛かりをまた一から探すにしたって、もう
俺に心当たりはないぜ？」

俺はシエリアから受け取った“エヒル・アーツ魔魂の武具”を腰に差しながら言う。
その長大な刀身に見合わず、重さは不思議なくらいに軽かった。

「へへへ〜。手掛かりなら、もう既に掴んでありますよお〜？」
「マジかよ」

やけに嬉しそうに言うシエリア。その笑顔が眩しいぜ。聞いてやる
うじゃないか、この短時間で何を掴んだのか。

「マジですう〜。ブリユードさんブリユードさん、あれが何だか分
かりますか？」

「アレ？」

俺はシエリアが指差す方に目を向ける。見ると、地面に黒く濁った
塊の様な物がへばり付いていた。誰かが踏んだのか、形はまるで靴
底の模様みたいに不自然に歪んでいる。一体何だこれは。泥……か
？ もっと注意してよく見てみると、表面に何やら黄色い幕の様な
物が張られているようにも見えた。ぶつちやけ気味が悪い。という
か今まで気付かなかったが、同じような靴底の形をしたそれが、周
囲の地面にはいくつもあった。

「……何だコレ」

怪訝な表情で問う。全く予想が出来ない。これが手掛かりだとも
言うのだろうか。

「ふふ〜ん。分かりませんよねえ〜。ではでは、小石さんをアレに
向かって投げてみて下さい」

そう言っつて、俺に地面に落ちていた手ごろなサイズの小石を手渡し
てくる。何がしたいのかよく分からないが、とりあえず言う通りに

しておけばいいだろう。

俺はゆっくりとした下投げのモーションで、泥に向かって石を投げた。綺麗な放物線を描き、見事に命中……した瞬間。

「うお!？」

突然、泥が眩しい程に黄色く輝きだした。驚き目を丸くしていると、それに一歩遅れて電気が空を裂く特有の音が響き渡る。まるで電流が発生しているかのようだ。これは一体……？

「にひひい。いつ見ても面白いですよ〜これ」

隣でシエリアは楽しそうにその光景を眺めている。やがて光が収まると。俺が放り投げた石ころは、黒焦げた状態で地面に転がり落ちていた。恐ろしいなあい。

「何だよ、ありゃあ。新型の地雷か何かか？」

「地雷ですかあ〜。流星はブリュードさん、良い線いってますよお」
言いつつ、シエリアは魔法を発動させて少量の水を泥に向かって噴出する。勢いに押されたそれは、水と交じり合って地面に溶け込んでいった。危険だから始末をしたのだろうと理解する。

「あれは“雷泥”^{らいでい}と呼ばれる、雷の魔力を帯びた泥なのです。触れると先程のように稲妻が発生し、相手をビリビリ痺れさせてしまうという、それはそれは恐ろしい代物ですなえ〜」

「……まさに“地雷”じゃねえか」

寧ろ軍が開発した踏むと爆発するという地雷より、更に性質が悪い気がする。触れただけで感電死するとか、どんな反則技だよそりゃあ。戦闘中に誤って踏まずに済んでよかったぜおい。

「そうですねえ〜。科学の力で開発された地雷さんの方は、名前

を“地爆”にでも改名すべきなのかもしれない」
「まあ地雷っていうんならこっちのが妥当だわな」

俺もシエリアに習い、周囲に見えていた他の雷泥に向かって魔力砲を飛ばす。地面ごと抉れてかなり大雑把な掃除の仕方だが……電撃くらうよりはマシだろう。

「つーか、何でそんな危ないモンがこんな所にあるんだよ」
「よくぞ聞いてくれましたなあ！！そこが一番重要なポイントなのですう！！」

人差し指をピシッと立て、俺に詰め寄ってくる。近い近い近い。顔に息が掛かるだろうが。この子供みたいな動作は、いい加減どうにかしてもらいたい。

「この雷泥さんはですねえ、世界中何処を探しても！此処からすぐの場所にある、アンデロッド大樹海の極々限られた範囲にしか存在しない物なんですよあゝ。具体的には樹海の中央部に位置する、クロースド・エリア“禁断の領域”へと続く道全てが、この雷泥によって埋め尽くされているのだそうです！！」

「何だそりゃ。道全部この雷泥ってお前……歩いただけで即死の電流地獄じゃねえか」

想像しただけでもゾツとする。どんな場所だよそりゃあ。アンデロッド大樹海ってそんなに危険な場所なのか？一気に行きたく無くなつて来たんだが。

「だからこそこの“クロースド・エリア禁断の領域”なんですう！その雷泥に囲まれた先の空間に一体何があるのかは、誰も知らないのですよ。ある研究家によると、誰かが侵入者を妨げる為に、故意に雷泥を作り出したという説もあります。詳細は謎に包まれていますねえ……」

「んな馬鹿な……。つーか、その雷泥と奴らが一体どういう関係に

あるって……」

そこまで言い掛けて、俺ははっとする。世界中何処を探しても、そこにしか存在しないという雷泥。それがあの刺客どもの靴底に付着していたのだとしたら、それは……。

「気付きましたか……？ 彼らの本拠地は、アンデロッド大樹海中心部周辺にある可能性が非常に高いです。あそこなら凶暴な魔物たちも雷泥を恐れて近寄りませんし。しかもしかも、少量程度の雷泥ならば、ゴム100%で作られた靴を履けば感電することはないのです。きつと私達に気付かれないように靴を二足用意してクロードンまで来た後、雷泥の付着している方の靴に履き替えてホテル近辺を歩き回ったのでしょ……。空中を飛ぶことが出来る私が外の連中を最初に相手にしたのは、不幸中の幸いでしたねえ。水を乱噴射させたお陰で、最初の時点で仕掛けられた雷泥は殆ど流れたみたいですよ……。ブリュードさんがビリビリしないで本当に安心しました」

俺は肝を冷やした。まさか奴らがそこまで用意周到に俺達を殺そうと画策していたなんて。“^{エヒル・アーツ}魔魂の武器”を持った男が最初に壁を切り裂いたのは、俺達を外へと誘き寄せようとしていたのだろうと思う。部屋の中にまで雷泥を付着させたのでは、もしも乱闘になったときに誤って自分達が感電する恐れがある。故に室内ではなく外のみ仕掛けを仕組んだのだろう。もしあの時俺がすぐさまシエリアを追って外に出ていたらと思うと……ぞつとする。

「なんて言うか……いつもありがとつな、本当」

「むむむ？ いきなりどうしたんですかあ……？」

シエリアが首を傾げ、上目で俺を見詰めてくる。俺はいつもいつもこの人に助けってもらってばかりだ。きつと他にも、俺が知らぬ間に

色々なことをしてくれているに違いない。そんな彼女に、どうしても礼を言わなければならぬという衝動に駆られた。

「私にお礼なんて言う必要はないですよ。この悪党退治は、私が好きでやっていることなのですからあ。そもそも、それを言うなら私の方です。ブリユードさんが居なかつたら、きっとその“魔魂^{モヒ}の武器”に切り裂かれて、私はあの時点で死んでいたと思います」

「いや、そんなことは」

「ありますよ」

俺の発言を遮り、シエリアは力強く言い放った。その綺麗な瞳に見詰められると、何も言うことが出来なくなる。一步後ずさった俺の姿を見て、またにこっと微笑んでくれた。

「まあまあ。良いじゃないですか、そんなことは。仲間同士助け合うのは当然なのです。それよりも何よりも！折角彼らの潜伏場所の目星が遂についたのです！ぐずぐずしないで、ちゃちゃっと現場に向かいましょう！」

「あ、おい！」

強引に俺の手を引き走り出すシエリア。俺は半ば引き摺られる様にして着いて行く。先程の戦闘で消耗が激しいのだから、少しは休むべきではないかと提案するつもりでいたのだが。彼女の勢いに流され、言い留まってしまった。

「樹海に行くには……北門から出るのが一番近いですねえ」

シエリアの魔力は既に底を着いているはずなのに。全く元気が良いと呆れてしまう。俺も観念して走り出そうとしたその時

「むむむ……む……む……む……！」

シエリアが突然立ち止まり、唸り出した。勢い余って俺は背中にぶつかってしまふ。急に止まらないでくれよ。

「いっつ……！ 何だよ、いきなり」

俺はぶつけた鼻を手で押さえる。不意打ちだったからマジで痛いんですけど。鼻血が出なくてよかった。

「あはははあ……やばいやばいですねえ」

「何が」

まるで苦虫を噛み殺したかのような表情を浮かべている。そんなマジで焦ってる顔は始めて見た気がするんだが。つーか冷や汗までかいてやがるし。一体どうしたってんだ。

「ヴェリア姉様が……治安維持専門騎士団が、大勢でこちらに向かってくるんです。全部でざっと500人くらいでしょう。非常にマズいですねえ。ホテルでの乱闘騒ぎを通報されたのかもしれない」

「なにい!?!」

おいおいおいおい。冗談じゃねえ。今奴等に拘束されでもしたら、今までの苦労が全部水の泡じゃねえか。そもそも俺はアイナと同行してたから素性はバレてるし、また此処で問題起こしたことが発覚したら、今度はマジで牢屋に放り込まれるかもしれない。いや絶対にそうだ。あのヴェリア……こいつの姉貴ならやりかねん。

「どどど、どーすんだよ?!」

慌てすぎて舌が上手く回らない。

「うゝむ……。雑兵だけならばともかく、ヴェリア姉様までもが動しているとなると……。勝ち目はありませんねえ。此処は素直に逃げ回るしかなさそうです」

「なら、一気に北門を目指してこの街を脱出するのが……」

「ブリュードさんブリュードさん。クロードンの造りを忘れてしまつては駄目ですよ。あらゆる侵入者を逃がさない為に、この巨大な

防壁があるのですから。北門に行った所で、門番に通報されてお終いですう」

「うぐつ！」

そうだった。そもそもアイナは、その厄介な門番の所為で拘束される羽目になってしまったんだ。今こんな状況でのこのこ俺達二人が向かえば、確実に捕らえられてしまう。この街を出る方法は、東西南北4つの門をくぐる他ない。こんな分厚い防壁を破壊するのはまず無理だろう。あ、でも……

「そうだシエリア！ お前、浮かべるんなら空を飛んで上空から防壁を通過すれば……」

「無理ですよ。そんな目立つことは出来ません。しかもしかも、ヴェリア姉様の眼前で空中に浮かぶなんて、自殺行為以外の何でもありませんよお〜？」

「そ、そうなのか……」

何で自殺行為なのかはよく分からないが。とりあえず無理そうなのでそれ以上は追及しないでおく。そうこうしている内にも、俺の耳にまで届く程に騎士団員達の足音が近付いてきた。まるで雷の轟きみたいだ。確かにかなりの人数が居るように感じる。本格的にヤバイな、これ。

「う〜ん……う〜ん……。仕方ないですねえ。一か八か、賭けてみますかあ……」

え、なに。今こいつ一か八かって言わなかったか？ 何する気なんだよ。また突拍子も無いことを言い出す気じゃねえだろうな。やめてくれよ。俺の身がもたねえ。

あたふたとする俺を完全にスルーし。暫く頭を抱えて唸っていたか

と思うと、不意に何かを決意したかのように俺を見上げ、

「騎士団さんの本拠地に、乗り込みましょ〜〜!!」

声高々に、そう言い放ちがやるシエリアさんだった……。

「居たぞ！ 東門の方だ！ 追えー！！！」

「クローデンからは絶対に出すな！ 逃がしたらヴェリア団長の拷問を受けると覚悟しろお！！！」

あちこちから、武装した騎士団員たちの怒号が飛び交ってくる。無数の足が地を叩く騒音は、深夜のクローデン全域にまで轟いていた。そんな完全包囲網の中、俺とシエリアは廃れた路地裏でじっと身を隠している。

「やべえな……さつきより人数が増えてやがる。なあ、もうやり合っちまった方が早いんじゃないか？」

俺は声を潜めながら、背後に寄り添う様にしてしゃがんでいるシエリアに声を掛けた。つーかあまり近寄らないで欲しい。さつきから大きな胸が背中当たって来るんだが。

「むむむ。駄目ですよ〜。そんなことをしたら、すぐにヴェリア姉様が来てしまいます。今は耐えるべき時ですよ〜」

「そうは言ってもなあお前。これじゃあいつまで経ってもぐっ！？」
「し〜っ！？」

喋ってる途中、いきなり両手で口を塞がれた。何事かと見ると、俺達の目と鼻の先にある通路を、一人の団員が駆け抜けていった。危ない危ない。間一髪だった。シエリアに無言で礼を言う。

俺達が今、向かっている場所は。クローデンに到着した時、最初に俺とアイナが連れて行かれたあの拘置所だった。東門付近にあるその場所には、普段であれば数多くの騎士団員及び、ヴェリアが常駐

している。だが、今はこんな状況だ。殆どの団員は現場に居なかった俺とシエリアを探し回り、クローデン中に散らばっている。逆にそれを利用できるとするならば、此処しかない。シエリアはそう考えたらしい。だが……

「そもそも、拘置所なんかに行つてどうするつもりなんだよ？」

俺は先程よりも更に声を潜めて、シエリアに問いかける。あの後ずつと逃げ回ってきたから、聞く暇がなかったのだ。

「あそこにはですねえ……街の外に繋がっている緊急脱出用の地下通路が備え付けられているのです。もし仮にクローデンが戦火に巻き込まれた際、住民達を安全に避難させる為に作られたものだそうです。他の場所だと容易く破壊されてしまう恐れがありますが、騎士団が管理しているとなれば敵さんもそうそう手出しは出来ません。故にそんな場所にずつと昔に作られたそうですよお〜」

「マジかよ……よく知ってたな、そんなこと」

「えへへえ。これでも団長様の妹ですからねえ」

なるほどな。それなら確かに、地下通路を通つていけば安全に街の外へと出られるかもしれない。というより、こんな状況ではそれ以外に方法は無いだろう。勿論敵の本拠地に侵入するのだから、それなりの戦闘は覚悟せねばならないだろうが。ヴェリアと愉快な仲間達相手に二人で立ち向かうよりかはずつとマシだ。

「なあ、シエリア」

「何ですかあ？」

それはともかくとして。拘置所に殴り込むというのなら。俺は一つ、絶対にやらなくてはならないことがある。こんな形になるとは正直思つてもいなかったが……。俺が奴隷商人を追っていたのは、最終

的に此処に辿り着くための通過点だった訳で。

「今まで秘密にしてきたことが一つ、あるんだ……。聞いてくれるか？」

「ふむふむ。何でしょう」

此処まで来てしまつたら。もはや秘密にしておく必要もないだろう。当初は素性の知れないシエリアを警戒して、アイナやクルトゲイス伯爵殺害事件については伏せておいた。しかし、理由は知らないが彼女がヴェリアと敵対している以上、俺の邪魔をしてくることなんてないと思う。それは今まで一緒に戦ってきたことで充分分かつているしな。

俺は意を決し、今まで学院を出てから俺の身に振りかかった出来事を、洗い浚い全てシエリアに話した。流石に驚いた素振りを見せていたが、何故俺が奴隷商人を追っているのか、ようやく納得出来ましたと微笑んでくれた。

だが何だろう。アイナの名前を出した途端、少し落ち込んだ様に見えるのは気のせいだろうか。

「なるほどなるほどお〜。つまりブリュードさんは、そのアイナさんという恋人を助け出したい訳なのですね〜？」

「いやいやいや。恋人じゃねえから。ただの友達だから。変な勘違いしないでくれよ」

「本当ですかっ!？」

何故そこに食い付く。さっきとは打って変わったキラキラと輝く瞳で、身を乗り出して来た。近い近い近い。恥ずかしいからやめてくれ。

「あ、ああ。とにかくそういう訳だから、拘置所に行ってこの街を脱出するなら、アイナも一緒に連れて行きたいんだ。無理なら別行

動にしてくれても構わない。駄目か？」

ただ地下通路への道を切り開いて突き進むのとは訳が違う。拘置所内の何処に捕らわれているのかも分からないアイナを探し出し、檻を破壊して連れ出さねばならないのだから。より激しい戦闘も覚悟しなければならぬ。ぐずぐずしては、ヴェリアにも連絡が行ってしまう危険性がある。普通ならば断られて当然の申し出だろう。だが俺はたとえ一人でも成し遂げる覚悟だった。

しかし、

「駄目も何も、姉様の所為で牢獄に閉じ込められているという女の子を、放っておく訳には行きませんよ。アイナさん救出作戦、是非是非私もお供させてください〜」

シエリアは、満面の笑みでそう言ってくれた。迷う素振りも一切見せずに。本当にこの人は、どこまでもお人好しというかなんというか……。それに甘えさせて貰っている俺が言えた口ではないが。あのスラム通りでこの人に出会えて、本当によかったと思う。そうでなかったら、俺はきっと此処まで辿り着けなかったに違いない。全ての感謝の気持ちを込めて、

「ありがとう!」

俺は力強く、そう言った。

「見てください」。拘置所内の見取り図です。私達が今居る場所が此処ですね」

「ほお。結構広いみてーだけど、造りはそれ程複雑じゃねえんだな」「はい」。市民を避難させる際、円滑に誘導できる様わざと簡単な造りにしてあるのだと思います」

「なるほど。俺達にとっちゃ好都合だな」

あの後。無数に光る騎士団員の目を何とか退け、俺達二人は敵の本拠地である拘置所への侵入に成功していた。まさか奴らも逃亡者が自分たちの根城に向かっているだなんて思っていなかったらしくて。東門方面へと殆どの人員を割いていた為に、こちらの警備は驚く程に緩かった。

当然ながら入り口付近に二人ほど門番の兵士が立ってはいたが、俺が魔力砲を飛ばしただけで難なく倒すことが出来た。弱すぎだろ、騎士団のくせに。そいつらの衣服を漁ってみると。幸運なことこの施設のマスターキーと、見取り図を手に入れることが出来た。上

手く行き過ぎて怖いくらいだぜ。後で痛い目を見ないか心配だ。

とは言いつつも、俺達はマスターキーを使い、正門から堂々と中へと侵入するのだった。

思っていた通り、殆どの団員は出払っていて。もぬけの殻と言っていくらいの状態だった。不気味な静寂の中、俺とシエリアは只管走り続け。現在位置は、看守室という部屋の手前の廊下だったりする。此处を抜けた先に、罪人を拘束している牢獄が立ち並んでいるらしい。

「注意してくださいね。いくらこんな状況とは言え、看守室にはそれなりの戦力が整っているはずですよ」

「ああ、分かってる。油断なんてしないさ」

俺は腰に差してある“エヒル・アーツ魔魂の武器”の柄に手を掛ける。良い機会だから、こいつを試してみるのもありかもしれない。確か斬った箇所を凍らせるだけじゃなくて、身体能力も上がったりするんだよね。便利なもんだぜ。

「私が魔法で扉を破壊したら、すぐに突っ込んでください。人は不意打ちに最も弱いですから」

「りょーかい」

窓も装飾も何もない、質素な造りの廊下の中央で。俺とシエリアの息遣いだけが、やけに大きく聞こえた。よく考えてみれば、これって本当の犯罪になっちまうんじゃないのかな。拘置所に侵入して囚人を脱獄させるだなんて、どんな凶悪犯だよ。まさかこんなこと

になるだなんて、本当に思っていないかったぜ。当初はただ魔法を教わりに行くだけの旅だった筈なのになあ……。でもまあ、何だかんだ言っても楽しいからいいんだけどよ。掛け替えのない友達とか仲間というか……。そういうもんも出来たしな。

「行きます」

「おう」

シエリアが両手を翳し、水色の魔方陣を出現させる。いつ見ても綺麗だ。それが一瞬光り輝いた後、中央部から大量の水が怒涛の勢いで噴出される。あれほど激しい戦いを繰り広げた後だというのに、その威力はまるで劣っていない。此処まで来る途中に、いくらか回復できたみたいだな。

そのまま一直線に水は突き進み、扉に激突する。まるで鈍器で殴り飛ばしたかのような爆砕音が響き渡り、鉄製のはずのそれがひしやがて素っ飛んで行った。すげー威力……。

「何事だあ！？」

「て、敵襲か！」

中から阿鼻叫喚の悲鳴が聞こえてくる。そりゃそうだろうなあ。俺だって吃驚するぜいきなりこんなことされたら。

「んじゃま、ちよっくら行ってくらあ」

「はーい！ 私も援護します！」

とは言いつつも。情けを掛ける気は全くない。俺は“エヒル・アーツ魔魂の武器”の刀身を鞘から抜き、走り出した。

「うお！？」

すぐさま俺の体を異変が襲う。いつもの何十倍も、体が軽く感じるのだ。まるで重力が弱くなったかのように、高速で動き回ることが出来る。こりゃいい。体感的には2、3歩走っただけだったのだが、

もう目の前には開け放たれた状態の看守室があった。シエリアがいるのははるか後方、20メートルくらいだ。

「うわ〜〜凄いですうブリユードさん！ かつこいい〜〜！」
何を暢気なことを言ってるやがる……。あまりにも場違いな言葉に、一瞬こけそうになってしまったが。なんとか体勢を整え、室内へと侵入する。

中には、重鎧を装備した団員が5人居た。いずれも重厚そうな鎧で、普通の剣や槍では傷一つ付けられなさそうな逸品である。流石は看守、といった所だな。門番とは待遇が随分違うみたいだぜ。さあてどうするかなあ。

「くそつ、敵は何処に……！」

何か俺の存在にまだ気付いていないみたいだな。そりゃそうか。完全なる不意打ちに加えて、この高速移動。反応できる奴なんてそうそういないはず。だったら試しに一発、斬ってみますかね……！

俺は殆ど重量を感じない“エビル・アーツ魔魂の武器”を握り締め、一番扉の近くに居た兵士に斬りかかった。まさに光速の一閃。俺自身ですらも追いつけないほどの速度で、刀は振るわれた。 と思った直後。

いきなり俺の顔面に、大量の血飛沫が降り注いだ。重厚な鎧をまるで紙のように切り裂き、一瞬の内にその下の肉まで切り裂いていたのだ。速い。速すぎる。自分でも驚く程に。

「う、うわああああ！？ 何だいきなり！！」

数秒遅れて痛みに悶え始めるそいつ。斬られたことに気付かなかつたらしい。ばつくりと裂けた胸を抑えて蹲るが、もう遅い。傷口を沿うようにして真っ白い靄が現れ、瞬く間に体を侵食していく。

「う……あ、ああああああ！！」
そりゃ悲鳴くらいあげるよなあ……。俺だつていきなり斬られて体が凍りだしたら、叫びたくもなるさ。怖いもん。でも悪いな、こっちはもたもたしちやいらねえんだわ。

俺は容赦なくそいつに止めを刺す。軽く腕を振り下ろすだけの動作で、首と胴体が永遠の別れを遂げた。もはや斬った感触すら感じられない。

「何だ、何が居るんだ！！」
失敬だなおい。人を化け物みたいに言うんじゃねえよ。俺はれつきとしたただの人間だつての。まあ確かに“エヒル・アーツ魔魂の武器”の方は化け物みてえな装備かもしれねえけど……。

俺は足を止めることなく走り回る。速すぎて奴らの目には姿が見えていないみたいだな。つーか……俺、知らぬ間に壁を走っていたみたいだ。道理で体が妙に傾いてると思った訳だぜ。本当に重力が無くなったように感じる。これなら奇襲も簡単に……

「いいからさつさと武器を取れ！ 迎えうつ……！！」
傍らに置いてあった馬鹿でかいハルバートの手に持ち、他の奴を叱責している大柄な男。そいつの両腕を一瞬で削ぎ落とした。二本の腕が宙を舞い、あたふたとしていた団員たちの目の前へと落下する。遅れて大量の血が噴き出し、部屋中を真っ赤に染め上げた。

「ぎゃああああああああ！！」
この世のものとは思えない叫びが上がる。誰の声かも分からない。あんまり騒ぐんじゃねえようるせえな。ヴェリアが来ちまうだろうが。俺は倒れかけていたハルバートの巨大な刃を柄から切り離し、細身の男に向かって投擲した。狙いの中、高速で喉に深々と突き刺さり鮮血が吹き上がる。

「誰か、たす、助けてくれ……！」

「団長に連絡をお……！」

余計な真似すんじゃないよ。突如として沸き起こった惨劇を目の当たりにし、逃げ出そうとする団員が二人。こういう奴らが一番むかつく。仲間を見捨てて逃げるつもりなんだろ？ 自分だけ助かれれば良いと思ってる奴らだ。腹が立つ。おまけにヴェリアに連絡するのきたもんだ。己が力で解決を図る努力すらないのか。こんなのが騎士団？ 俺が憧れていた市民を守る職業？ 虫唾が走る。ふざけんじゃない。自己満足も大概にしる……！

俺は“^{エビル・アーツ}魔魂の武具”に魔力を込める。見様見真似だが、多分出来るだろう。確かこうやって、空気中の水分を氷結させて……！

奴らに向かって刃を振るった瞬間、無数の氷塊が現れ高速で飛んできた。俺とシェリアが受けたあの攻撃だ。食らったときは厄介だったが、自分が使うところも強い。扉付近で体勢を崩し転んでいた二人の体が、見る見るうちに蜂の巣になっていく。最高だ。物凄く清々しい気分になる。何だこの力は、強すぎる。これがあれば、俺はどんな奴にも負ける気がしない。ハハハハハ。ざまあみやがれ。見るよあいつらの体。ズタズタになってやがる。もつと、もつとだ。悲鳴を上げて苦しめよ。どうした？ 喉が潰れて声もだせねえのか。だったらもう、原型を留めない位に粉々にしてやるぜ！

俺は更に数回刃を振るって氷塊を出現させる。それらが全て物言わぬ肉塊へと突き刺さっていく。楽しい。楽しすぎるぜおい。ああ、駄目だ。何も考えられなくなってくる。またこの感覚だ。快感の海に俺の意識が沈んでいく。

もつともつと殺して殺して、殺し尽くして！

「ブリユードさん!!」
「っ!？」

突然、シエリアの泣きそうな声が俺の鼓膜を突き抜けた。何だ、どうしたってんだ。そんな声出して。というより、あれ……。俺今、何してたんだっけか……。

「どうしちゃったんですか……?」

どうしたって、何だよ……。俺はただ……ただ? ただ……何をしていた? 分からない。まるでついさっきまで夢を見ていたみたいに、記憶に霞が掛かっている。

「うっ……!!」

妙に頭が痛む。それに体が熱い。何でだ? まるで熱湯でも掛けられてるみたいに、熱い……。俺は自分の体に目をむけ、ぎよつとした。全身が真っ赤に染まっている。熱い血で塗り潰されている。

「何だ、これ……!!」

訳が分からない。どうしてこうなっている? 俺はただ、看守室に乗り込んで、それで……!

「ブリユードさん……」

目の前にやけにフラフラとした足取りでシエリアが座り込んだ。泣いている……。のか? ぽろぽろと目から涙が零れ、頬を伝っている。初めて見る表情だ。彼女が、泣くだなんて……。

「落ち着いてください、大丈夫ですから……」

震える両手で俺を抱きしめて来た。きつく、痛いほどに。いきなりどうしたっていうんだ。それに、あれ……何だか、シエリアの体も……熱い……。

俺はそっと腕を動かして、彼女の膝に手を置いた 瞬間。

「っ!?!」

まるで肉が抉られたかの様に、無数の穴が開いていることに気が付く。それらは全て一様に、傷口が凍りついていた。白い靄が浸食を始め、徐々に体全身へと動き始めている。これは……。この、攻撃は……!

「そんな……なんで……」

「大丈夫……大丈夫です……」

俺がシエリアを攻撃した、証拠だった。

「う、うわあああああああああ
!!」

私が異変に気が付いたのは、ブリユードさんが看守室に入ってからすぐのことだった。いつもとはまるで違う、凶暴でおぞましい魔力が彼を包み込んでいたのである。近付いただけでも髑り殺されてしまいそうなその雰囲気、私の足は自然と震えていた。

「ブリユードさん……？」

彼は一瞬の内に、次から次へと敵を切り殺していた。私でも追えない程の速度で。明らかに“エヒル・アーツ魔魂の武器”の力だけではない。私がア
レと戦った時、こんなにも速くはなかったはず。

「ぎゃあああああああああ！！」

中に駐屯していた騎士団員たちの悲鳴が上がった。得体の知れない何かに襲われたかのような、怯え切った叫びだ。酷い。大量の血飛沫が上がっている。彼はこんな残忍なことをする性格には見えなかった。なのに何故……？

私の中に一抹の不安がよぎる。このまま彼を放置しては、大変なことになるかもしれない。直感でそう感じたのだ。私は駆け足で愛しい彼の元へと急ぐ。

「ブリユードさん！」

呼びかけてみるも、返事は無い。どうして？ 聞こえていないはずはない。まるで彼は、周りの状況が見えていないみたいだ。狂ったように団員達を血祭りに上げている。何処かそれに快感を感じているかのような動作も垣間見えた。時折、彼は歯を見せて笑っているのである。とても汚い笑みだ。悪人が悪事を成功させた時のそれに

よく似ている。

私の背筋を悪寒が走り抜けた。あれは本当にブリユードさんなのだろうか？ 分からなくなってきた。もしかしたら、“エヒル・アーツ魔魂の武具”の影響であんな風になってしまっているのかもしれない。そうだと信じたい。そうであって欲しい。

「ブリユードさん！」

もう一度呼びかける。返事はやはりない。このままでは埒が明かない。私は意を決し、部屋の中に入ろうとした。その時。

「誰か、たす、助けてくれ……！」

一人の団員が、入り口付近で倒れていた。逃げようとして脚が纏れ、転んだみたいだ。立ち止まっていた私と目が合う。助けを請う様に手を伸ばしてきた。どうしたものだろうか。私は彼に怨みはない。だが…… 此処で手を差し伸ばしては本末転倒である。危険を冒してまで敵の本拠地に侵入したのだから。やはり殺すべきだろうか。でも…… その目、その表情。必死に生を求めてあかくその様は、昔の私の姿に酷似していた。

人間に故郷を焼き払われ、地べたを這い蹲って生きていた、昔の私に。

一瞬の迷いが生じる。此処で私が彼を殺したら、私はあの人間達と同類になってしまうのではないか。今更何を、ということは自分が一番分かっている。私は今まで目的を果たすために数多くの人間を殺してきた。今更たった一人を救う意味も理由もないはず。それでも……。私は彼を、殺したくなかった。

伸ばされた手に対し、私も同じように手を差し伸べる。何処かに拘束しておけば、問題は無いだろう。手と手が触れ合った瞬間

「うあああああああああああ！！」
「っ！？」

彼の体が、無数の氷塊によって貫かれた。顔が、首が、腕が、腹が、腿が、脚が、砕かれていく。風穴なんて生易しいものじゃない。体が粉々になつて肉片と化していくのだ。生々しい鮮血が私の体に降り注ぐ。まだ人の温もりを宿しているそれは、とても気持ちが悪いものだった。

「はははははははは！！ 死ね死ね死ねええ！！」
更に氷塊の量が倍以上に増す。凄まじい勢いだ。飛び散った血肉がすぐさま凍り付いていく。この攻撃を行っているのは、勿論ブリュードさんだ。しかしこれはどう考えても……

「や、やりすぎですよお！！ ブリュードさあん！！」
私は必死に彼に向かって叫ぶ。いくらなんでもこれは酷すぎる。私達はただアイナさんを解放出来れば、あとは地下通路を使って逃げるだけだったはず。途中騎士団とやりあうことになっても、半殺し程度で済ませれば充分事足りる目的だ。なのに……。

私は彼の姿を見ていられたなかった。アレではまるで、“あいつら”と同じだ。私の村も、友達も、家族も、何もかもを奪い去っていったあいつらと。もしヴェリア姉様が今のブリュードさんを目にすれば、きつと激昂して本気で殺そうとするだろう。それだけは絶対にさせる訳にはいかない。

でも……既にヴェリア姉様が感付いて、こちらに向かつて進路を取り始めているのは、何となく分かっていた。いくら私が魔力の気配を抑えていようと、やはり姉様を出し抜くまでには到底及ばない。ぐずぐずしては殺されてしまう。急がなければ……。

私は物言わぬ肉塊と化した男の屍を踏み越え、ブリユードさんの眼前に立つ。両手を広げて仁王立ちの体勢を取った。私を見れば、きつと攻撃を止めてくれるはず。そう、きつと

「ぎゃはははははははははは！！」

「うつ！ ぐつ！ ああああああ！！」

止めてくれる、はずだった……。

そんな私の愚かな希望は、呆気なく打ち砕かれた。腰から下を氷塊によって貫かれていく。こんな痛みは初めてだ。無数の異物が肉を抉り、貫通していく。脳細胞が破裂してしまうかと思う程の激痛だ。打ち抜かれた箇所は、すぐさま感覚が奪われていく。凍らされているのだ。私はすぐに立っていらなくなる。それでも只管、前へ前へと歩みを進めた。

「ブリユード、さあん……」

数センチ足を動かすだけでも気絶してしまいそうになる。痛い。本当に痛い。本来の標的が倒れている騎士団であったことが不幸中の幸いだろう。でなければ私は、上半身の臓器を破壊されてとつくに死んでいたはず。

私は捨て身の覚悟で、一步、また一步と進み続けた。今は体なんてどうでもいい。どうせ心臓と脳さえ生きていれば、治癒魔法でどうとでもなるのだから。

私は体の痛みよりも更に大きく、心の痛みを感じていた。信じていたブリュードさんが、私を攻撃するだなんて。今まで一緒に戦ってきた時間は一体何だったのだろうか。確かに出会ってからまだ1日も経過しては居ない。それでも、互いに背中を預けられる仲にはなっていたはず。そう思っていたのは私だけ？ 私が一人で浮かれていただけなのだろうか。初めて仲間が出来た、と。もしそうだとしたら、あんまりだ……。

「うつ、くう……！」

両目から涙がぼろぼろと零れ落ちる。もう泣かないと決めたはずなのに。とてもじゃないが抑え切れない。視界が霞む。大粒の涙が頬を伝って床に流れ落ちていく。悲しい。こんなに悲しいことはない。どうして？ どうしてなの？ 何が貴方をそんな風にしてしまったの？ ねえ、答えて……

「ブリュードさん……！」

「っ……？」

ここまで近付いてようやく私の叫び声が届いたのか、ブリュードさんは一瞬体をビクつかせてこちらに目を向けた。まるで幻から覚めたかのように、しきりに瞬きを繰り返している。同時に、彼に纏わり着いていたあの狂気のような魔力も霧散していく。

「どっしちゃったんですか……？」

雨のように降り注いでいた“エヒル・アーツ魔魂の武器”の攻撃もようやく終わり、私を解放してくれた。私は鉛の様に重くなった両足を必死に動かす。

「うっ……!!」

ブリュードさんは、頭を抱えて苦しそうな表情をしている。あれだけの力を行使し続けていたのだから、体が悲鳴を上げるのは当然だろう。そのまま視線を下に移し、目を丸くしていた。自分の体に付着していた血液の量に驚いたのかもしれない。元から血まみれだった服が更に血を吸い、もはや飽和状態と化している。元はどんな柄の物だったのか全く分からない。

「何だ、これ……!!」

覚えていない？ これはこれは……。無意識で戦っていたということなのだろうか。いや、でも確かに彼は奇声を上げたり、笑ったりしていたはず……。私も何が何だかさっぱり分からない。とりあえず興奮状態にある彼を落ち着かせなければ。

「ブリュードさん……」

そう思つて足を前に運んだ瞬間……遂に力尽き、私はフラフラとその場に座り込んでしまった。どうやら限界みたいだ。むしろ此処まで歩いてこれた時点でも常識を遥かに超えている。

目の前には、私を見下ろすブリュードさんがいた。その表情は驚愕の色一色に染まっている。血塗れで涙を流している私が眼前に現れれば、そりゃあ驚くだろう。また取り乱されてさっきみたいな状態に陥ってしまうかもしれない。私は努めて優しい声音で話しかけた。

「落ち着いてください、大丈夫ですから……」

震える両手で彼の体を抱き寄せる。信じられない程に熱い。火傷し

てしまいそうなくらいだ。それでも私は力を弱めない。ぎゅっと力を込める。決して離れないように。

私に合わせて、ブリユードさんもしゃがんでくれた。ちよっぴり嬉しい。こんな状況なのに何を考えているのだろうか、私は。どうして彼を此処まで好きになっちゃってしまったのか、自分でも分からない。抱き締める力を更に強める。対する彼も私の背中に腕を　回してはくれなかった。

回そうとして、気づいてしまったのだ。私が傷を負っていることにゆっくりと指先で傷を撫でられて行く。既に凍っていて感覚は無い。私はすぐにしまった、と思った。抱き締める前に治癒魔法を唱えておくべきだったのだ。今からではもう遅い。

「そんな……なんで……」

消え入りそうな声で呟く。いけない。また彼が我を失ってしまうかもしれない。駄目。それだけは駄目。

「大丈夫……大丈夫です……」

私は必死に無事を訴える。だけど声に力が入らない。実を言うと全然大丈夫ではないからだ。そろそろ本格的に意識が朦朧としてきている。血を流しすぎた。このままでは確実に　死ぬ。

「う、うわあああああああああ　！！」

駄目だ。恐れていたことが起こってしまった。ブリユードさんが大声で泣き叫んでいる。喉が張り裂けてしまいそうな声だ。きつと私に傷を負わせたのが自分だと分かったのだらう。分かっちゃった

のだろう。錯乱状態に陥り、体内の魔力が暴発している。あの奇妙な黒い魔力が、部屋中に踊り狂っていた。まずい。今度はどうなるか分からない。私が、どうにかしなければ。私が……！

「い、癒しの水よ……。彼の者に、清らかなる安らぎを……。与え給え」

私は震える声音で必死に、呪文を唱えた。一語一語を確実に発声していく。この魔法を使ったら、また魔力が空になってしまいかもしれない。ブリユードさんを治療できる程の余力を残すことが出来ないのが、悔しくて堪らなかった。

「
” ウォーターヒール”！」

詠唱を終え、最後に魔法の名を叫ぶ。私を中心に置いて4つの魔方陣が浮かび上がり、治療が始った。暖かい。自分で唱えた魔法がこんなに心地よく感じるだなんて。本当に初めてだ。飛び散った肉が、砕けた骨が、流れ出た血が、全て完璧に再生されていく。間に合ってよかった。私の体を蝕んでいた忌まわしい白い靄も、跡形も無く消えていく。もう大丈夫だ。足を伸ばしてみる。ちゃんと伸びる。力を入れて立ち上がってみる。ちゃんと立ち上がれる。

「ブリユードさん、どうしたんですか……？ 私は何ともありませんよ……？」

今の私にできることは、これくらいしかないだろう。彼が見ていた幻は、私が瀕死の重傷を負っていた場面まで続いていた。それだけのこと。今彼が目覚めれば、快癒した私が目の前にいる。無邪気な笑顔を彼に向ければ、きつと正気を取り戻してくれるはずだ。それでいい。彼が私を攻撃した事実なんてない。揉み消してしまえばいい。それで今までの関係が崩れることなんてない。

「う、ううううう……！ シェリ、ア……！」
「はい……？ なんですかあ……？」

私の名前を呼んでくれた。ただそれだけのことが、本当に嬉しい。蹲る彼の頭を、優しく抱いてあげた。

「私はここに居ますよ。大丈夫です……。早く二人でアイナさんを救出して、アンデロッド大樹海へと向かいますよ……」

今回の事件の犯人である者たちが、私の故郷を襲った奴らと同一人物であるかどうかは分からない。もしかしたら、また無駄足で終わってしまうのかもしれない。だけど。それでも。これを解決することには、大きな意味がある。ブリュードさんの力になることが出来るのだ。たったそれだけの理由さえあれば、無駄足なんかにはならない。それこそが、今の私にとっての至高の喜びなのだから。

「……………て、くれ……………！」
「はい？」

ブリュードさんが、小声で何かを言った。正気を取り戻したのだろうか。しかし……………様子がおかしい。激しい殺気を放っている。一体なぜ……………？

「 アイナ・セブンスフォースを解放して、一体何をするつもりなのかしら？ シェリア」

ドクン。私の心臓が、跳ね上がった。よく聞き慣れた自分と同じ声。後ろから発せられたからだ。怖くて振り返れない。どうして？ どうしてこんな至近距離に近付かれるまで、気付けなかったの…

…？

私はすぐさま原因を理解する。魔力の枯渇による気配察知能力の欠如。それ以外にない。迂闊だった。こちらに向かっているのは分かっていたのに。致命的なミスだ。姉様の風の魔法なら、移動能力を極限まで高めることなんて簡単だ。来ようと思えば、ほんの数秒で来れてしまう。分かっていたのに……！

「返答によつては、貴方も豚小屋にぶち込まなければならなくなるわね。そのガキと一緒に」

私は震える体を叱咤し、ゆっくりと振り返る。敵に背を向けているなんて、自殺行為もいいとこだ。脳ではそう理解していても、体が拒否反応を起こす。この最悪の事実を受け止めたくない、と……。

その時。腕の中に居たブリュードさんが突然動き出した。 “魔^エ魂^{ビル・アーツ}の武具” を握り締める音がする。何をする気なの……？ 「冗談だよね？ そんな、無茶なことは、しないで……！」

「ヴェリアアアアアアアアアアアア！」

……怒号と共に立ち上がったブリュードさんは。クロードン治安維持専門騎士団団長である、私の姉様　ヴェリア・フェリネスに向かって、刀を振り翳していた。

輝く白銀の重鎧。胸部に堂々と描かれた聖獣、ペガサス。背面を覆う鮮やかな翡翠色をした外套。右腕には騎士団長を表す五つ星が刺繍された腕章を嵌めている。

その主の顔はというと 正にシエリアと瓜二つだった。注視しなければ見紛ってしまう程である。あえて違う点を挙げるとするならば、髪の色と瞳の色……それと全体的な雰囲気、と言ったところだろう。

こいつの所為で、アイナが……。アイナが！

「ああああああああああああ！！」

俺は気付くと、“エビル・アーツ魔魂の武具”の柄を握り締め駆け出していた。体が軽い。体感的には一歩踏み出したただけだといのに、もう既に俺は奴の眼前へと移動していた。

「駄目です、ブリユードさん！」

後ろからシエリアの声が届く。駄目と言われて止まる気なんてない。今此処でこいつを仕留められれば 全てが終わるんだ！

右肩から左脇腹へと、斜めに一閃高速で斬り付ける。これだけの速度ならば、いくらヴェリアとはいえ反応できないはず……。だった。

「っ!?!?」

完璧に入ったと思われた俺の斬撃は、肉体を切り裂くどころか、鎧にすら届いてはいなかった。それよりも更に手前で、切っ先ごと弾かれている。見ると、緑色の魔方陣が浮かび上がり、ヴェリアの体を護っていた。

「ちっ、魔法障壁か……！」

俺は思わず舌打ちを打った。魔法使いが障壁を張っているのは当然だというのに。先程の看守たちが身を護る術を何も施していなかった為、油断していた。

俺は一度距離を取り、再び刀の間合いまで踏み込む。対するヴェリアは腕を組んだまま微動だにしていない。俺の速度に着いて来れないのか、それとも……。真意は分からない。だが攻撃を仕掛けてこないなら絶好の好機だ。俺は躊躇することなく神速の斬撃を縦横無尽に浴びせる。

こめかみ、頸椎、心臓、みぞおち、アキレス腱の辺りを重点的に狙った。これだけの速度と手数で斬りかかっていけば、いずれは障壁も砕け散るはず。その時に急所を打つことが出来れば……！

そう思っていた俺は、不意に自分の体の違和感に気が付いた。見ると、全身から大量の血が噴出している。これは一体なんだ？ 攻撃を受けたのか？ いや、ヴェリアは一度もそんな素振りを見せていない……。

「ぐっ、がはっ……！」

もう一度刀を振ろうとした瞬間。俺は猛烈な吐き気を催し、吐血し

ていた。エレル・アーツ“魔魂の武器”の力で加速していた己の感覚が、すぐさま常態へと戻っていく。

「ブリユードさんっ!!」

シエリアが慌てて駆け寄り、俺の眼前にしゃがみ込む。何だこれ、どうなつていやがる。俺は脳みそが凄まじい激痛を訴えていることに、今更気付いた。全身が裂けているかのように痛む。いや……

実際に、俺の体は裂けていた。

「あつぐ! ああああああああ!」

まるで鋭利な刃物で滅多切りにされたかのように、体中がズタズタになつていた。意味が分からない。俺はいつの間にかこんな大怪我を負つた……? ヴェリアは何もしていないはず……。

「ブリユードさん……! 姉様の“風刃乱反射”に突っ込むなんて、命が幾つあつても足りませんよお!!」

シエリアが涙を浮かべて俺の両手を握り締める。風刃乱反射? 何だそれは。魔法の一種か?

「あらあら……。一体何がやりたいのかしらね? この雑魚は」

それまで無言のままじっと佇んでいたヴェリアが、ゆっくりとこちらに近付いてくる。明らかに俺を蔑むかのような表情をしていた。見ているだけで腹が立つ。

「てめえ、このヤロ……!」

俺はカツとなり、悲鳴を上げる右腕を奮い立たせて渾身のストレー
トを放った。狙いは膝蓋骨。皿を砕け散らせてやる……！

「ブリュードさん!!」

勢い良く身を乗り出した俺を、シエリアが抱き着く形で無理矢理静
止してきた。その所為で体勢が崩れて前につんのめり、床へと顔面
を強打してしまう。鼻が潰れる嫌な感覚が俺を支配した。

「ぶっ! つう……! 何すんだシエリア!!」

「何すんだじゃないです!! 何してるんですかブリュードさん!
! また風刃の餌食になるつもりですかあ!?!」

「んだよそれ……は……」

顔を上げた俺の目の前。くっきりと浮かび上がったヴェリアの魔法
障壁。それがまるで生きてるかのように渦を巻き、高速で回転して
いた。空を裂く鋭い音が響いてくる。舞い上がった俺の髪の毛の先端が
それに触れた瞬間 気持ち良いくらいに綺麗に切断された。

「なあ!?!」

有り得ない。何だコレは。ただの魔法障壁じゃないのか? 殺傷能
力を持つ障壁なんて聞いたこと無い。そんなのが存在するなら、ど
う考えても反則級の強さじゃないか。いやだが、現に目の前にこう
して……。

「分かりましたか? これが姉様の最強の魔法障壁 通称“
風刃乱反射”です。攻撃を防御するだけに留まらず、更に障壁に触
れた相手の肉を切り刻むと言う、超凶悪な魔法さんなのです。こ
風の属性魔法を究極にまで窮めなければ、こんな真似は普通出来つ
こありません」

「んだよそれ！？　じゃあ魔法でしかこれをぶち破れねえってことか！？」

「いえ、魔法でも無理です。この障壁は直接間接を問わずにその効果を発動させることが出来るのです。どれだけ離れた場所から魔法を放とうと、障壁に弾かれた瞬間に術者の体はズタズタになります。それ故の最強の魔法障壁……姉様オリジナルの“絶対防御”とも言えるべき魔法なのです」

「はあ！？」

ふざけている。反則なんてもんじゃない。何だそのふざけた魔法は。そもそもそれは魔法と呼んで良い代物なのか？　それじゃあ一方的にこつちが勝手に殺されるだけじゃねえか。攻撃すればするほど自身に傷つくだなんて……！

「ふんっ」

ヴェリアがまるで蛆虫でも見るかのような目で、俺を見下している。相手をする価値もない、とでも言いたげに鼻を鳴らした。ム力つく。本気でム力つく。俺を敵とすら思っていないぞ、こいつ。確かに勝手に自滅しているのは俺の方だが……。

やがてヴェリアはシエリアの方へと視線を移した。何をする気だ？

やはり拘束するのか？　そりゃあそうだろう。騎士団の拘置所に侵入し、看守を5人も殺害した凶悪犯が目の前にいるのだ。状況証拠だけでも充分な理由になる。最悪そのまま処刑なんてこと。

マズイ。今のシエリアは魔力を使い果たしてただの一般人と何ら変わらない。障壁も祿に張れないはず。そんな状態で奴の攻撃を受け

たりしたら！

「お、おい！ 待て！！」

ヴェリアの両手がシエリアに向かって真っ直ぐに伸びる。俺は咄嗟に“エヒル・アーツ魔魂の武器”を振るおうとしたが……振り切れなかった。風刃乱反射の餌食になるのが目に見えている。どうすることも出来ないのか、畜生！！

ヴェリアの魔の手がシエリアの両脇を通過し、そうして ゆっくりと、その柔らかい体を抱き締めた。

「逢いたかったわぁシエリアああ！！ クローデンに居るのはずっと分かっていたのに、どうして逢いに来ってくれなかったのお！？」

その柔らかい体を、抱き締めた。抱き締めている。抱き締め……って、はあ！？

「な、なななななな」

俺の頭上を幾つものクエスチョンマークが盛大に浮遊している。これは明らかに、暖かい抱擁という奴ではないのだろうか。いや間違いないくそうだ。俺の目が馬鹿になってしまっていないのならば。

「や、やめてくださいいい姉様あ！！ だから嫌なんですよあ！！ は～な～し～てえ～！！」

対するシエリアはというと。ジタバタと両手足を動かして必死に逃れようとするが、ヴェリアのがっちりとした拘束からはどう頑張っても抜け出れそうにない。こんなシリアスな場面で一体何をやっているのだろうか、この人達は。つか、何だ。こいつ本当に……ヴェ

リア、だよな？ 俺の想像と大分……いや、最初は想像通りだったのが。この変容っぷりは何だ。意味が分からん。つてかあんたら敵対してたんじゃなかったのか。

「あらあら。この子は照れちゃってまあ……そんなに真っ赤になるほどに再会が嬉しくて堪らないのね!？」

「違いますよお!! えくんブリュードさん! 助けてくださーい!」

涙目になって俺に助けを請うてくる。何だか見ている俺も本気でシエリアが哀れに思えてきた。

「お、おう!」

とりあえず引っ付いて離れないヴェリアを引き剥がそうと手を伸ばした瞬間……

「雑魚は引っ込んでろ」

「っ!？」

物凄い形相で睨みつけられた。俺は背筋が凍りつき、その場を一步も動けなくなる。この声音の差はなんだ。二重人格なのかと思える程の変容っぷりだ。

「それでそれで、シエリアは一体此処へ何しに来たのかしら? アイナ・セブンスフォースがどうとか言っていたけれど」

「むう〜。それですよ、姉様! 姉様の勝手な独断と偏見の所為で、アイナさんが無実の罪に問われたそうじゃないですか! 人間さんを無闇に傷つけるのは駄目です! すぐに彼女を解放してください!」

「何だそんなこと。いいわよ? 別にあんなのが一匹消えたところ

で、他に痛めつけることの出来る豚はいくらでもいるもの」

……。駄目だ、堪える。此処でキレたら、シエリアの頑張りが無駄になる。やはりヴェリアはとんでもない屑だ。分かっていたことじやないか。それがあまりの豹変っぷりに忘れてしまっそうになった。こいつはアイナを貶めた最低最悪なゴミだ。職権乱用にも程がある。

「本当ですかっ！？　ありがとうございますっ〜」

言いながら、シエリアは俺にアイコンタクトを送ってきた。今の内に！　というメッセージが容易に読み取ることが出来る。ありがたい。二人がどういう関係なのかは全く理解出来ないが……親玉であるヴェリアの承諾を得られたんだ。これで俺は堂々とアイナを解放させることが出来る。全く本当に自分勝手な団長だ、と呆れるのは後でもいいだろう。今はそんなことどうでもいい。とにかく早くアイナを助けてやりたい。

俺は逸る気持ちを抑えつつ、踵を返して看守室へと入った。自分でしでかしたとはいえ……やはり酷い惨状だ。俺はどうにか肉片の散らばっていない箇所を見付け、そこを足場にして進んでいく。部屋の中ほどまで進んだ時　何やら紙片やファイルなどが散らばっている在り来たりなデスクの上に、光り輝く何かがあるのが目に止まった。ランプにしては不自然な発光の仕方だ。強くなったり弱くなったり、明滅を繰り返している。

「なんだ、これ……」

俺は近付き、その光源を手にとってみる。どうやら一枚の白い札の様なものだった。表面に黒い字で術式らしき模様が描かれている。俺は学院長に吸血鬼への紹介状を書いてもらった時の光景を思い出していた。あの時俺は中を覗こうとしたが、赤い小さな魔方陣が浮かび上がってそれを許さなかった。今のこの模様は、その時のそれに良く似ている。紙に関わる魔法なのかもしれない。

と。俺の手の中で、札がより一層強く大きく輝いた直後。札の中から、一人の男性の声が聞こえてきた。何故だかやけに焦っている様子だ。

『 第2班よりヴェリア団長へ！ 第2班よりヴェリア団長へ！
緊急事態です！ 』

その音量はやたら大きく、廊下でじゃれ合っていたシエリアとヴェリアの耳にまで届いてしまった様で。二人も動きを止めてこちらに耳を傾けているのが、雰囲気を感じ取ることが出来た。

『 ホテル周辺に残されていた、雷泥の付着した複数の足跡を追跡した結果……アンデロッド大樹海南東部へと続いておりました！
そこで我々も森に入ろうとした所 』

今気が付いたが。男の背後では、凄まじい怒声や悲鳴が絶え間なく上がり続けている。異様な空気だ。一体何が起きているのか。

『 数百年に一度しか現れないと言われている魔物……“怨嗟の傀儡”バジエムが、出現しまし、ぐっ、が、がああああああ！
！
ー

いつの間にか俺の隣に立っていたシエリアとヴェリア。二人の表情が、凍り付いていた……。

途切れた音声。光を失った札。訪れる不快な沈黙。今のは一体何だったのだろう。尋常でない事態が起こっているのは明らかだった。

「……ブリユード・エクスマギナ」

ヴェリアが神妙な面持ちで俺に向き直る。先程までのおちやらかた雰囲気も、威圧する眼光も、今は全く感じられない。

「その引き出しの上から2番目に、肉体治療薬が入っている。それを自分とアイナ・セブンスフォー스에飲ませたら、今すぐ此処から逃げなさい。もはやクロードンは……安全ではない」

「……何のつもりだ？」

「いいから早くしなさい。最初からお前達が事件に関与していないのは分かっていたわ。暇潰しに拘束させてもらったけれど。こうなつた以上、もうお前達を甚振って遊んでる暇はないの」

「っ……！」

俺は殴りかかるうとする己の体を必死で押さえ付けた。此処でヴェリアに戦いを挑めば今までの苦労が全て水の泡になってしまう。俺が我慢するだけでアイナを救ってやれるのなら……安いもんだ。

怒りの矛先を傍らのデスクに向ける。黒い魔力を纏った右足でそれを蹴飛ばすと、轟音と共にコンクリートの壁に深く減り込んだ。ヴェリアは何も文句を言っ来ない。興味がないからだろう。

「姉様！ バジエムを討伐するなら、私も連れて行ってください！」

今までに見た事もない必死な表情を浮かべ、シエリアはヴェリアに詰め寄っていた。

「最初からそのつもりよシエリア。流石に今回ばかりは私一人では到底対処できない。場合によっては本国の正規騎士団にも増援を要求しなければならぬかもしれないわ。……それまでにクロードンが残っていれば、の話だけれど」

「……何なんだ、その“怨嗟の傀儡”バジエムってのは。そんなにヤバイ魔物なのか？」

俺は背を向けたまま、静かに問う。俺がまるで歯が立たなかったヴェリアと、俺より何倍も強いシエリアが、二人揃ってそんな弱気な態度を取っているのが、信じられなかった。

「……“怨嗟の傀儡”バジエムは、“世界六大忌獣”が一柱です。アンデロッド大樹海が別名“怨嗟の森”と呼ばれているのは、前にもお話ししましたよね？」

確かにシエリアがそんなことを言っていた気がする。あまりよく覚えてはいないが。俺はとりあえず頷いてみせる。

「その別名の由来となっているのが……このバジエムなのです。アンデロッド大樹海は元々、一度入れば二度と光の世界には戻れないと言われていた程に、まるで暗黒迷宮の様な様相を呈しています。故にそこに迷い込んでしまった人や魔物の靈魂は、行き場を失って永遠に彷徨い続けてしまうのだとか。それらが発する怨嗟の念が長い時間を掛けて沈殿していき、恐ろしい魔物と化した姿が “怨嗟の傀儡”バジエムなのだ、そう言い伝えられています」

「……古書の伝記によると、前回出現したのは800年前とされているわ。その当時は複数の国が壊滅する程の被害が生まれたそうよ。当然今と昔では魔法の形態も国の戦力もまるで違うけれど……見るに耐えない酷い戦いになることは、覚悟しなければならぬわね」

俺は二人の話を聞き、呆然と立ち尽くすことしか出来なかった。800年も前に大暴れした魔物が、今俺達が生きるこの時この瞬間この時代に何故突然現れたというんだ。運が悪すぎる。天災と言っても過言ではない。

今となつては継承者がいなくなり、闇に葬られた超絶なまでの威力を持つ“エンシェント・スベル古代魔法”も、その頃は実在していたはず。それらを用いたにも関わらず、国が幾つも滅亡したと……そう言いたいのか？

俺は事態の深刻さを今頃になって理解した。全身を悪寒が駆け抜ける。そんな規格外な魔物が今、此処からすぐの場所にあるアンデロッド大樹海に、実際に居るだなんて。

「とにかく今は少しでも奴の足止めをしなければならぬ。本国に早馬を飛ばしても最低二日は掛かるわ。それまでにどうにかこのクローデンを守り抜かなければ……」

「喋っている時間も惜しいです、姉様。もう私の心の準備は出来ています。連れて行ってください」

「……分かったわ。医療班に魔力回復薬を準備させる。貴方はまずそれを服用してから前線に立ちなさい。障壁も無しの丸腰で対峙したら 間違いなく死ぬわよ」

「分かりました」

木偶の坊と化した俺を他所に、二人はどんどん話を進めていた。バジエム相手に戦いを挑もうというのだ。確かに誰かが足止めをしなければ、被害は拡大する一方かもしれない。けど、だからといって、その役目をシエリアが負わなければならぬ義務なんてあるのか？

もしかしたら、死ぬかもしれないんだぞ……。

「シエリア、どうしても行くのか……？」

今の俺はどうしようもなく情けない表情をしているのだろう。それはそうだ。俺はまだガキなんだから。身近な人間が死ぬ場面に直面したことなくって一度も無い。だからこそ嫌なんだ。シエリアが死ぬのなんて、想像したくもない。

「ブリユードさん……」

シエリアは静かに俺の目の前に立ち、優しく微笑み掛けてくれた。その顔はとても綺麗で美しい。

「誰かがやらなければならぬ仕事、なんですよ。貴方もそれに憧れていたのではないですか？ か弱い国民を護る為、自らを犠牲にしても敵に立ち向かう。それが騎士団です。私はただの用心棒ですけど」

「っ！？」

そうだ……。今更になって思い知らされる。力を持たない一般人を魔物から護るといふことは、まさにこういふことなのだ。到底敵わない敵が相手であったとしても、全力で立ち向かう。その過程で仲間が死ぬことも当然あるだろう。俺はそのことを分かっていただけなのか？ いや、何も分かってはいなかった。ただ一人のガキが格好付けて大口を叩いていただけなのだ。学院長はそれを理解していたからこそ、始め俺に農夫になったらどうかと、提案してきたのだろう。

「私達姉妹は元々……“過去に起こったある事件”が切っ掛けで、この道を選びました。ブリユードさんのように純粹に、皆を護りたいとか、そういう気持ちがあった訳ではないんです。その目的はとも褒められたものじゃない……“私的な復讐”が、その頃の私達

の全てでした」

シエリアが静かに語り出す。その様子を、ヴェリアは傍らで黙って見詰めていた。

「私達の村を消滅させた人間の組織　名前も知らないそのギルドを、私達はあれから10年経った今もずっと追っているのです。やり方は各々違いますけれど。私には国民を護りたいという正義感なんてない。ただ自分の復讐の為、そいつらを見つけ出す為、世界中の悪党を殺して回っていました。今回の件も例外ではありません。結果的にブリュードさんを騙す様な形になってしまっていたのは、本当に申し訳なく思います」

俺に向かって、深々と頭を下げるシエリア。それを咎められる人物なんて、きつと何処にも居はしないだろう。10年程前に世界最大と言われていたエルフの集落が、何者かの襲撃を受けて凄惨なまでに壊滅したという出来事は、幼かった俺の耳にも届いていた記憶がある。それほどまでに世界を震撼させた重大な事件だったのだろうと、容易に推測できた。

故にシエリアは、国の用心棒という隠れ蓑を使って、ずっと奴らの手掛かりを追ってきたのだろう。彼女の真の目的をようやく理解することが出来た気がした。そしてヴェリアが何故、これ程までに人間を嫌っているのかも。

「そんな私達ですが、それでも職務を放棄する訳には行かないのです。これが私達の選んだ道ですから。死んだらその程度の力しか無かったのだと、潔く諦める覚悟も出ています。だから　ブリュードさん」

シエリアが俺の手をぎゅっと握り締めてきた。暖かくすべすべとして張りのある……綺麗な女の子の手だ。この手が今までどれ程の苦勞を体験してきたのかなんて、想像することも出来ない。

「短い間ではありましたが　こんな私に今まで付き合っただけで、本当にありがとうございました。人間さんと行動を共にしたのは初めてでしたが……やはりあのスラム通りで貴方を助けたのは正解でした。実は私も子供の頃、同じような目に遭ったことがあるので……どうしても放っておく事が出来なかつたのです」

「シエリア、もう時間よ」

ヴェリアの足元に円形の魔方陣が展開される。同様の物が、シエリアの足元にも。限られた範囲内を移動できる、転移魔法陣か何かだろう。

「はい」。最後にブリュードさん、これだけは言わせて下さい」

緑色の光がシエリアの全身を包み込む。その姿が徐々に希薄になつて行つた。それでも俺の両手を離そうとはしない。ずっとずっと、握り締めたままだった。

「　私は貴方のことを、愛していました　」

再びの静寂に包まれた、血塗れの看守室。既に外は明るみを帯びて来ている。夜明けが近いのだろう。

先程までシエリアが立っていた場所に、俺は無言で立ち尽くしていた。どれくらいの時間そうしていたのかは分からない。ただ

俺の手に零れ落ちてきたシエリアの涙と、シエリアの手の温もりと、シエリアの最後の表情を、忘れることは出来なかった……。

<優等生は黒の魔術師　　第一章　奴隷商人編　　了>

ep・i 二人の甘い再会（前書き）

いよいよ第2章突入です！ “闇ギルド”ビルフォンのギルドマスターや、最凶の魔物バジエム、そして未だ正体不明の吸血鬼が遂に登場します！ 今までより更にパワーアップした内容でお送りしますので、どうぞお楽しみ下さい。ちなみに今回のep・iはちよっぴりえっちな内容を含んでおりますので、苦手な方はご注意下さい。

e p . 1 二人の甘い再会

薄暗い牢獄の中には、数多くの囚人達が収容されていた。皆一様に鋭利な刃物で切り刻まれたかのような傷を負っている。恐らくヴェリアの仕業だろうな。酷いもんだ。

そいつらは檻の外に居る俺と目が合っても、別段助けを求めてくるようなことはなかった。此処から出せ！とか騒ぎ立てられるんじゃないかと思っていた俺にとっては、少し拍子抜けだった。

「何処に居るんだ、アイナ……」

ボロ布を纏ったいかにも、という囚人は何人も居るのに、肝心のアイナが見付からない。見落す訳にはいかないのに、端から虱潰しに全ての檻を見て回る。だが、居ない。

俺は若干の焦りを感じ始めていた。此処にも居ない、そっちにも、あっちにも……。脳裏に最悪の結果が浮かび上がる。次が最後の檻だ。もし此処に居なかったら、もう。

俺は恐る恐る歩を進める。丁度窓から明朝の眩しい日差しが差し込んできた。それがゆっくりと牢の中の人物を照らし出す。ぼやけていた影がはっきりとした形となり、そうして……

「あつ………！」

懐かしいアイナの姿を、形作っていた。間違いない。この綺麗な黒髪は、まさしくアイナだ。俺は感動で思わず瞳が潤んでしまった。やっつと、やっつと、見つけた……！

どうやら他の囚人同様、ヴェリアによる攻撃を受けたみたいではあるが、命に別状は無さそうだ。今は眠っているのか、微かな寝息を立てて肺が上下しているのが見て取れる。よかった、本当によかつ

た。

「アイナ、アイナ!!」

俺は鉄格子を揺らしてアイナに呼び掛ける。

「ん、んう……」

するとゆっくりとした動作で、アイナがむくつと起き上がった。しかしまだ瞳は閉じている。完全に覚醒してはいないようだ。覚束ない動作で両手を上げ、目をごしごしと擦る。まるで小動物みたいで可愛い。

「待ってる、今開けてやるからな……!」

俺は逸る気持ちを抑えながら、ポケットを漁る。先程看守室を物色した際、肉體治療薬と共に牢屋の鍵も見つけておいたのだ。錆び付いた鍵穴に鍵を無理矢理押し込み、力任せに捻る。相当硬かったが、全身の力を込めると、甲高い音を立ててようやく檻が開いた。

「アイナあああああ!!」

俺は我慢できず、アイナに抱き着いてしまった。ボロボロのメイド服から垣間見える素肌が、とても気持ち良い。その柔らかな肢体は、俺に女の子を意識させるには充分すぎる代物だった。

「ふえ!? な、なんですか!？」

寝ぼけ眼だったアイナは、突然の出来事に身を飛び上がらせて驚いていた。そりゃそうだろうな。俺だって朝起きてすぐにこんなことされたらビックリするさ。でも今だけは許してくれ。この再会の嬉しさを抑え切れないんだ。

「ごめんなあ。遅くなって、ごめんなあ……!」

俺はアイナの肩に顔を埋め、柄にも無く涙を流していた。背中に戻した腕にも力が込められる。こんなにも止め処なく涙を流すのは、

生まれて初めてかもしれない。シエルと別れの挨拶をした時でさえ、こんなに号泣したりはしなかった。

「ブリュード……さま……？」

そんな俺の耳元で、感動と驚愕が入り混じったかのような声を上げるアイナ。久しぶりに聞く彼女の声が、堪らなく愛おしい。

「ああ、俺だ！ 迎えに来たぞ……！」

「そんな……。う、ああ……。あっあっ……！」

俺の背中にもアイナの両腕が回される。生暖かいぬめつとした血の感触がしたが、不快感なんて全くない。俺は更にアイナの体を強く抱き締めてやる。もう二度と、離れないように。強く、強く。

「夢じゃ、ないですよ……？ 本当に、ブリュード様なんですか？！？」

「当たり前だろうっ！？ この温もりが、夢だと思っのか？」

「いえ……いえ！ 思わないです。思えないです……！ 良かった、良かった！ 私、一人ぼっちで寂しくて、ブリュード様、があ……！」

整った顔をくしゃくしゃにして泣きじゃくるアイナ。俺は小さな子供をあやす様に、優しく頭を撫でてやった。彼女の両手足は、長く伸びた鎖で拘束されている。動く度にじゃらじゃらと音を立てる。それらは、アイナにはとてもじゃないが似つかないものだった。

「よしよし……。今、鎖を取ってやるからな」

俺は先程と同じ様に鍵を捻じ込み、勢い良く回転させる。思ったよりも簡単に外れた。錠によって圧迫されていた所為で、アイナのか細い両手足にくつきりと赤い跡が着いてしまっている。可哀想に。

「あ、ありがとうございます……痛っ！」

「大丈夫か！？」

急にアイナが表情を歪めて倒れこんでしまった。俺は床に顔面を強く打ってしまわない様に懸命に支えてやる。

「いたた……さっきまでは寝惚けていたので、あまり感じなかったのですが……。徐々に意識が明確になるにつれて、ヴェリアさんから受けた傷が……」

痛んで当然だろう。全身を切り刻まれているのだから。見ているだけで痛々しい。まあ、ついさっきまでは俺も同じ様な状態だった訳だが。

「そうだよな。気付くのが遅れて悪い。これを飲めば、すぐに良くなるはずだ」

俺は胸ポケットに入れていた肉体治療薬を取り出す。見た目は小さなビンに入ったただの青い液体だ。しかも極少量であるが、効果は抜群である事は俺自身の体で実証済みである。早速蓋を開けて、アイナの口元へと運んでやった。

「あ、ありがとうございま……あっ！」

それを受け取るうとしたアイナが、手を滑らせてビンを落としそうになる。

「うお!?!」

俺は慌てて掌を握り締めた。間一髪。どうにか指と指の間に納まってくれた。危ない危ない。もう予備はないのだ。俺は思わず安堵の溜め息を吐く。

「ふう……。無理はするなって。俺が飲ませてやるから」

「い、いえ！ そんな、申し訳ないです。それに、零してしまうかもしれない……」

確かに。それは一理ある。ビンの口の部分が結構デカいから、上手く飲ませてやれずに床に垂れてしまう可能性はあるな。結構高価な物だろうから、一滴たりとも無駄にするのは良くない。さてどうしたもんか……。

「ん〜……」
額に指を当てて熟考する俺。その様子をアイナが大きな瞳で上目遣いに見てくる。くっそそれにしても可愛いな。少し悪戯してやりたくなった。

「なら、口移しで飲ませてやろうか？」

「ええっ!？」

冗談っぽく軽く言ってみる。勿論本意ではない。最近ずっと緊張する場面ばかりに晒されていたから、歳の近いアイナが相手だと遊びでこういうことも言いたくなってしまっただ。

「えとえとえと、そのお……!」

アイナは顔を真っ赤にしてうるたえている。その内湯気とか出そうなくらいだ。

「ははっ! 悪い悪い、冗談だつて。俺と口移しというか、キスするのなんて、嫌に決まってるよな」

「い、嫌じゃないですう!」

「ほらな嫌じゃないつて……、ええ!？」

看守室からストローでも探して来ようかと思っていた俺は、盛大にずっこけてしまった。あまりにも予想外すぎる返答に、呆気に取られてしまう。いやいやいや、そんな馬鹿な。アイナもお返しに俺をからかっているのか？

そう思い、アイナの顔を見詰める。その表情は、正に真剣そのものだった。上気した頬と妙に潤んだ瞳が、やけに色っぽい。

「な、なななななな!」

悪戯してやろうと思っただけで仕掛けたのは俺の方だというのに。何だこ

のザマは。完全に返り討ちにあってるじゃないか。情けない。というか、きつと俺の顔も真っ赤になっているのだろう。体が焼けるように熱い。

「……して、くれるんですよね？ 口移し……」

まるでせがむように俺の方に詰め寄ってくる。やめてくれ冗談はよしてくれ。恥ずかしくて顔を直視できない。というか、アイナさんよ。本気で言っているのか？

「い、いや、その……」

「そんな……嘘だったんですか？ 酷い……」

あからさまに落胆の表情を浮かべて目を伏せるアイナさん。何でこんな状況になっているんだ？ 俺が悪いのか？ なあ、誰か教えてくれ！

「いつつ！」

「あっ！」

そうしている内にも、また傷が痛み出したのか、お腹の辺りを抱えて蹲るアイナ。もう彼女が苦しむ様なんて見ていられない。とりあえず早く薬を飲ませてあげなければ！

「ええい、ままよ！！」

俺は覚悟を決めると、肉体治療薬を口一杯に頬張った。これくらいの量ならば一口で充分だ。そのままアイナの両頬に手を添える。

「きゃっ!?!」

頼むからそんな可愛らしい悲鳴を上げないでくれ。潤んだ瞳が俺を見詰めてくる。いいのか？ 本当がいいのか？ ブリユード・エクスマガナ！ いやだが、止めるにしてももう口に入れちまつたし……。

「んっ……」
不意にアイナが、静かに目を閉じた。これってつまり、そういうことだよな……？ いいん、だよな。いいか？ 俺は決して如何わしいことをしてるんじゃないんだ。アイナが一人じゃ薬を飲めないから、仕方なく、こうするだけなんだ！

訳の分からない言い訳を頭の中で連呼する。誰に咎められるという訳でもないのに。というか、女の子に此処までさせておいて、怖気づくのは男としてどうなんだ、俺。いいじゃないか、やっと再会できたんだから。その喜びを込める意味でも……。

アイナのぷるっとした唇に、ゆっくりと自分の唇を近づけていく。心臓の鼓動が速過ぎて痛いくらいに感じた。アイナの感触が、アイナの匂いが、アイナの温もりが、俺の脳みそを蕩けさせて行く。

「んっ………！」
唇と唇が触れ合った瞬間、俺は瞼を閉じた。誰に教わった訳でもないが、こうするのが作法というものだろう。

「んっ………」
アイナが小さく声を上げる。俺はそのまま微かに口を開け、薬をアイナの口内へと流し込んでやった。ゆっくり、少しずつ、俺の口からアイナの口へと液体が移動していく。今まで味わったこともない快感の波が、俺に襲い掛かってきた。柔らかい唇の感触。熱い吐息。頭がおかしくなってしまうそうだ。

アイナが俺の唾液と交じり合った薬を嚥下していくのを感じる度、胸の鼓動がより一層速くなる。やばいな、これ。本当にやっちゃまった。アイナと、キスを……。

アイナが俺に腕を回して抱き付いて来た。ふくよかな胸が惜しみなく押し付けられる。正直言つて、物凄く気持ち良い。俺もそれに応じて、アイナの体をしっかりと抱き締めてやった。

「あむう……………」

もうとつくに薬は飲み終えたというのに、アイナは唇を離そうとしないでくれない。幸せそうな声を上げ、俺の唾液を求めて舌を入れてくる。これに抗うことなんて、出来るはずがない。キスがこんなに気持ちの良いものだなんて、知らなかった。相手がアイナだから、尚更そう感じるのかもしれない。

俺は……………こんな幸せを感じていて、いいのか？ 今頃シエリアは、きつと。

e p . 2 彼の思い

穏やかな風にその身を揺らす、巨大な樹木達。一本一本が最低でも30メートル程の樹高を有している彼らが集い、アンデロッド大樹海は形成されている。その壮絶なまでの日光争奪戦を勝ち抜く為、私の身長程もある一枚一枚の葉達が、他を退けようと必死に上へ上へと向かって成長を続けていた。

「此処にいと……何だか故郷を思い出します」

私は両手を広げ、森によって作り出された新鮮な空気を、肺一杯に吸い込んだ。クローデンの薄汚れたそれとはまるで違う。体が浄化されていくかの様な清々しさを肌で感じ取ることが出来た。懐かしい匂いと懐かしい味。嬉しさで小躍りでもし始めてしまいそうだ。

「……そうね」

傍らに佇む姉様は、森のずっとずっと奥の方に目を向けていた。その瞳に何を映しているのか、私には分からない。

アンデロッド大樹海は、昼夜を問わず暗闇に包まれている。お日様の光は全て樹木によって遮られてしまうからだ。故に明朝だということにも拘らず、私達は松明を片手に探索を続けていた。

照らせる範囲は良くても半径5メートル程度が限界な為、殆ど周囲の景色は見えていない。この視界の中でバジエムに襲われたりしたら……。想像したくもない。

「何か、いるのですか？」

その場に立ち止まったまま動かなくなってしまった姉様。私は一抹の不安を覚え、静かに問いかける。

「……別に」

とんでもなく素っ気無い返事が返ってきた。一体何を考えているのだろう。私は周囲に気を配ってみるも、やはり魔物や人間の気配は感じられない。

私達がアンデロッド大樹海南東部に到着した時。そこには、連絡を寄越した兵士達も、“怨嗟の傀儡”バジエムも、森を徘徊する獰猛な魔物たちも、奴隷商人たちも、誰も何も居なかった。あったのは不気味な静けさと、暗黒に包まれた広大な森だけ。すぐさま気配察知で周囲を探ってみたが、魔物はおるか生物の気配すら感じられなかった。私はそんな奇妙な状況に驚いていたが、傍らに立っていた姉様は、

「行くわよ」

とだけ言って、さっさと歩き出してしまった。

「あ、はい」

私も余計なこととは言わず、ただ黙々と姉様の後ろを着いて行くことにした。そんなこんなで、もう一時間近くは経過してしまったのではないだろうか。未だに私達は何の手掛かりも掴めていない。

「姉様、ひよつとして怒っていますか……?」

私はどうかこの状況を打開すべく、努めて軽い口調で話しかけた。こういう重苦しい雰囲気は嫌いだ。相手が姉様ならば、尚更。この人は本当に機嫌がころころと変わるから、扱いが難しい。

「はあ……」

私の問いに、溜め息を吐く姉様。見れば分かるでしょう、とでも言いたげだ。私は一体何をしでかしてしまったのだろうか。考えてみても思い当たる節はない。さっき姉様に貰った苦い魔力回復薬はちゃんと全部飲み干したし……。

私がうーうー唸っていると、姉様が不意に右手で私の顎を持ち上げてきた。

「うひゃっ!?!」

いきなりのごとに、私は思わず変な声を上げてしまった。もしブリユードさんがこんなことをしてきたら、私はきつと顔を真っ赤にして卒倒するに違いない。

「……分からないわ」

「何がですかあ……!?!」

分からないのはこっちですよ、姉様。私は何とか姉様の手から解放されようとじたばたと抵抗するが、一向に抜け出せない。体を魔力の圧力で押さえつけられている。

「何故あんな弱い男に……しかも薄汚い人間に、貴方は惚れてしまったの? 信じられないわ。あの告白が嘘だと言っのなら、今すぐ

私に謝罪しなさい。それで許してあげるわ」

ああ……。なるほど。ようやく原因を理解した。姉様はそれで機嫌が悪かったのか。確かに、今思えば姉様の前でブリュードさんに愛している、などと言ったのは地雷だったかもしれない。でも仕方がないでしょう？ あの場面を逃したら、もう二度と言えなかったかも知れないのだから。

「むう〜、嘘だなんて口が裂けても言えませんよ。あれは私の本心です」

「ならば問うわ。ブリュード・エクスマギナと私、一体どちらの方が好きなの？」

「勿論ブリュードさんです」

「この裏切り者！！」

振り下ろされた風刃付きの手刀を、私は障壁で防いだ。防がなければ頭が真っ二つになるからだ。姉様に冗談というものは通用しない。じゃれあい程度のレベルでも、本気で殺されかねないのだ。

「どうしてしまったのシエリア！？ 少し前までは人間と行動すら共にしたこともなかったくせに！ そもそもそれが嫌で、騎士団に入団しなかったのでしょうか！？」

そう。私は姉様のように、人間と一緒に仕事をするなんて考えられなかった。一緒に居て、一緒に空気を吸うだけでも鳥肌が立つくらいに嫌だったのだ。姉様はそれを暴力という形に置き換えていたけれど、私はそんな卑劣なことはしたくない。それをしたら、私達の故郷を奪ったあいつらと、同じになってしまうから。

だから私は騎士団には属さず、用心棒という形で奴らの影を追っていた。今までずっと。一人で。それで何の問題もなかった。一人でも充分、負けることなんてなかったから。誰に頼ることもなく、孤高の存在として、ずっと生きてきたのだ。でも……。

「ようやく分かったのですよ、姉様。……いいえ、違いますね。最初から分かっていたのです。だけど、体が拒否していた。人間のの中には、良い人間もいるということを、認めるのを」
「っ……！」

彼と共に過ごした僅かな時間は、今まで体験したことがない程に、とても楽しいものだった。共に戦える仲間が居ることがあんなに心強いなんて、思いもしなかった。

「何を馬鹿なことを……！」
「馬鹿なことじゃないですよ。本当は姉様だってそう思っているはずです」

初めてスラム通りで彼を見付けた時。私は彼を助けるべきか否か、正直迷っていた。助ける理由も意味もないと、そう思ったからだ。

だけど……知らん振りをして通り過ぎようとした私は、彼の心の叫びを聞いてしまった。聞こえてしまったのだ。元々エルフは、森と共に生きる種族。凄まじいエネルギーの込められた木々と対話することだって出来る。故に私達は、相手が強い想念を抱いていれば、例え言葉に発することがなくても、それを感じ取ることが出来るのだ。

その時私が感じた彼の想いは “誰かに対する謝罪の念” だった。今にも死にそんな人間が、普通そんな気持ちを抱くだろうか？ きつと自分の命惜しさに、助けを請うだろう。それが生物ならば当然だ。だが彼は違った。自分の無力を悔やみ、涙を流し、謝罪していた。後にその相手がアイナさんと知った時……少し妬けてしまったのは秘密だ。

私は人間に賭けてみたくなった。彼ならば、私の薄汚れた人間に対する価値観を、根本から変えてくれるのではないかと。気付くと私は、魔法を発動させていた……。

「……あいつは、貴方がそこまで言う程の人物なの？」

「はい……。とても直向で、優しく、自分より他人のことを一番に考えている素敵な人です」

ホテルで襲われた時。あの“エビル・アーツ魔魂の武器”を持った男と対峙した私は、此処で果てるのではないかと本気で思っていた。水と氷では、勝ち目なんて万に一つもないからだ。会ったばかりのブリュードさんが助けに来てくれる保障も、何処にもなかったし。彼は私を見捨てて逃げることで出て出来たはずなのだ。

でも……だけど、彼は来てくれた。私を助けに。あれだけ大人数の人間に襲われて、血塗れになりながらも、必死に走って助けに来てくれた。私は嬉しさでどうにかなくなってしまいそうだった。戦闘中に

命取りとなるそんな気持ちの外へとはみ出してしまいう程に。堪らなく嬉しかったのだ。他の誰でもない人間が、ブリュードさんが、来てくれたことが。今までの一匹狼な私では、この気持ちは決して味わえなかつただろう。

「はあ……」

姉様は再び溜め息を吐き、ようやく私を解放してくれた。そして今度は両手をぎゅっと握り締め、私の目を見詰めてくる。

「貴方の気持ちはよく分かったわ。言葉だけでなく心でもワンワン訴えてきて、うるさいったらありやしない」

「えへへえ」

私はちよろつと舌を出す。流星は姉様。私の心の叫びを痛いほどに感じ取っていたみたいだ。

「本気で、ブリュード・エクスマギナが好きなのね？」

「はい〜。大好きですっ！ 姉様よりも」

「最後の一言は余計よ」

みしっ、と私の障壁が軋みを上げた。危ない危ない。一歩間違えれば風刃によつて木っ端微塵に砕かれてしまつところだった。私は更に強く障壁を張りなおす。

「この大馬鹿者め……。いいわ、なら姉様とこれだけは約束しなさい」

「何ですか〜？」

姉様の私の腕を握る力が、更に強められた。痛いですよ姉様。思わず涙が出てきてしまいます。

「生きて、あいつの所に帰りなさい」

そんなことを、言われたら……。

暗闇に閉ざされた、樹海の中で。

彷徨い続ける影が、一つ。

「お家……私の、お家い……！　ぐすつ、ひつく……！　いい加減返してよお！　バカ吸血鬼いい……！」

その小柄な肉体とは明らかに不揃いな巨大な“黒鎌”を携え、少女

は只管歩き続ける。

「ふうう、ひつくひつく……。ぐすん。うん……。？」

涙で真つ赤に腫れた彼女の瞳に映ったのは、二人のエルフの姿だった。

「あ………！」

少女は走り出す。黒のドレスをはためかせ、銀のツインテールを揺らし、背の両翼を羽ばたかせながら。

「アンタ達、今すぐ私に協力しなさい……い……い……！」

これが、ヴェリアとシェリアと、銀髪の少女との出逢いだった。

「……良かったのか？ あれだけで」

「はい。今の私に出来るのはただ、ご主人様のご冥福をお祈りすることだけです……」

「でも、屋敷に入ってちゃんと別れの挨拶をするべきだったんじゃないのか？」

「いえ、いいんです。元々お屋敷の他の使用人さん達は、身元不明の私をあまり良くは思っていないかもしれません……。ですから本当に、塀の外で黙祷出来ただけで、私は充分満足なんです。此処まで付き添って頂いてありがとうございます」

そう言い、アイナは俺に深々と頭を下げた。

あれから。朝になり、開店準備を始めていたクローデンの服飾屋を訪ねた俺とアイナ。二人とも服が血だらけになってしまっていた為、新しい物を購入しに行くことにしたのだ。忙しそうに品出しをしていた洒落た装いの女性店員は、俺達を見ると目を丸くしていた。余計な詮索はされなくなかったので、スラム通りで襲われたと説明したところ、妙に納得したような顔をして中に案内してくれ

た。

後で聞いた話だが、シェリアが昨日やらかしたスラム住民溺死事件は、もう既に街中に広まっていたらしい。

店のど真ん中で棒立ちになり、次々と派手で尚且つ高そうな服を持ってくる店員に苦笑していると、見兼ねたアイナが「自分たちで選びますので……」と助け舟を出してくれた。こういうのに慣れていなかった俺としては非常に助かる。

ファッションについては全くの無知である俺は、アイナに適当に見繕ってもらうことにした。彼女に任せておけば、失敗することはないだろう。多分。

「こんなのはどうですか？」

待つこと数分。やけに嬉しそうな表情をしたアイナが持ってきたのは、赤と黒を基調とした魔導師の装いだ。上着の裾を紐で正すようにデザインされたツーピーススーツの設計で、広い袖と派手な襟が特徴的だ。見た目は少しアレだが、動きにくそうではない。俺は素直にそれを受け取る。

「中々良さそうだな。流石はアイナだ。これにする」

「えへへえ、良かったです。それに加えて……こんなのもどうですか？」

「ん？」

そうやって俺の後ろに回りこみ、何かを羽織らせてくるアイナ。見ると、かなり大きめな漆黒の外套だった。それは俺の足元にまで及び、床すれすれの所で揺れている。

「わっ！ やっぱり似合いますよ、ブリュード様！ 素敵です」

「そうか？ こういうのを着るのは初めてなんだが」

「折角だしいいじゃないですか！ お代の方は気にしなくても大丈夫ですのよ」

「え？」

「それじゃあ私も、自分の服を探してきますね」

どういふことなのかと問う暇もなく、アイナは再び店の奥へと消えてしまった。確か彼女は、俺に最初に会った際に金を1ルビーも持っていないと言っていた筈のだが。本当に大丈夫なのだろうか。少し不安になりつつも、確かめる術もないので、仕方なくその辺の服を適当に見て回ることにした俺。

色々な形式の服があつて、正直訳が分からない。基本的には魔導師服、農夫服、商人服、一般服などのジャンルに別れており、戦闘用の鎧などの類は置かれていない。あくまで服飾店だからそういう物は扱っていないのだろう。

男向け、女向け、子供用から老人用まで、様々な物が所狭しと並んでいる。流石はクローゼン、といった所だろう。今度シエルにも見せてやりたいもんだ。きつと喜ぶに違いない。

そう言えば、あいつは今頃どうしているんだろうか。順調に属性魔法の修練を積めていれば良いのだが。結局あいつが判定試験でどういふ結果になったのか、俺は知らない。聞く暇が無かったからだ。

だが……何となく予想は出来る。多分炎なんじゃないかな。何故かというと、はつきりとした結論は未だに出していないが、魔法属性は

遺伝することが多いらしいのだ。故にあいつの親父（少し話を聞いたのだが、凄腕の炎の魔術師で、年から年中何処かで用心棒の仕事をしているらしい）の影響を受けていたとすれば、シエルも炎になる可能性が高い。

確証は全くないが、あいつの大雑把な性格的に考えればお似合いの属性だ。早く学院に帰って確かめてみたいもんだぜ。

「すみません、お待たせしました……！」

「おう、別に大丈夫だぞ」

少し息を切らして戻ってきたアイナは。出逢った当初と同じ、純白のメイド服に身を包んでいた。フリフリのスカートが女の子らしくて実に可愛い。

「もうメイドじゃないんだし……他の普通の服でも良かったんじゃないのか？」

「いえ……これが一番落ち着くんです。こつちの世界に来てからは、ずっとこれで過ごしてきましたし……」

「こつちの世界？」

「あぁっ！ い、いえ！ 何でもないんです、すみません！」

やけに慌てふためき、両手をぶんぶんと振るアイナ。こつちの世界とはどういう意味なんだろうか。他の町からクローデンに来てからは、とか……。そういうことか？ 分からない。でもまあ、別にそこまで追求するようなことでもないだろう。過去を詮索するつもりはない。

「そうか」

「はい………」

深く突っ込まれなかったことに安堵したのか、小さく溜め息を吐くアイナ。女の子は秘密が多い生き物らしい。シェリアしかり。ヴェリアしかり。学院長しかり。

「それじゃあ、ブリユードさんの分も合わせて支払い手続きをしますね」

「ああ、そのことなんだが、お前金なんて持つてるのか？」

「いえ、今は持ち合わせはないですけど……。私達使用者がクロードンでお買い物をする際は、全てお屋敷の方に請求が行くようになってるんです。それで私のお給料から引かれる仕組みになってるので、心配なさらなくても大丈夫ですよ」

「ほお……。つていやいや！ お前の給料から引かれるって、そんなの悪いだろ！ 俺の服の代金は、自分で払うから！」

「いえ、いいんです。何度も助けて頂いたせめてものお礼ですので、私に払わせてください」

「いや、でもな！」

「駄目……ですか？」

潤んだ瞳で、上目に俺を見詰めてくるアイナ。駄目だ、可愛すぎる。これは反則ではないだろうか。そんな顔して頼まれて、駄目と言える男はきつと国中を探しても早々いないだろう。いないはずだ。いないに違いない。

「うつ……！ じゃ、じゃあこれでもう貸し借りはゼロだからな？ 今後俺に助けられた恩がどうとか言ったら、怒るぞっ。分かったか？」

「はいっ！ ありがとうございます……！」

何て駄目な男なんだ、俺は……！ でも、満面の笑みを浮かべて俺に抱き着くアイナを見てみると、もうそんなのはどうでもよくなってきたりしまう自分が居た。だって可愛いんだもん。

「じゃあ、行ってきますねっ！」

スカートを翻して颯爽と駆け出して行くアイナ。ふわりと舞い上がったその中の、純白な下着が目に入り込んでしまった事は、アイナには絶対に黙っておこうと誓う俺だった。

その後、店を出た俺達は。アイナの、ご主人様に最後の挨拶をしたいという望みを叶える為、クローデンの中心街に堂々と聳えている、クルトゲイス伯爵の屋敷の外まで来ていた。案の定、入り口には厳重に武装した騎士団が何人も立っており、そう安々と入り込めそうにない。だが、アイナがどうしても言うのであれば、俺は力ずくでも奴らを蹴散らす覚悟で居た。

だが……

「ふう……」

傍らに立っていたアイナは、何も言わずに深く息を吐くと、静かに目を閉じ手を合わせた。俺もその状態で声を掛けるなどという無粋な真似はせず、アイナに習って目を閉じ黙祷を捧げる。会った事もないアイナの主人を相手に。話を聞く限りではあるが、きっとこの時代には珍しいとても良い人だったのだらうと思う。不当で淫らな扱いを受けるのが当たり前前のメイドに、此処まで慕われる主人はそうはいない。まして貴族ならば尚更だ。生きている頃に一度、会ってみたかった。

「うっ……ぐすっ……」

アイナのすすり泣く声が聞こえる。ずっと我慢して来たのだらう。溜め込んでいた想いが爆発してしまったに違いない。いきなり奴隷商人に連れ去られ、ボロボロに虐げられた挙句、街に戻ると信頼していた主は亡く、その殺人犯として捕らえられ、ついさっきまで檻の中に閉じ込められていたのだ。

10代半ばの少女が経験するには、あまりにも過酷で凄惨な現実。俺はこの子に一体何がしてあげられたらうか。否、何もしてあげられなかったらう。現に彼女は今、俺の隣で泣いている。その事実だけで、俺は自分の無力を痛感した。

「……ごめんな」

こんなことしか出来ない自分。でも、何も出来ないよりかはマシだ。こんな俺でも出来ることがあるのなら、何だっしてやる。

俺は震えるアイナの小さな体を、彼女が目を開くまでずっと抱き締め続けていた。

「本当に……ありがとうございました」

「礼なんていらさないさ。結局お前に何もしてやれなくて、ごめんな」

「そんなこと言わないで下さい！ ブリユード様があの時私を助けて下さらなかったら、きっと私はあのまま……！！」

下げていた頭をがばっと上げ、俺に縋り付いて来るアイナ。

「お前を泣かせちまったことに変わりはない。俺は女の子一人も祿に護ることの出来ない最低な男さ」

「そんな……！！」

「だからこそ！ 今度は絶対に護ると決めただ。アイナも、シエリアも、クローデンも、全部」

アイナの言葉を遮り、より強い口調で言い放つ。俺の揺るがない決意と信念を込めて。もうそろそろ限界だろう。これ以上此処に留まる訳にはいかない。時間は確実に失われていつている。

「え………？」

此処に来るまでの間、夜中あれ程街中に溢れ返っていた騎士団員達は、全員綺麗さっぱり消えていた。恐らくバジエム出現の報告を受け、アンデロッド大樹海へと出向いていったんだろう。だからこそ尋ね人である俺やアイナが街を堂々と歩いても、捕まることがなかった。俺達に構っている暇なんて無い、ということだろう。あの時のヴェリアの言葉通りだ。

「ごめんな。本当はもつと一緒に居てやりたかったけど……。俺は行かなきゃならない場所があるんだ」

「どういう……。意味ですか？」

今にも泣きそうな顔で俺を見上げるアイナ。その表情には不安が色濃く現れている。俺はそつと頭に手を乗せると、優しく撫でてやった。

「これから、物凄く危険なことが起こるかもしれない。クロードンが……。いや、このエーテルアリア王国が滅茶苦茶になるかも知れない程に危険なこと、が。俺はそれを止めに行かなきゃならないんだ。大事な仲間が、そこにいるから……」

俺は腰に差してあった“エヒル・アーツ魔魂の武器”を、そつと抜き取った。その美しい鞘を確かめるように一撫ですると、アイナの小さな両手にしっかりと握らせてやる。

「ブリユード、さま……？」

「こいつは俺の形見だ。もし危なくなったら、その刀を信じて振り翳せ。きつとお前を護る力になってくれる」

俺が彼女にしてあげられるのは、
たったこれだけだった。
。

e p . 4 銀髪の少女

「だからね、アンタらにはその協力を……ってちよつとお、真面目に話し聞いてんのお!？」

何だろう、この奇妙な生物は。私とヴェリア姉様の目の前で今、一人の小柄な少女がご立腹の様子で地団太を踏んでいる。身長は140センチ前後くらいしかないだろう。これだけの情報ならば、私もただの幼い人間の子供と認識するはず。

だが本来人間にはないはずの決定的に不可解なモノが、その少女の背中からは生えていた。

「ほんつと有り得ない！ 全く最近の奴らはあ……！」

まるで悪魔の持つそのような、漆黒の翼が、彼女の動きに応じてバサバサと羽ばたいている。実に忙しく、実に鬱陶しい。まるで犬の尻尾の様に感情に左右される代物のようだ。

彼女の特異点は、それだけではない。更に下に目を向けると、これまた悪魔の様に先端が尖った漆黒の尻尾が、腰の少し下辺りから伸びていた。力無く垂れ下がっているかと思いきや、時折力強くピンッと張ったりする為、見ていて面白い。

そして最後に。彼女の服装も明らかに可笑しな物だった。黒のゴスロリ服を身に纏い、輝く様な銀髪を黒のサテンのリボンでツイントールに結び、真っ白な素足を黒のニーソックスが覆っている。此処まで来ると、本当に訳が分からない。見た目は大きくて綺麗な碧眼を持つ童顔少女なのだが、それ以外の部分が人間離れし過ぎてい

る。

何故こんな生物が、アンデロッド大樹海に、しかも一人で居るの
だろうか。世界中を回った私は、ある程度の様々な種族についての
認識は持っているつもりだった。だが、その私の引き出しを探って
も、この容姿に該当するであろう生物はない。それは傍らで啞然と
しているヴェリア姉様も同様ならしく、さっきからこの少女の発す
る甲高い声を、ただ黙って聞いていた。

「姉様、どうしましょう……？」

私は一人で延々と喋り続けている少女に聞こえないよう、小声で姉
様に助けを求める。

「人間ではないわね、明らかに。エルフでもドワーフでもない。獣
人族の類でも……なさそうね。私にもコレをどうするべきか、判断
しかねるわ」

「まさかこれがバジエム……なんてことはありませんよね？」

「さあ？ 私だって伝記における知識があるだけで、実物を目にし
たことはないから知らないわ。だけど……もしそうなのだとしたら、
古代人は余程の雑魚だったみたいね。コレが国を壊滅させるほどの
力を持つようには到底思えないわ」

確かに。どう見ても強そうには見えない。実際、魔力の気配もまる
でしないのだ。だが、彼女の持っている巨大な黒鎌。全長2メート
ル程度はありそうなそれは、見るからに禍々しい物だ。油断は出来
ない。

「で、結局どうなのよ！？ “私のお家を陰湿最低吸血鬼から取り
戻そう 大作戦”、参加してくれるの!？」

その鎌を地面に勢い良く叩きつけ、私達を見据えてくる。彼女の話を要約すると、何やら吸血鬼に奪われた自分の家を取り返したいらしいのだが、一人ではまるで歯が立たない為に、私達に協力して欲しいと。そういうことらしい。色々突っ込み所は満載ではあるが。

「そんな意味不明な作戦、参加する義理などないわ」

姉様がずばつと切り捨てる。そんなにストレートに言って大丈夫なのだろうか？ 私は慌てて姉様の方を振り返った。

それを聞いた少女は、怒ったかのように頬を膨らませて姉様に食ってかかる。

「むむむう……！ 私が一体どれだけの間こうして森を徘徊してると思ってるのぉ！？ 400年よ、400年！ 少しは同情してくれたっていいじゃなあっていい！！」

何故かベソをかき、小さな拳を握り締めて姉様の頑強な鎧をポカポカと殴り始めた。早く止めなくては、彼女の命が危ない。手を伸ばそうとした私だったが、

「ふんっ」

「ひゃう!?!」

遅かった。姉様の障壁が渦を巻き、少女の全身を取り囲む。そのまま小規模の竜巻の様な様相を呈し、容赦の無い風刃が肉を切り刻んでいく。

「ね、姉様あ！ いくらなんでも……!!」

私の目の前で、鮮血が大地を赤く濡らし、千切れた臓器が宙を舞う

ことはなかった。

「うううう……！　なあにすんのよお！　バーカバーカ！！」

信じられない。風刃乱反射を受けた少女は、何事も無かったかのよう
に無傷でそこに立っていた。まるで姉様の魔法が通用していない
かのようだ。肉どころか、服さえも一片たりとも切れていない。

「……」

その様子を認めた姉様は、不機嫌そうに右手を掲げると、

「死ね」

指先に翡翠色の魔方陣を浮かび上がらせ、その中央部からナイフの
様な風刃を無数に少女に向けて飛ばした。本気で殺す気だ。私は思
わず息を呑む。

だが

「ああああもうつ！　鬱陶しいわね！」

またしてもそれらが、少女に通用することはなかった。障壁を張っ
ている訳でもないのに、まるで魔法が弾き飛ばされているかのよう
だ。一体どういうことなのだろうか。彼女に当たり損ねた風刃は、
傍らに立っていた大木を根元から切断している。やはり威力は申し
分ないはず。

必殺の風刃を諸共せず走り出し、銀髪の少女は姉様に向かって
黒鎌を振り被った。

「アンタなんかこうしてやるわっ……！」

「私達は忙しいの。失せなさい、雑魚が」

その斬撃を黙って受ける姉様ではない。障壁を何重にも張り巡らし、巨大な黒鎌を迎え撃つ気だ。本来ならこの時点でチエックメイトのはず。だが私は……言いし得ない不安に襲われていた。

この少女は、何かがおかしい。

一閃。黒鎌の鋭い刃が空を裂き、障壁に衝突する。だがそれが弾かれることはなく、

「っ……！？」

激しく渦巻く風刃乱反射を突き破り、強固な騎士団鎧を粉碎し、姉様の柔らかい肉体を切り裂いた。それはまさに、一瞬の出来事だった。私が止めに入る間もない。はっと我に返った瞬間にはもう、時既に遅く。初めて目にする姉様の血が、吹き上がっていた。

「姉様！？」

2年前のオックスレント王国との戦争の際、3万の敵軍隊を相手にし、無傷で帰還するという伝説を残した姉様が。非力そうな少女の放った一撃を受け、致命傷とも言える傷を負わされている。有り得ない。信じられない。私は自分の目を疑った。

「ぐっ！！」

地面に倒れこみそうになる体を、姉様は懸命に両足に力を込めて踏み止まらせていた。苦痛に歪むその顔を少女に向け、一般人なら視殺出来そうな程に冷たい眼光で睨みつける。

「何よ、雑魚はアンタの方じゃない」

「っ……！」

そんなことを言われたのも、きつと初めてだろう。激昂するのも無理はない。私が瞬きをした瞬間、姉様は消えていた。風の移動魔法を使用したのだろう。直後、一瞬の内に銀髪の少女の眼前に現れ、

「はぁ……！」

凄まじい勢いで殴りかかった。

「もう、いいでしょ？ 私は別にアンタらと喧嘩しに来た訳じゃないの……！」

連続で繰り出されるその拳を、軽々と避ける少女。何故か姉様は魔力を肉体に纏わせていない。風の魔法を使えば、攻撃速度を極限にまで高めることも可能なはず。なのに何故……？

「お、お前……！ はぁ、はぁ」

おかしい。姉様の息が上がっている。いくら傷を負わされているとはいえ、この程度の運動量であそこまでになるはずが無い。それに付随するかのように、姉様から感じるこの出来る魔力も、攻撃を受ける前とは比べ物にならないくらいに弱くなっていた。

「あんまり動かない方がいいわよ？ “アブソリッカー”に斬られたんだから」

対する少女はというと。避け続けるのが面倒になったのか、背の黒翼を羽ばたかせ、空中へと飛翔していた。松明の明かりのみに照らされたその姿は、まさに悪魔そのものに見える。不気味だ。

「くっ……！」

とうとう姉様は、枯れ葉だらけの湿った大地に膝を着いてしまった。私は慌てて駆け寄っていく。

「大丈夫ですかあゝ!?」

弱々しい呼吸。必死に肩で息をしていた。この症状は、魔力を急激に消耗した時に起こるものと酷似している。だが先程の戦闘で、そんな大魔法を姉様は使ってたのではない。

「やられたわ……アイツの持っているアレ……“エレル・アーツ魔魂の武具”よ。間違いない」

「えっ!？」

私は驚き、思わず上を見上げる。禍々しく不規則に歪んだ巨大な刀身。それを支える頑丈な漆黒の柄。所々に血をぶちまけたかのような赤い装飾がなされているそれは、確かに普通の武器であるようには見えない。

「貴方は一体……?」

いつの間にか私は、無意識の内にそう呟いていた。得体の知れない者とは、まさにこういう人物のことを言うのだろう。あの姉様が。歴代騎士団長最強とまで謳われた姉様が、こんなにもあっさりと負けてしまうなんて。

「そう言えば自己紹介がまだだったわね! お願いを聞いてもらうんだから、それくらいの礼儀は尽くすべきだったわっ」

再び羽をバタつかせ、地上に降り立つてくる少女。長く美しい銀髪が風に揺れていた。姉様は依然として敵意を剥き出しにしているが、襲い掛かれるほどの力は残っていないようだ。ちょっと安心する。

少女は嬉しそうに私の前まで駆け寄ってくると、満面の笑みでこう宣言した。

「私の名前はサティア! このアンデロッド大樹海にずっと前から住んでる、“闇の精霊”よ! ……お家は400年前にあの馬鹿女に乗っ取られたけどね……!」

「……ヤミノ、セイレイ？ 随分変わった種族さんですねえ〜。お食事は普段どんなものを？」
「甘いものが好物よ！ 特にケロンの実が大好きなのっ！ ……っで、ちがあ〜う！ ヤミノ、セイレイってアンタ馬鹿にしてんのぉ！？」
「いえいえ〜。ただ、ご冗談が上手だと思ひましてですな〜」
「むっきい〜！ アンタ等揃いも揃っていい加減にしないさいよぉ！？」

もし仮に冗談でないと云うのなら。私と姉様は、とんでもないモノに遭遇してしまったのではないだろうか。

「はは、こりやすげえ……」

視界一面に延々と広がる木、木、木……。まるで無限に続くかの様にさえ思うその光景を前に、俺は思わず言葉を失っていた。想像していたものを遥かに超えている。雄大で、不気味で、だが何故か美しいとさえ感じる。そんな光景だ。

アンデロッド大樹海、南東部入り口。俺は今、そんな場所に立っている。クローデンの無人と化した門を潜り抜け、そこから徒歩で一時間程度で辿り着くことができた。実際には魔力でブーストもしていたのだが。

「……あのヴェリアの野郎には、此処から逃げるとか言われたけど、やっぱりそんなこと、出来る訳ねえよな」

振り返ると、クローデンの巨大な防壁をうつすらと目にする事が出来た。日光に照らされたそれは、堂々と聳え立ち、今日もそこに住む住人たちを護っている。勿論、アイナもその一人だ。その人たちを護りたい。俺はやっぱり、純粋にそう思った。理屈とかそんなのは抜きで。

「逃げる訳には、いかねえんだよ……俺は」

拳をぎゅっと握り締める。シエリアに唐突に告白されたとき。俺は最初、頭が呆然となって、それについて考えるという行為を放棄してしまった。回復薬を探し出しアイナを救助するのが先決だ、と自分に言い聞かせ、考えることから逃げ出したんだ。それがどれほ

ど失礼なことだったのか、今になってようやく気が付いた。

「まだシエリアに返事、してねえしなっ！」

空を見上げると。まるで俺を後押しするかのようには、一陣の風が吹き抜けていった。その煽りを受けた大木の一枚の葉が、舞いを踊るかのようにはらひらと落ちて来る。実にゆっくり、ゆっくりとした速度で。やがて俺の足元に着地したそれは、俺の身長を軽々凌駕する程の大きさだった。

「でけえなおい」

好奇心から拾い上げてみる。眼前に掲げてみると、俺の顔はすっぱりと隠れてしまった。ちょっととした感動を覚える。

「ははあん……こりゃ面白い。持って帰ってシエルに悪戯してやりたいもんだぜ」

部屋に入った瞬間、顔面にこんな物がぶつかって来たら、きっと吃驚するだろう。アイツが大げさに騒ぎ立てる様を想像して、柄にも無く吹き出してしまった。帰る時になってもまだ覚えていたら、本当にお土産として持って帰ることにしよう。

俺は葉をそつと地面に置き、深呼吸をすると、再び歩き出した。まるで此処とは違う別世界の様にさえ思える、暗闇に閉ざされたアンデロッド大樹海の内部へと。

「さあて、さてさてさて。一体何が出てくるやら……」

「百歩譲って……いえ、百歩では全然足りませんねえ。一万歩譲って、貴方があの冷酷非道悪鬼羅刹の闇の精霊さんだと信じるとしましょ〜」

「ちよつとお！ 何で私がそんな風に言われなきゃならないのよお！！」

「その貴方でさえ、全く歯が立たない吸血鬼とは。一体どんな人物さんなのですか〜？」

「人の話聞いてないし！」

私は目の前で頬を膨らませてぶんぶん怒っている少女に、問いを投げ掛けた。自称、闇の精霊。名はサティア。そもそも神様の様な伝説的存在であり、人前には決して姿を現すことはないと言われていた精霊が、ごく一般的な名前を持っているという時点で違和感バリバリなのだが。

「シエリア、やめなさい。そんな妄言を吐く小娘を本気で相手することはしないわ」

常備していた騎士団専用の魔力回復薬を飲んだ姉様はと言うと。やはり少女……サティアちゃんに対する敵意は全然失せていないよ。うで。体の周囲に風刃を漂わせながら、ずっとサティアちゃんを睨んでいた。体の傷は先程私が魔法で治療したので、既に完治している。

「何よお、妄言じゃないもん！　ほんとだもん！　このアブソリツカーが証拠よ！！」

そう言つて、大事そうに抱えていた巨大な黒鎌を私と姉様の前に突き出してくる。見れば見るほど禍々しい。何かおぞましいオーラの様な物も感じる。

「この鎌には、1200年前の私の魔力が込められているわ。その特殊効果は、アンタも身を持って体感したはず！！」

それを聞き、姉様はふんつと鼻を鳴らす。

「馬鹿馬鹿しい。何かいかさまをしたに決まっているわ。『切り裂いた相手の魔力を吸収する』だなんて馬鹿げた“エリル・アーツ魔魂の武器”が、存在する訳が無い」

「ほら見なさい！　やっぱり吸収された自覚あるんじゃないのよ！　だからそれが貴様の武器の仕業だと、証明できはしないと云っている！」

「はあ！？　何よそれ！　いくら自分が負けたのが悔しいからって、そういう子供みたいなこと言つのはやめてくれない！？」

「こっ……子供だとお！？　貴様にだけは言われたくない！！」

あちゃ……。姉様の悪い癖が出てしまった。根っからの負けず嫌いである姉様は、絶対に自分の敗北を認めようとはしない。私と手遊びのゲームをした時もそうだった。負けると色々な難癖をつけ

てくるのだ。元々魔法戦闘では無敗伝説を保ち続けていたから、遊び以外ではそんなことにはならないと思っていたのだが……。

まるで子供のように互いを罵り合い、今にも取っ組み合いの喧嘩でも始めてしまいそうな二人。どうやら彼女達の相性は最悪のようだ。出遭ってすぐにやり合い、終わった後もこの状態とは。私は猛烈に溜め息を吐きたくなった。頭が痛い。

「そ……その声は……。ヴェリア隊長、ですか……？」

私が仲裁に入ろうとした、その時。突如として前方の茂みの中から、今にも消え入りそうな程にか細い男性の声が聞こえてきた。実に弱々しく、何処かに怪我を負っているであろうことが容易に推測できる。

「……誰だ」

「あ、ちよつとお！」

サティアちゃんの小さな頭を押し分け、そちらに目を向ける姉様。その表情は先程とはまるで違う、引き締ったものに変わっていた。

「だ、第3師団師団長……テクラです。良かった、ご無事でしたか……」

「ふむ……。妙な生物には出会ったが、身体に損傷はない。それより姿を現せ。無礼者」

感情の無い淡々とした口調、声音。姉様が騎士団の仕事をする時は、

いつもこんな感じだった。まるで部下を道具としか思っていないかのような。いや、実際そうなのかもしれない。冷たい視線がそれを物語っている。

「も、申し訳ありません……。それが、出来ないのです……」
テクラと名乗った男の人は、未だに茂みから出て来なかった。今にも泣きそうな声で姉様に謝罪している。やはり足に怪我でも負っているのではないだろうか。それなら動けないのも納得も行く……が。

そこまで来て。私はある違和感に気がついた。何故今まで気にならなかったのか、不思議なくらいだ。本来人間に必ずある筈である“それ”がない。だから声を掛けられるまで彼の存在に気付く事が出来なかったのだ。

彼には、“気配がなかった”。

騎士団の、それも師団長クラスにもなれば、それなりに武芸の心得があるはず。当然それによって相応の存在感、つまり生物としての気迫や、気配というものも増すはずだ。鍛錬によって、敵に気取られぬようそれらを押し殺すことも可能と言えば可能だが、上司である姉様を相手にして、その様な無礼な事をするべきではない。それは騎士団員ならば誰もが認識している暗黙の了解だ。なのに何故……？

「理由を述べよ」

姉様もきつとそのことには気付いているのだろう。だが、一方的に彼を責めずに先に理由を聞こうとしたのが、私にとっては意外だった。本来ならば問答無用でお仕置きするだろうに。やはりこのバジエム出現という非常事態が、そうせざるを得ない状況を作り出しているのかもしれない。

「信じて、もらえないかもしれませんが……」

「くだらぬ前置きはいい。理由を述べよ。私に同じ事を二度言わせるな」

「も、申し訳ありません……！」

私は、全身に悪寒が走り抜けるのを感じていた。何か嫌な感じがする。彼は本当に……茂みの中に、居るのだろうか……？ それを、確かめたら。確かめてしまったら。もう戻れなくなるような……そんな気がした。

「私の肉体は、バジエムに吸収されました……。今はもう、精神だけの存在となってしまうのです……。今もこうして、尖った枝に触れているというのに、痛みも何も感じる事が出来ない。声を発することは出来るのに、誰にも姿を見てもらえない！！ ああ、ああ、あああああ！！」

「っ……！！」

「な………に………？」

その瞬間。私は猛烈な吐き気に襲われ、その場に立っていられなくなった。雨水で湿った大地に膝を着く。全身が泥に塗れる。胃が持ち上がり、内容物を吐き出しそうになる。気持ちが悪い。世界が回っている。森が明滅を繰り返している。脳が焼けるように熱い。全身の血管が浮かび上がっている。筋肉がはち切れそうになる。

「くっ、あああああ……！」

私の隣で、姉様も同じ状態に陥っていた。目を見開き、大口を開け、吐瀉物を吐き出し続けている。酷い顔だ。私もあぁなっているのだろうか。それよりどうしてこうなった。思考が安定しない。何を考えればいいのか分からない。此処はどこだったか。私は何をしにこんなところへ来たのか。ブリュードさんは何処にいる。彼と一緒にいたい。何故彼がいない。彼を隠したのは誰だ。出て来い。殺してやるぞ。ああ憎い。憎い。憎いにくいニクイ憎い……！

「ヴェリア隊長はズルいなあ……。そんな綺麗な肉体を持っていて……。俺に下さいよ、それ。じゃなきゃ俺、憎くて憎くて、もう……！」

「ああ、こんな所に居たんですか、隊長。酷いなあ……。俺達下っ端はこんな目にあっただっていうのに、貴方はどうしてピンピンしてるんですか……。憎い、憎いですよ……！」

「やっと来たんですね、ヴェリア隊長……。俺なんか、見て下さいよほら……。心臓を抉られたんですよ。なのにどうして隊長は怪我一つ負ってないんですか？ ねえ？ 憎いなあ……！」

「隊長、たいちょう。ヴェリア隊長。タイチヨウ。あははははは。こんな所に。どうしてそんな……憎いなあ隊長。遅いですよ。俺達はあるに必死で……たいちょうはどうして。どうしてですか何故……助けてくれなかったんですかああああああ！？」

うるさい。黙れ。何だお前達は。お前達の声が鼓膜を震わす度に、私の意識はどんどんおかしくなっていく。自分が自分で無くなってしまうような、そんな感覚だ。人が憎い。平然と生きている人間が憎い。ブリュードさんが憎い。違う。彼は憎くなんか無い。ブリュードさんが憎い。違う。私にそんなことを言わせるな。ブリュードが捨ててない！ きっともう会えない。そんな訳……！ 私が死んでもアイナさんがいる。アイナさんと結ばれるに違いない。私のことなんか忘れて。私がクロードンを護るために戦ったのも忘れて。そんなことは！ アイナが憎い。ブリュードさんを奪ったアイナが憎い。憎く……ない。本当に？ ブリュードさんを取られたのに？ アイナが奪った。ブリュードさんを。奪った奪った奪った。ちが……う……！

「あああああもうっ！！ 鬱陶しいわ！！ 消えなさい、傀儡どもおおおおおお！！」

ワタシノ眼前デ、サティアチャング、黒鎌ヲ振ルツテイタ。
。

暗い。暗すぎる。何も見えない。マジで失敗した。シエリアから散々忠告を受けていたというのに。

「まさか内部が本当にこんなことになってるとはな……うおっ！」

大木の根っこに足を取られ、躓いてしまう俺。何とも格好悪い姿だ。顔を強打しないよう反射的に地面に着いた両手が、泥に塗れる。雨が降っても陽光が差し込まない為、地面に吸収された水分が全く乾かないのだ。

「あぁっ！ くそっ！」

手探りで周囲に手ごろな葉っぱが生えていないか探す。幸いにもすぐ近くにあった。俺はそれを躊躇なく引き切り、汚れた手を拭く。流石にアイナに選んでもらった新品の魔道服で拭けばいいという考えには到らなかった。

「これじゃあバジエムどころじゃねえな……。森から生きて出られるのかどうかすら、怪しくなってきたぞ」

転んだ衝撃で肩から外れ地面に落ちてしまったリュックサックを、泥を払いながら拾い上げる。八方塞とはまさにこのことだった。耳を澄ましても、不気味な昆虫の鳴き声や、風で揺れる草木の物音しか聞こえてこない。太陽は勿論見えない為、方角を知る術もない。通った道に目印を付けようにも、その目印すら暗くて見えず、どうしようもない。俺は途方に暮れ、先程躓いた大木の根に思わず腰を

下ろしてしまった。

「はは、何やってんだろうなあ俺……。アイナに皆を護るだとか力ツコつけた事言ったくせに、森に入った途端すぐに遭難するなんてなあ……。阿呆にも程がある」

自嘲したくもなる。こんな情けない事態に陥るだなんて。ヴェリアはこうなることも見透かした上で、俺に逃げろと言っただろうか。今更それを考えたところで、もう遅いか。

「はあ〜……」

頭を抱えて、深い溜め息を吐く。今までの人生で学院の近くの小さな森に入ったことは何度かあったが、特に迷うことなどなかった。だから今回も大丈夫だろうと、俺はまた油断していたんだ。その結果がこれだけ。自分が未熟すぎて笑えてくる。スラム通りであれ程痛い目に遭ったつてのに、まだ懲りていないようだ。

「シエリアとヴェリアは、一体何処に居るのかねえ。つーか、あいつ等二人じゃなくても、誰でもいい。あんだけ沢山居た騎士団の野郎共は、何処に消えたんだよ。いくら何でも誰にも会えないだなんておかしくないか？」

昨日の夜、俺達を追い回していた騎士団の連中が、ほぼ全員アンデロッド大樹海へと向かったのは確かだ。クローデンの住民達がそういう話をしているのを、来る途中耳にしたから。ならば当然、バジエムを発見・討伐する為に森中を風潰しに動き回っているはず。なのに何故、奴等の姿どころか、足音さえ耳にすることが出来ないのだろうか。

「まさか既に全員バジエムに殺された……とか。いや、いくら何でもそれはないか。もしそうだとしたら、死体が転がっているはず……。死体なら目に見えなくても、腐敗臭で気付くはずだよな」

今まで歩いてきた道に、その様な刺激臭を感じることはなかった。ならば生きてままバジエムに丸呑みにされた、という可能性もあるが……。それならそれでまた不可解な点が挙がる。人間を丸呑みできる程に巨大な身体を持つていたのであれば、当然移動をする度にそれなりの地響きが発生するはず。ましてや、此処は森の中だ。騒々しく木々を薙ぎ倒しながら進むことも考えられる。だが、それらしき音はまるで聞こえてこない。

「あーくっそわかんねえ！　そもそもバジエムって一体何なんだ！　俺は考えの纏まらない自分に苛々し、頭をグシャグシャと掻きまわした。あの時シエリアは確か、人や魔物の靈魂の怨念が沈殿していき、それが魔物と化した姿がバジエムなのだと、そう言っていた。ならば奴の身体を構成する物質は肉体ではなく、精神エネルギーだということなのか？　もしそうだと仮定するならば、奴は実体を持たない可能性が高い。それならば足音を立てずに移動することも可能だろうが、人間を丸呑みにするだなんて物理的行動は取れないはず。あの完全魔法同位体のおっさんが、攻撃をする際に一度身体を魔力の塊から普通の肉体に戻していたのと、同じ理屈だ。

「いや、待てよ……。もしそうだとするならば、バジエムの攻撃方法は何か？　実体を持たない身体で魔法を発動させることが出来るのか？　いやいやいや。いくらなんでもそれは無理だ。肉体と精神の調和がない限り、魔法を発動させることは出来ない。それは魔法理論の1ページ目に書いてあるくらい常識なことだ。ならば物理的

方法で敵を攻撃するのか？ それも無理だろう。実体がない「物理的に干渉が出来ない」のだから。ならば奴は一体どうやって……？」

分からない。考えすぎて頭がショートしてしまいそうだ。だが、これは奴を討伐する上でかなり重要な要素と成り得るだろう。そしてそれが分かれば、何故騎士団員達の姿が誰一人として見えないのかも、説明が出来るような。そんな気がした。

「あー駄目だ。わかんねえ。とりあえず一度休憩にするか……」

俺は頭をブンブンと振り、背負っていたリュックサックを再び地面に降ろした。中から水の入った水筒を取り出し、がぶ飲みにする。どうやら相当喉が渴いていたようだ。歩くのに必死で気付かなかった。

「んくっ……んくっ……ん？」

飲みながらふと視線を下に落としたとき。俺はある違和感に気が付いた。

「……なんだあ？」

リュックサックの下部の方が、ほんの微かに赤く光っている。注意して見なければ分からない程に。俺はこんな風に不自然に発光する物体を入れた覚えなんてない。

少し軽くなった水筒を脇に置くと、俺は恐る恐る中に手を突っ込んでみた。タオルや着替えや何やらが邪魔して中々奥まで辿り着けない。

「くっそ面倒だな……よっ、ほっ！」

意味のない掛け声を上げ、道を塞ぐ物を一つ一つどけていく。そうする度に、赤い光の発光度はどんどん強くなっていた。

「ふぬぬう……これかつ！ うっしやああー！」
「やつと指先に掴んだ発光体を、勢い良く上へと引き上げる。やけに軽い。一体何だ、と目を凝らしてみると。それは……」

「……学院長に貰った“紹介状”、か？」
それはまさしく。あの日学院長が適当にさらさらつと書いて俺に投げ渡してきた、吸血鬼への紹介状だった。見た目はただ紙をクシヤクシヤに折り曲げただけであるそれが、闇の中で煌々と赤く光り輝いている。手元を照らすくらいの光源としても役立ちそうなレベルだった。

「何で光ってんだよ。あの学院長の野郎、また妙な仕掛けでもしてやがったのか」
紙を裏返しにしたり、縦にしたり、横にしたり、振ってみたりするも、何も起こらない。あいつの仕出かしたことだから、単に暇だったから光るようにしたとか、そんな理由も考えられるが……。

と、その時。

『 あっ！ もしも〜しっ！ ブリュちゃん聞こえる〜っ？
「うお！？」』

突然、紙の中から嫌という程に聞き覚えのある若い女の声が響いてきた。俺は驚き、思わず紙を落としてしまいそうになる。泥に塗れさせる訳にはいかないので、慌てて両手を交互に動かし、何とか空中でキャッチした。

『魚？ なあに、魚でも食べてるの？ あははははっ 』
間違いない。このふざけた思考と人をイラッとさせる喋り方を
するのは、あの学院長しかいねえ。俺は大きく息を吸い込むと、手
にある紙に向かつて思い切り叫んだ。

「テメエまた暇潰しに何てことしてくれてんだこらああ！！ こち
とら忙しいんだよ、ああん!？」

ムカつく。マジでムカつく。人が真剣にバジエムのこと悩んでた
っていうのに。何でそんな時にあのニート学院長の玩具にされなき
やならねえんだ。今すぐこの紙千切ってやるうが。

『あつはつはつは や～～んブリュちゃん怖～～いつ！ なにな
に、女の子に振られてもしたのお？ んん？ いくら都会のクロー
デンに出たからって、開放的になるのは駄目だぞ 』

「ああああああうげええええええええ！！」

俺は暗闇の中、一人絶叫して身を悶えさせる。こいつの存在が此処
までうざく感じたのは生まれて初めてだ。目の前に居れば口にゴミ
を突っ込んででも塞ぐことは可能だが、こうして魔法を使つての間
接的会話となると、もうどうしようもない。俺はただ黙ってこいつ
の遊び相手になるしかないのだ。ちくしょう。

『うひゃひゃひゃひゃひゃ。あゝあ、やつぱりブリュちゃんを弄るのが
一番楽しいなあ 早く帰っておいでよ 』

「俺はアンタに弄られに学院に帰りはしない。それにまだ件の吸血
鬼に会えてすらいないんだから、帰る訳がない」

『あーうん。それは分かてるわよ？ 念視で見てたし。ブリュち
ゃんも凄いわよね～。どうすればそんなに厄介ごとに巻き込まれ
るんだか 』

「……は？」

念視で見えていた？ 一体どういうことだ。俺は訝しげな表情を紙に向ける。

『あれ、言ってなかったけ？ その紹介状に、念視と念話と封印の魔法を掛けといたって』

「……封印って俺が手紙を開こうとしても開けない、アレだよな？ それ以外には聞いていないぞ」

『あつれ〜そうだったけえ？ まあいいや、あはは』

あはは じゃねえよクソ学院長。俺は物凄くこの紙切れを地面に叩きつけて踏み潰したくなる衝動に駆られた。っていうか、じゃあ何だ。さらっと文字を書いて俺に投げて渡すまでのあの短時間の間に、3つも魔法を唱えたと、そう言いたいのか？ ありえねえ。俺はあの時、学院長が魔法を発動させていたことすら気付けなかった。こいつ……普段はこんなんだが、やっぱり凄いだらうか。信じがたい事案であるが。

『まあ細かいことは置いといてえ。ブリュちゃんとうとうアンデロツドで行き詰っちゃったみたいだから、こうして念話を仕掛けたって訳。どう？ 実際今困ってるんでしょ？ 私 の 師 匠、 “レクシル・マクガヴァン”にも会えず、闇ギルド“ビルフォン”の目的も知れず、“怨嗟の傀儡”バジエムの正体も分からず……』

「っ……っ！」

俺は思わず息を呑んだ。学院長の声音が、急に真剣な物へと変わったからだ。その声で指摘された内容の全てが、今まさしく俺が直面している問題である。レクシル・マクガヴァン……それが恐らく吸血鬼の名前だろう。初めて聞いた。そして、闇ギルド“ビルフォ

ン”。ホテルに滞在中、俺とシエリアに襲い掛かってきた男が、その名前を口にしていたことを、今更になって思い出した。最後に、“怨嗟の傀儡”バジエム。こいつに関しては未だにどんな魔物なのかもはっきりしていない。これら全てがどうやら学院長に筒抜けになっただけだ。恐ろしいというか、何と言おうか……。

『へへへへん、凶星ねっ』

「うるせえ。何か知ってることがあるなら、今俺に言え。全部だ」

今此処で情報を引き出さなければ、きつともう打つ手は無くなってしまうだろう。このままアンデロッドで彷徨い続け、孤独死するのはごめんだ。プライドを捨てても、学院長にすがり付いてやる。俺は焦る気持ちを殺して、ただの紙切れからの返答をじっと待った。

『ん〜そうねえ。ぶっちゃけると私、ビルフォンについてはあまり詳しく知らないんだよねえ。闇ギルドって存在自体が正規ギルドの水面下で動く闇の組織だから、情報自体漏れることがまずないし。その点自分でギルド名を名乗ったアイツは馬鹿ね。まあ馬鹿だからこそ捨て駒の特攻役として使われたんでしょうけど』

「学院長に馬鹿って言われるとか……この上ない屈辱だな」

『あつはつはつは　ブリュちゃんのば〜かば〜か　どうどう、屈辱を味わえたあ!?!』

俺は紙を握り潰す代わりに、傍らに立っていた大木を思い切り殴り飛ばした。うぜえ。マジでうぜえ。そして根っこから吹き飛ばすくらい勢いで殴ったのに、何でこの木はビクともしねえんだよ。どんだけ頑丈なんだ。俺の手の方が痛いくらいだ。

「もういい。ビルフォンはどうとでもなる。バジエムについて教えろ」

『……舐めてると怪我するわよ』

「……あ？」

いきなりなんだよ。一々声を低くするのはやめてくれないだろうか。その度にドキツとする。

『闇ギルド、舐めてると怪我するわよ。下っ端に“エヒル・アーツ魔魂の武器”持たせてるくらいなんだから。マスターは当然、さぞ強いんでしょうね。武器なんて必要としないほどに』

「……」

俺の脳裏に、シエリアの言葉が蘇った。あの時シエリアは、今の学院長と似たようなことを言っていた気がする。確かに普通に考えてみれば、あのデータらめな力を持つ“エヒル・アーツ魔魂の武器”を、マスターが持たないのはおかしいだろう。その所為で奴等にとつての敵……即ち俺達に、武器が渡ってしまったのだから。だが、そうなることまで予想した上で、それでも問題ないと思っていたのであれば……確かに、油断など絶対にはいけない相手であることに間違いない。寧ろ、舐められているのは俺達の方だ。

『さあさあ困ったわねえ。まっ、頑張りなさい。そして、ブリュウちゃん心配しているバジエムについてだけ。此処で問題で……すっ！ じゃじゃん！』

その効果音に一体何の意味があるんだ。つーかうぜえからやめろ。

『バジエムの出現周期は約1000年と言われています。にも関わらず、前回は800年前に出現したはずの彼が、200年も早い今の時代に目覚めたのは何故でしょう！？ 見事正解した場合には』

っ！ 私フェミナ・アミックスハート先生の熱烈なチューをプレゼントしちゃうぞ」

滅茶苦茶間違えなくなったのはきつと俺だけじゃないはず。例えシエルがこの立場に立っていたとしても、必ず間違えようと奮闘する筈だ。絶対。

「知るか、そんなもん」

俺は投げやりに答える。いい加減こいつとの会話も疲れてきた。祿に有益な情報も得られていないしな。

『ぶつぶぶっ！ 正解はあ、“ビルフォンのギルドマスターの所為”、でしたあー！』

「……あ？」

『おつとお！ そろそろ時間ね 残念だけど後は自分で考えてみてちょうだい！』

「待て、それは一体どういうことだ」

バジエム出現にビルフォンのマスターが関与している……？ 意味が分からない。そんなことが可能なのか？ 奴は怨嗟の塊その物のはず。出現に周期があるということは、恐らく1000年分の怨嗟が積もり積もってバジエムと化す、ということなのだろう。その周期をマスターが壊したと、そう言いたいのか？ どうやって？ 理由は？

『待つてなあ〜い もう念話用に込めておいた魔力が尽きかけてるもん。というわけでえ、最後にこれだけは言っておいてあげるわ』

一瞬の間が空く。何だ、言いたい事があるなら早くしろ。俺も今得た情報で少し考えたいことがあるんだから。

『 シェリアちゃんが死にかけてるわ。かなり危険な状態よ。あの子の元に辿り着きたいのであれば……意識を集中して、傀儡に惑わされず、彼女の魔力のみを感じ取ってみなさい。貴方なら出来るはずよ』

……は？

e p . 7 ディストセラピー（前書き）

諸事情により長らく更新が滞ってしまい大変申し訳ありませんでした。続きを待ちわびて頂いていた皆様にお詫び申し上げます。

e p . 7 デイストセラピー

シエリアの命が危ないだと？ そんな馬鹿な。学院長はアイツの強さを知らないからそんなことが言えるんだ。俺何かより精神面でも、肉体面でも、技術面でも、全てにおいて上回っているんだぞ。アイツがそこら辺の魔物ごときにやられる訳がねえんだよ。もし負ける可能性があるとしたら、それは バジエムを相手にした時以外に、考えられねえ……！

「くそつたれ！！」

俺は光を失った紹介状をポケットに捻じ込み、無我夢中で走り出した。シエリア、一体何処に居るんだ？ この暗闇に閉ざされた広大な樹海の中で、お前一人を見つけ出すことなんて出来るのか？ 無理だ、そんなの。俺にはそんな力は無い。こうして周囲の魔力を探ってみても、夥しい数の魔物の気配しか感じることが出来ないんだよ。

「はあ、はあ……うおっ!？」

いきなり眼前に現れた大木を、激突する寸前の所で回避した。こんな状況じゃあ走り回ることすら危険を伴う。だが、俺はじつとなんかしていらなかった。こうしている間にも、シエリアが敵と交戦して死に掛けているのかもしれないのだ。くそ、どうしてこんなこと……！！

「落ち着け、俺……！ 悪い癖だ。周りを見れていない。闇雲に動き回って何になる……!!」

両手で頬を引っ叩く。徐々に鈍い痛みが襲ってきた。こうでもしないと冷静になれない。深く息を吐き、同じ分だけ再び吸う。新鮮な空気だ。肺が冷やされていく。そうだ、よく考えてみる。シエリアにはヴェリアが着いているんだぞ。あの最強シスコン女がいる限り、滅多なコトは起きないはずだ。それに、あいつら二人掛かりでも敵わない敵を相手にして、俺一人で一体何が出来るというんだ？何も出来ないどころか、足手まといになる可能性すらある。だったら此処はあの二人を信じて、今は俺に出来ること、するべきことをやるべきなんじゃないのか？　こんな状況を打開できる方法があるとしたら、それは……！

「レクシル・マクガヴァン……！」

最強種・吸血鬼の女、レクシル・マクガヴァン。学院長フェミナ・アミックスハートの師匠にして、俺の新しい教師となる予定の人物。バジエムに対抗出来る存在と言ったら、もうこいつしか居ないんじゃないか？　少なくとも、俺よりは遥かに強いはずだ。シエリア救出に向かうのであれば、先にこいつと合流した方が良い……！

「つつても、何処にいるか分からないんじゃないやどうしようもねえ……！」

俺は苛立ち、巨木に拳を突き立てた。衝撃で葉が揺れ、溜まっていた雨水が一気に降り注いでくる。アイナに選んでもらった魔道服が濡れてしまった。何をやってるんだ、俺は……。

「はは、本当しようもねえ……！」

ずるずると力無く、その場に座り込んでしまう。泥に塗れようがもうどうでもいい。結局俺は何も出来はしないのか？　これじゃあ何しに此処へ来たんだか分からない。シエリアの足を引っ張りに来

たのか？ そんな訳がない。シエリアを助けに来たんだよ、俺は。アイナにあの“エヒル・アーツ魔魂の武器”を託してまで。その結果がこれかよ。有り得ない。情けなさ過ぎる。もっとよく考えてみる。どうすればいい？ 厄介なのはこの視界の暗さだ。見えなければどうしようもない。それを改善するには？ 光を点せばいい。俺にそんな魔法は……。

そこまで考えたところで、俺はハツとなった。暗いなら、明るくすればいいんじゃないか。そんな簡単なことに何故今まで気付かなかったのだろうか。そうすることの出来る魔法を……俺は既に、持っている！

「そうだよなあ……何で気付かなかったんだ」

自然と笑いが込み上げて来る。自分に対する嘲笑だ。何てこつた。本当に、単純な話だったのだ。これで今俺が抱えている悩みの7割は解決出来るだろう。後のことはどうなるうが……知ったことか。俺は俺のやりたい様にやる。

「この森全部……燃やせばいいじゃないかあ”！！」

俺は再び、あの赤髪のおっさんの魔力を呼び覚まそうとしていた。

「セシリーさん……本当にこっちに行けば、ブリュード様のお役に立つことが出来るのですか？」

「もちろん！ このアタシに任せておけば、万事解決よっ！」

「でも、こんな森の奥に一体何が……」

「それは行つてからのお楽しみ、ってね！ 大丈夫、怖い物は何もないから。万が一襲われても、アタシが障壁張ってあげるし」

「は、はぁ……」

私は言われるがままに、暗闇に閉ざされたアンデロッド大樹海の中を、只管歩き続けました。歩くと言つても、それは私の感覚的な動作であつて。実際には、人間が歩行時に出せるスピードを遥かに凌駕する速度で、私は移動しているみたいです。今も、まるで車の中から外の景色を眺めているかのように、どンドン木々が前から後ろへと流れていきます。最初はとっても吃驚しましたが、慣れてくると面白く感じるものです。

それにしても……やっぱブリュード様は凄いなあ。こんなにも珍しい刀を持っていたなんて。装備するだけで身体能力が向上するのみならず、一緒にこうしてお喋りまでしてくれる不思議な刀なんです。何だか新しいお友達が出来たみたい。

「きゃははははっ！ アタシの言葉が聞こえる人間なんて、アタタが初めてよ？ アイナ」

「え、そうなんですか！？ 私はてつきり皆とお話ができるのだと

……」

「ないないそんな訳ないってえ！ アンタ本当何者お〜？」

「わ、私はただのメイドです……」

「え〜、うつそだあ〜！ あ、魔物。しかも群れ。アイナ、

横に一振りして」

「え？ あ、はいっ！」

私には何も見えないけれど、セシリーさん（そういうお名前ならしいです）にはきつと分かるんだろう。私は言われたとおりに刀を素早く横薙ぎする。すると、見る見る内に空気中の水分が凍り付いて行き、小さな氷塊が無数に出来上がりました。それらが勢い良く四方八方に飛び散っていきます。

「うん、上出来上出来。あのブリュードとかいう白髪野郎よりよっぽど上手いわよ」

「ええ！？ そ、そんな訳ありませんよお」

「いやいやいや本だから。見てみなさいよほら」

促されて前方に目を向けると、私が放った氷塊が、堂々と聳え立っていた巨木を次々と薙ぎ倒して進んでいました。まるで紙でも打ち抜いているかのように、あんなに大きな木が何の障害にもなっていません。一方貫かれた樹木達というと、轟音と共に地面に倒れる頃には、カチンコチンに凍り付いていました。

「す、凄い……。でもこれは、セシリーさんのお力じゃあ」

「きゃはははは！ アタシは精々、物を凍らせるのと装備者の潜在能力を極限にまで引き出すことくらいしか出来ないわよっ！ 攻撃力の増減は全てアイナ、アンタ次第なの」

「そ、そんな。私に力なんてありません……っ！」

「なあに言ってるのお！ アンタちよつと謙遜しすぎよ？」

私が刀相手にあたふたしていると、突然ずっと遠くの方から魔物たちの凄まじい叫び声が聞こえてきました。きつと肉を引き千切られる激痛に呻き、呪いの断末魔を上げているのだと思います。一匹や二匹ならまだしも、それが数百匹はいるみたいです。私の鼓膜が彼等の悲鳴によって破れてしまいそうなくらいに痛みました。森全体に響き渡っているのではないかと思うくらいの大音響です。

「ま、とりあえずこれで大丈夫ね。アイナ、早く先に進みましょう？」

ココネの所へはもうすぐよ」

「……ココネ、さん？」

誰でしょうか、それは。聞き覚えの無いお名前です。私はぼかんとした表情でセシリーさん（刀身）を見ました。

「あれ、まだ言ってなかったっけ？ ココネ・ククルス。獣人族の女の子でねえ、これがまたとっても可愛いのよ！ 人間の家みたいな立派な住居に住むのが夢らしくてね、今はその為の資金集めにビルフォンっていうギルドのギルドマスターをやってるのよ」

「は、はあ……」

何故いきなりココネさんが出て来たのかはよく分かりませんが……。セシリーさんはその人と私を逢わせるつもりみたいです。

獣人族という種族が存在することは、ご主人様からお聞きしたことがあります。ですが実際に目にしたことは一度もありません。もし逢うのであれば、どんな人物なのか正直不安に思います。そもそも……そのココネさんとお会いすることによって、私はブリュード様のお役に立てるのでしょうか。折角街を抜け出してこんな危険な場所にまで来たというのに、無駄足になったのでは意味がありません。

「へへ〜ん、心配しなくても大丈夫よアイナ！ ココネと接触するのが、白髪野郎を手助けする一番の近道なの」
「ええっ!？」

まるで私の思考を読んだかのような言葉に驚いて、両手をぶんぶん振り回してしまいました。どうして分かったのでしょうか。

「きゃはははは！ なぁにを驚いてるのよ？ アンタだってアタシの思考を読んで会話をしているじゃない。アタシは音声による意思伝達の手段は持ち合わせていないのだから。そうでしょ?」

「い、言われてみれば、そうですね……」

右手に握られた美しい刀を見詰める。確かにこの刀に口があつて、そこから発せられる声によってコミュニケーションを取っている訳じゃない。何故かは分からないけれど、私はセシリーさんの意思を脳で直接感じ取ることが出来ていました。不思議と言えば、やはり不思議な感覚ではあります。これも魔法の一種なのでしょうか。

「ま、細かいことは気にしな〜い気にしな〜い。それよりそろそろ気をつけてね？ もうすぐアンデロッド名物、“底無し雷泥沼”に到着するから。流石にアタシの障壁でもアレばっかりは防ぎ切れないのよねえ。まったくレクシルのババアめ……」

「底無し雷泥沼……ですか?」

「そうよ。レクシルっていう規格外生物の馬鹿デカイ魔力を注ぎ込んで作られた、天然の結界みたいな代物なの。一步踏み込めば即感電、硬直状態になった身体は沼にずるずる引き摺り込まれて行くの。まあレクシルを狙ってくる雑魚賞金稼ぎの殆どは、これで全滅するわね」

何だか物騒な単語ばかりが並んでいて、正直よく分かりません。賞金稼ぎなんて職業が実際にあることにも驚きですが、何より底無し雷泥沼なんて怖すぎます……！

「セ、セシリーさん。そんな所に私が行っても、大丈夫なんですか？」

私はおずおずと尋ねます。行く必要がないのであれば、当然ながらそんな危険な場所には行きたくありません。こうしている間にもドンドン木々は前から後ろへと流れて行きます。いずれたどり着いてしまうのも時間の問題でしょう。

「ちよつと待って……何か変。一回止まって」
「え？ わわっ!？」

身体が私の意志に反して急制動を掛けられました。慣性によって前につんのめってしまいます。私は倒れこみそうになるのを必死で堪えました。こんな真似が出来るのはセシリーさんしかいません。一体どうしたのでしょうか。

「えてる」
「は、はい？」

何かを呟いたみたいですが、聞き取ることが出来ません。私は怪訝な表情を浮かべ、刀を見詰めます。明らかに先程までとは様子が違いました。私も雰囲気吞まれて気を引き締めます。一体何が……と。

「……！」

突然、私の鼻に何やら焦げ臭いニオイが漂って来ました。土と草

を混ぜ合わせたかのような不快な臭いが、風に乗って運ばれています。私は堪らなくなつて、手で鼻を押さえました。とてもじゃありませんが、ずっと嗅いでなんか居られません。

「何ですか、この臭い……」

私はセシリーさんに尋ねます。

「燃えているわね、アンデロッドの樹木達が。何処の馬鹿がこんなことしてかしたのかは知らないけれど……非常にマズい状況よ」「燃えてる……？ 森火事つてことですか！？」

驚き目を見張ります。こんな木々が密集した森で火事が起きたら、きつと大惨事になるはずですよ。全てを焼き尽くすまで、その業火は消えることなく燃え続けてしまうのではないのでしょうか。そうなつてしまったら、ブリユードさんは……！

「少しは落ち着きなさいよ、アイナ。森火事になるのは別にどうでもいいの。逃げれば済むんだから。それよりも更に厄介な事が……起こるのよ」

「……え？」

理解出来ません。火事よりも厄介な事なんて、この状況下にあるんでしょうか。そうこうしている内にも、私の目に届く範囲にまで白い煙が立ち込めてきました。猛烈な勢いです。視界一面が煙で覆われるのに、数秒と掛かりません。元々暗闇で視界はゼロに等しかったのですが、これで更に見えなくなつてしまいました。

「ウオオオオオオオオオオ！」

「グガアアアアアアアア！」

「ジジジジジジジジジ！」

「ひっ！？」

突然何処からとも無く、無数の凄まじい咆哮が上がりました。まるで狂ったかのような叫び声が、森全体から聞こえてきます。あまりの音量に、大気がビリビリと震えているのが分かりました。両耳を塞がずには居られません。私はすぐに立っていられなくなっ、その場に座り込んでしまいました。鼓膜が破裂してしまいました。

「な、何ですか、これえ……！」

「アンデロッドに群生する木々を燃やすとね……“ディストセラピー”っていう、魔物を凶暴化させる最悪な煙が出るの。魔法使いの間では常識的な事柄だから、アンデロッドを探索する冒険者の中でも暗黙の了解となってるんだけど……。その常識を知らないどころかの馬鹿が、禁忌をやらかしてしまったみたいね」

セシリーさんの意思と、魔物たちの大音声が、私の脳内で混濁しています。祿に話を理解する余裕ありません。私はただ言葉にならない呻き声を上げることしか出来ませんでした。

「来るわよ、アイナ。アタシが何とかするから、立って？ 大丈夫。少しの間耐え抜けば、きつと収まるはずよ。今も木々を燃やし続けている大馬鹿野郎は　レクシルが、殺しに行くはずだから」

言われるがままにフラフラと立ち上がる私の頭上を　巨大な稲妻が駆け抜けて行った様な気がした……。

「くそつ、うざつてえなあ……!!」

大群で襲い掛かってくる黒い体毛に覆われた四足歩行の魔物どもを、黒色の魔力砲で殲滅する俺。だが、いくら殺しても一向に数が減る気配は無い。それどころが、逆に増えているようにも感じられる。背後からまた、同種の魔物が鋭い牙を突き立てて飛び掛つてきた。俺はそいつを、右手に握った漆黒の魔力剣で一刀両断にする。肉を切り裂いた感触と同時に、青色の血液が降りかかって来た。気色が悪い。

「邪魔すんじゃねえよ、雑魚共が!!」

俺は間断なく迫り来る魔物達を屠っては、隙を見て赤髪のおっさんの魔力を周囲に撒き散らしていた。左手から球状の魔力の塊として放出されるそれは、林立している大木にぶち当たり、文字通り爆ぜる。その瞬間、暗黒を照らし出す灼熱の煌きがまた一つ出来上がった。

「もつと、もつとだ！ 燃え上がれ!!」

右腕で殺戮を行い、左腕で暗闇を照らす。有り得ない程に多量の魔力を消費するこの行為。だが俺は、魔力減衰による精神疲労を微塵も感じてはいなかった。寧ろこの爽快なまでの力の発散と、凄惨なまでの殺しの快感、そして焼失していくアンデロッドの光景を受け、今までにないくらいに高揚していた。

「ウオオオオオオオン!!」

「ガアアアアアアア!!」

俺の身体を取り囲むように、八つの魔方阵を浮かび上がらせる。俺の身長程もある、巨大な魔方阵だ。それらの中央部に、炎の魔力を集約させていく。紅い光が眩く光り輝いた。俺が得意とする魔力砲に、炎の魔力を付与させるのだ。これを八方位に放出することによって、火炎放射器のような出力を得ることが出来る。これでアンデロッド全域とまではいかなくても、恐らく五割程度の面積は焼失させることが可能だろう。

「燃え尽きろおおおおおおおお！！」

限界まで溜まった魔力を解き放つのは今だ。俺は当初の目的など忘れ、ただ自分の欲望を満たすためだけに、全魔力を解放する。魔方阵が紅く発光し、全てを焼き尽くす焦熱の魔力砲を発射させようとした。その時。

「やれやれ……。まさか犯人がこんなガキだったとはな。呆れて物も言えぬ」

「っ!?!」

何処からとも無く、少女の様な声が響いてきた。あまりにも唐突に投げ掛けられたその言葉に、思わず度肝を抜かれる。何故ならそれは、こんな混沌とした状況には決して似つかわしくない、可愛らしい女の子の声だったからだ。集中力が途切れ、折角溜まっていた魔力が霧散していく。俺は唇を強く噛み締めた。

「誰だ……っ!?!」

「死ね」

俺が怒りに任せて声を張り上げたのと、目の前に金髪の少女が突如現れたのは、ほぼ同時だった。俺の知覚速度を軽々凌駕する神速のスピードで、右腕のストレートが迫ってくる。駄目だ、避けきれない。

「なっ!？」

ナニガオコッタ? あまりにも突如な出来事に思考が追いついて行けない。そんな俺を嘲笑うかの様に、鳩尾に激痛が走った。小さな拳が俺の身体に減り込んでくるのが分かる。と同時に、俺の全身を凄まじい電流が襲った。

「があああああああ!」

焦げ臭い臭いが鼻を打つ。視界がチカチカと明滅を繰り返した。どうやら拳に雷の魔力が付与されていたようだ。身体が硬直して動きが一切取れなくなる。口中には大量の血が流れ込み、口の端から唾液と混じって零れ落ちていく。俺の本能が直感で告げていた。こいつはヤバイ、と。

「私は相手が例え赤子とて、容赦はせぬ。貴様はそれだけの罪を犯したのだ」

「はあ……は……ゴフッ!」

何なんだこいつは。言ってることの半分も理解出来ない。初対面でいきなり殺される筋合いなんてある筈も無いぞ。

俺は崩れ落ちそうになる身体を懸命に奮い立たせ、その場に留まらせた。霞む瞳を精一杯に見開き、相手の姿を確認する。見た目は綺麗な金髪を風に靡かせた、10歳前後の幼い少女だった。だがそれとは対照的に、普通の人間とはまるで違う、化け物の様な存在の

違和感を感じる。

その少女の右腕に、雷の魔力で作り上げられた金色の魔力剣が現れた。バチバチと音を立て、放電を繰り返している。あれで切り裂かれたら間違いないと終わりだ。最初から俺の話など聞く気もないらしい。誰かに雇われた暗殺者か何かなのか？ でなければ命を狙われる理由なんて思いつかない。とにかくどうにかしなければいけないのに、身体は痺れて全く動かなかった。駄目だ、本当にマズい。俺はこんな所で死ぬのか？ 理由も分からないまま唐突に死ぬだなんて絶対にいやだ。だが俺の意思に反して、雷剣は無情にも迫ってきている。障壁を張ろうにも間に合わない。反撃をしようにも身体は言うことを聞かない。

(何だっつてんだよ、畜生！！)

何か手は無いのかと、必死に思考を巡らせる。周囲は燃え盛る業火による火の海だ。そう簡単に逃げられはしない。先程まで鬱陶しいほどに襲い掛かって来ていた魔物どもは、何故かこの金髪の少女を前にした途端、まるで怯える様にこの場から逃げ去っていた。奴等の介入の隙を付いての反撃も不可能だろう。残る要素である怨嗟の傀儡バジエムは、未だに正体すら分かっていない。状況打開の切り札には到底成り得ないだろう。

流れる時間が急激にゆっくりになった様に感じる。だが、必殺の雷剣はもう俺の鼻先にまで届いていた。圧倒的なまでの力の差だ。文字通り成す術がない。まったく、学園を出てからというもの、どうしてこうも強い奴ばかりに出遭ってしまうのだろうか。赤髪のおっさんのときも、こんな風に、最初はどうにもならないと思って

そこまで辿り着き、俺ははっと我に返った。赤髪のおっさんが繰り出した、炎の魔力による灼熱の魔力剣。俺はそれに自分の黒色の魔力剣をぶち当てることによって、あいつの魔力を吸収した。もしアレが偶然でないとするならば、この少女の魔力も吸収することが可能なのではないだろうか？ 確証は全くない。だが今出来ることと言ったら、もうこれしかないだろう。俺の命を賭けるには些か以上は無理のある博打だが、何もせずに死ぬよりかは何倍もマシだ。幸いにも俺の右手には、先程刀身を最大限にまで延長させた漆黒の魔力剣が、落ちることなく握られている。身体は雷による硬直で痺れてしまっているが、握力を弱めることくらいならば可能だろう。俺は意を決した。

(頼む……！)

俺の肉体が切断される寸前、右手から零れ落ちた長大な魔力剣が、振るわれていた雷剣に激突した。

「ぬ……？」

金髪の少女の表情が曇る。訝しげな表情を浮かべ、目の前で起きた現象を見詰めていた。あれ程までに激しい放電を繰り返していた雷の魔力剣が、その勢いを嘘の様に失い、俺が創造した黒の魔力剣に吸収されていつている。見方によっては、まるで生きた魔力が無抵抗の剣を捕食しているかのようだ。

「や、やった……！」

俺の企みは見事、成功した。安心すると同時に、忘れていた鈍痛がどつと押し寄せてくる。さつき鳩尾をやられた時の痛みだ。しかしこれは、生きているからこそ感じられる痛みでもある。思わず顔を綻ばせていた俺の胸倉を、30センチ以上も低い身長しか持たない少女が、強引に掴んで引き寄せてきた。

「うお!？」

「貴様、何故“闇の魔力”が使える？ それは“闇の精霊サティア”の“特殊技能”^{スペシャル・スキル}の筈だ。貴様ごとき蛆虫が手にして良い力ではない」

「な、何だよ離せよ！ そもそもお前は一体何なんだ！ いきなり出て来て人を殺そうとするなんて、どうかしてるんじゃないのか!？」

「質問しているのはこちらだ屑め」

「ぐっ!？ がはっ!！」

痛めていた鳩尾に、再び雷の魔力を纏った膝蹴りを入れられた。一瞬息が詰まり、直後に大量の血が吐き出される。色白でか細い足からは想像もできない程の威力だ。

「どうやら貴様は頭が悪いようだ。自分が踏み殺される寸前の蟻同然の存在だと言う事を、まだ理解出来ていないらしい。久しく見ぬ愚かな人間よ。正体を明かして私の実験器具となるか、それとも口を嚙んだまま凄惨なる死を受け入れるか、どちらか選べ」

何なんだこいつ、本当に……! 地面にまで届きそうなほどに長い金髪を結ぶことも無く無造作に垂らし、吊り上がった大きな金色の瞳で俺を睨みつける少女。その顔はやはり幼く、140センチ程度しかない身長も相俟って、お世辞にも10歳前後といった年齢にしか見えない。着ている服装はと言うと、派手な装飾が随所に施さ

れた、白色のゴスロリ服の様なものだった。その可愛らしい容姿とは全く持って不釣り合いな殺気が、先程からずっと放ち続けられている。

「くっ……！ 正体を明かすも何も、俺はただの学生だ……！ お前に殺される筋合いなんか、ない！」

「筋合いならばあるわ馬鹿め。アンデロッドの禁を破った時点で、既に貴様は抗い様の無い十字架を背負ったのだ。暴走状態となった魔物共は、魔族と化す前に殲滅せねばならん。よりもよって怨嗟の傀儡が顕現している今、その様な穢れた魂を解き放つことが何を意味するのか、その腐敗した脳髓で考えてみる」

「アンデロッドの禁……？ 俺は何もしちゃいない！ ただ仲間を見つげ出そうとしていただけだ……！」

俺の言葉を受けた少女のこめかみが、微かに動いた。まるで心の奥底から沸き上がる言い表しようの無い怒りを、表しているかのよう。

「良かるう。やはり此処で果てるが貴様の命。サティアを問い詰めれば、何故蛆虫が闇の魔力を保持していたのかも、自ずと分かるだろう。ならばもう貴様が現世に留まる理由は何も無い。レクシル・マクガヴァンの名に於いて命ず。死ね」

「っ！？」

俺が咄嗟に紹介状を提示する間もなく。いつの間にか現れていた、天空を覆い尽す程に巨大な黒雲からは、轟音と共に全てを無に返す？ 白色の稲妻”が、俺に向かって降り注いでいた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2519u/>

優等生は黒の魔術士

2011年11月14日09時03分発行